ISSN2435-838X

独立行政法人日本スポーツ振興センター

ハイパフォーマンススポーツセンター年報

2024

Annual Report of Japan High Performance Sport Center

HPSC JAPAN HIGH PERFORMANCE SPORT CENTER

はじめに



独立行政法人日本スポーツ振興センター
ハイパフォーマンススポーツセンター長
国立スポーツ科学センター所長
久木留　毅

2024 年度はパリ 2024 大会が開催され、日本代表選手団は、素晴らしい成績を挙げました。オリンピックにおいては、金メダル 20 個、メダル総数 45 個を獲得し、海外で開催されたオリンピックでは過去最多のメダル獲得となりました。パラリンピックにおいては、金メダル 14 個、メダル総数 41 個を獲得し、東京 2020 大会の金メダル獲得数 13 個を上回りました。ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）は、国立スポーツ科学センター（JISS）を中心に、アスリートをスポーツ医・科学、情報面から支え、今大会においても様々な形で日本代表選手団の国際競技力向上に寄与するため、様々な事業を行ってきました。

スポーツ医・科学支援では、分野横断・重点化支援として「総合型サポート」を上述の大会に向けて導入し多くの学びを得ました。また、６つの「研究の柱」を新たに設置するとともに、ハイパフォーマンススポーツ研究の推進に努めました。さらに、アスリートウェルビーイングなど新たな国際動向を踏まえたスポーツ診療、アスレティック・リハビリテーション、トレーニング指導、心理、栄養サポートの更なる機能向上と、それらの各エクスパートが協力・協調して連携を組み包括的な活動を行う「トータルコンディショニング」に基づく支援も推進しました。

加えて、国際オリンピック委員会（IOC）オリンピック AI アジェンダや諸外国の動向等も踏まえ、支援・研究において AI を用いた試みも行なっています。今後、HPSC の仕組み化と機能強化を更に進めていくためにも、AI や先端技術を活用したスポーツ医・科学支援は必須となります。併せて、世界における e スポーツ・バーチャルスポーツ分野の急速な進展・変化への対応として、JSC の国際共同研究のパートナーであるワールドローイングと連携し、「バーチャルスポーツフォーラム」の開催をはじめとした e スポーツ・バーチャルスポーツに関する研究・支援への取組も開始しています。

これらの活動について各担当者が本年報に詳しく執筆をしました。2025 年 3 月には、スポーツ庁「持続可能な国際競技力向上プラン」が改定され、HPSC に関係する多くの記載が盛り込まれました。これらの期待に応えるべく、JOC、JPC とも密に連携・協力し、ミラノ・コルティナ 2026 冬季大会をはじめとした国際総合競技大会等に向けて、オリパラ一体で日本代表選手団・競技団体を支援していきます。また、HPSC/JISS スタッフ全員でディスカッションを重ね策定した「JISS プラン 2034」の具現化に向けて、世界で活躍するアスリートを支えるスタッフも世界基準となるよう人材パイプラインの構築を進めていくほか、HPSC で蓄積してきたハイパフォーマンス領域での知見を、大学や企業等と連携しながら地域・社会に展開していく、「ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ」についても引き続き取り組んでいきます。

多くの方々からのご意見を賜り、2025 年度以降の事業に活かしていく所存です。引き続きご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

2025 年 7 月

久木留毅

ハイパフォーマンススポーツセンター 年報 2024

目　次

はじめに
Ⅰ　独立行政法人日本スポーツ振興センター組織図……6
Ⅱ　ハイパフォーマンススポーツセンター実施体制……7
Ⅲ　事業収支報告……8
Ⅳ　ハイパフォーマンススポーツセンター施設の概要……9
1　国立スポーツ科学センター……9
(1) スポーツ科学研究部門関連施設……9
(2) スポーツ医学研究部門関連施設……10
(3) サービス施設……11
(4) 競技別専用練習場……11
2　味の素ナショナルトレーニングセンター……12
(1) 屋内トレーニングセンター・ウエスト……12
(2) 屋内トレーニングセンター・イースト……14
(3) アスリートヴィレッジ……16
(4) 陸上トレーニング場……16
(5) 屋内テニスコート……17
3　その他施設……18
(1) 味の素フィールド西が丘……18
(2) フットサルコート……18
(3) 屋外テニスコート……19
(4) 戸田艇庫……19
Ⅴ　事業報告……20
1　ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024 の開催……20
2　中央競技団体の中長期強化戦略実効化支援……22
3　アスリート育成パスウェイ構築支援……23
4　地域・大学等との連携・協働……25
(1) HPSC ネットワークを通じた医・科学、情報サポートの展開事業……25
(2) 大学等との連携……27
(3) Total Conditioning Research Project NEXT……30
(4) 共同研究……32
5　国際情報戦略事業……33
(1) 情報調査……33
(2) 国際ネットワークのマネジメント……34
(3) 能力開発……36
6　スポーツ医・科学支援事業……37
(1) フィットネスチェック……38
(2) トレーニングサポート……39
(3) 心理サポート……40
(4) 栄養サポート……41
(5) 映像 / 情報技術サポート……42

(6) 総合型サポート……44
(7) ハイパフォーマンス・サポート事業　スポーツ庁委託事業……46
7　スポーツ医・科学研究事業……47
(1) 国際競技力向上に資する研究の推進……47
① 研究の柱……48
1. パフォーマンス構造モデルに基づいた支援プロセスの確立……48
2. デジタル技術・用具の強化活動への実装……49
3. 競技会開催地に応じた特殊環境対策の実装……50
4. スポーツ医学に対する疫学的アプローチの強化……51
5. 社会的背景を考慮したスポーツ科学・医学・情報支援の推進……52
6. 総合型サポートに直結する研究……53
② 特別プロジェクト研究……56
世界陸上 2025 における世界一流および日本代表陸上競技者のパフォーマンスと技術……56
③ 萌芽研究……57
④ 科学研究費助成事業……58
⑤ 民間団体研究助成金等……61
(2) 先端技術を活用した HPSC 基盤強化事業　スポーツ庁委託事業……62
8　スポーツ診療事業……65
9　女性アスリート研究・支援プロジェクト……69
10　外部評価……71
(1) ハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザー……71
(2) ハイパフォーマンススポーツセンター業績評価委員会……72
(3) 国立スポーツ科学センター倫理審査委員会……73
11　ハイパフォーマンススポーツセンター利用状況……74
12　その他事業……80
(1) 普及啓発活動等……80
(2) パラリンピック競技関連の活動……82
(3)「スポーツの日」中央記念行事 / スポーツ祭り 2024……83
Ⅵ　論文掲載・学会発表……84

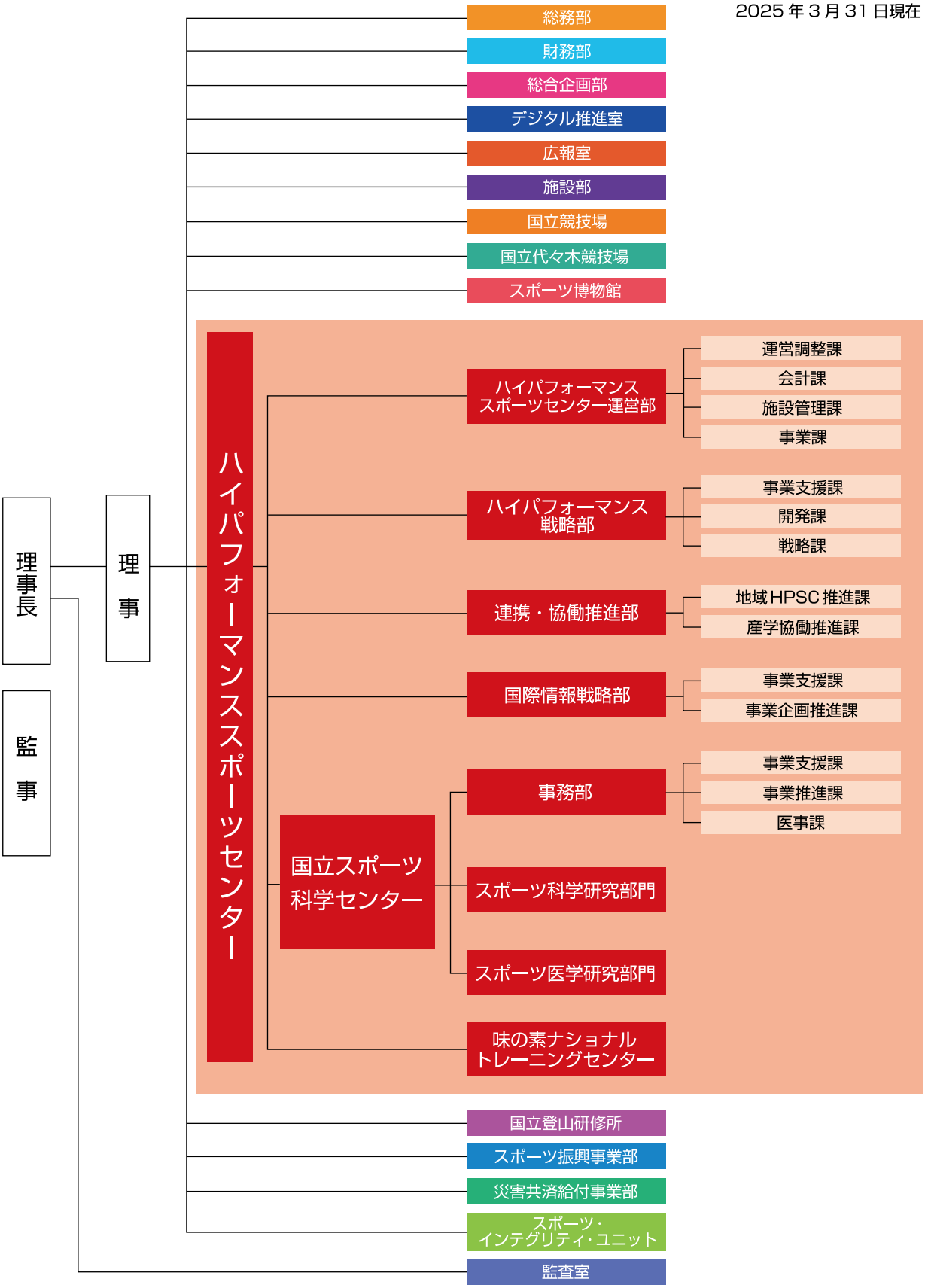




ハイパフォーマンススポーツセンター全景

I 独立行政法人日本スポーツ振興センター組織図

2025年3月31日現在



Ⅱ ハイパフォーマンススポーツセンター実施体制

2025年3月31日現在

ハイパフォーマンススポーツセンター
センター長　久木留　毅
職員数 321名

ハイパフォーマンススポーツセンター運営部
部長　畠野　裕史
職員数 45名

内訳	定員職員	非常勤職員
職員	24	21

ハイパフォーマンス戦略部
部長　日下　光彦
職員数 47名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員	1	2
職員	15	29

連携・協働推進部
部長　白井　克佳
職員数 54名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員		4
職員	15	35

国際情報戦略部
部長　久木留　毅
職員数 14名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員	1	
職員	9	4

国立スポーツ科学センター
所長　久木留　毅
副所長　石毛　勇介
副所長　中嶋　耕平
副所長　星川　雅子
副所長　和久　貴洋
職員数　161名

事務部
部長　伊藤　貴之
職員数 52名

内訳	定員職員	非常勤職員
職員	16	29
受託事業		7

スポーツ科学研究部門
部門長　星川　雅子
職員数 48名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員	19	22
職員		3
受託事業		4

スポーツ医学研究部門
部門長　中嶋　耕平
職員数 61名

内訳	定員職員	非常勤職員
研究員(医師)	6	4
研究員	4	7
職員	11	28
受託事業		1

ナショナルトレーニングセンター
副センター長　岩渕　健輔
副センター長　藤原　正樹
施設長　久木留　毅

その他（非常勤医師、非常勤専門職員等）

HPSC所属の研究員等については、ウェブサイト（https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/）にて公開。
※職員数には部長含む。（併任部長は除く）

（文責　HPSC運営部運営調整課）

Ⅲ 事業収支報告

2024 年度　収入　（自己収入）

（単位：千円）

科　　目	決　算　額
国立スポーツ科学センター運営収入	297,810
ナショナルトレーニングセンター運営収入	777,822
スポーツ及び健康教育普及事業収入	22,307
合　　計	1,097,939

※自己収入と支出との差額分については、運営費交付金等が充当されている。

2024 年度　支出

（単位：千円）

科　　目	決　算　額
国立スポーツ科学センター運営費	1,883,674
ナショナルトレーニングセンター運営費	1,960,008
競技力向上事業費（戦略的強化）	1,404,137
スポーツ及び健康教育普及事業費	136,526
合　　計	5,384,345

※支出の中には定員職員の人件費は含まれていない。

（文責　HPSC 運営部会計課）

Ⅳ ハイパフォーマンススポーツセンター施設の概要

ハイパフォーマンススポーツセンター（以下「HPSC」という。）は、国立スポーツ科学センター、味の素ナショナルトレーニングセンター、味の素フィールド西が丘、フットサルコート、テニス場、戸田艇庫の管理運営を行っている。オリンピック競技とパラリンピック競技を一体的に捉え、スポーツ医・科学、情報等による研究、支援及び高度な科学的トレーニング環境を提供し、国内外のハイパフォーマンススポーツの強化に貢献している。

1　国立スポーツ科学センター

2001 年 10 月に開所した国立スポーツ科学センター（以下「JISS」という。）では、スポーツ医・科学支援事業やスポーツ医・科学研究事業、スポーツ診療事業等の各種事業を迅速かつ効果的に実施するため、最先端の研究設備や医療機器が設置されている。また、トップレベル競技者のためのトレーニング施設等、研究と実践の場を有機的に結合した機能も有している。



（1）スポーツ科学研究部門関連施設

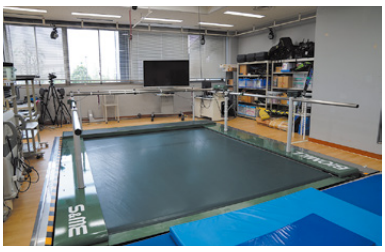
施　設　名	主な設備・機能等
生理学実験室	呼吸循環系機能評価、筋活動記録・評価等
温湿度実験室	温度 0 ～ 40℃、湿度 10 ～ 95%
気圧実験室	大気圧～ 533hPa
生化学実験室	筋肉、血液、唾液、尿を対象とした生化学的分析等
映像編集室	映像編集・エンコード等
体力科学実験室	有酸素性・無酸素性運動能力評価、筋力・筋パワー測定、大型トレッドミル（3m × 4m）
形態計測室	身体組成計測、三次元形態計測
陸上競技実験場	屋内 100m 走路、走幅跳・三段跳用ピット、投てきサークル、埋込型床反力計
バイオメカニクス実験室	自動追尾型三次元動作解析システム、等速性筋力測定装置
風洞実験棟	吹出口サイズ 2.5m × 3.0m、測定部長さ 8m、気流速度 5 ～ 35m/ 秒



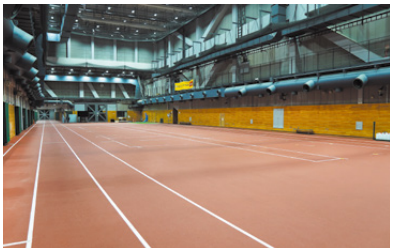
生理学実験室



生化学実験室



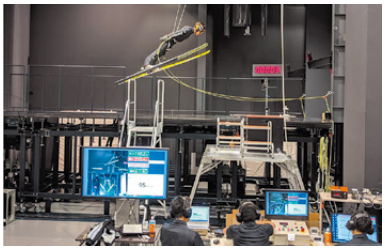
体力科学実験室



陸上競技実験場



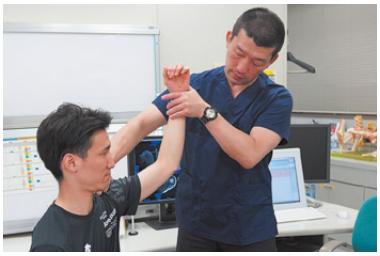
バイオメカニクス実験室



風洞実験棟

（2）スポーツ医学研究部門関連施設

施　設　名	主な設備・機能等
診察室	内科、整形外科、歯科、皮膚科、婦人科、心療内科、脳神経外科
臨床検査室	血液検査、尿検査、呼吸機能、心電図、運動負荷試験等各種臨床検査
薬剤室	調剤、服薬指導、薬剤チェック、ドーピング防止に関する相談
栄養相談室	食事内容の栄養評価、栄養相談・指導
カウンセリング室	心理カウンセリング
画像検査室	単純レントゲン、MRI、CT、骨密度測定
アスリートリハビリテーション室	運動療法、物理療法、水治療法等
コンディショニングスペース	セミナーエリア、相談室、畳エリア
心理学実験室・カウンセリングルーム	脳波、心拍、筋電等の測定、メンタルトレーニングの技法等の指導
トレーニングジムCORE	マシン、フリーウェイト
ハイパフォーマンス・ジム	トレーニング動作計測システム（映像・フォースプレート・各種センサ）、上肢プライオメトリクスマシン、クライミングウォール、トランポリン、酸素濃度制御システム（範囲 18.6 ～ 11.2%）


診察室


薬剤室


栄養相談室


カウンセリング室



画像検査室


アスリートリハビリテーション室


コンディショニングスペース


トレーニングジムCORE


ハイパフォーマンス・ジム

（3）サービス施設

施　設　名	主な設備・機能等
栄養指導食堂　レストラン「R^3」	116 席
宿泊室	客室 73 室（洋室シングル 70 室、洋室ツイン 1 室、和室 2 室）、バリアフリー対応浴室 2 室 ※客室 73 室のうち、低酸素対応室 67 室（酸素濃度制御範囲 16.8 ～ 14.4%）、バリアフリー対応室 15 室
特別会議室	29 席
スポーツ情報サービス室	パソコン（ビデオ編集・インターネット閲覧等）、プリンタ、CD/DVD デュプリケーター、スポーツ関連雑誌
研修室 A・B	57 名収容×1室（A）、42 名収容× 1 室（B）
喫茶室「New Spirit」	33 席（飲み物、軽食、売店）
J-Lounge	ミーティングエリア


栄養指導食堂　レストラン「R^3」


宿泊室


研修室 A・B


スポーツ情報サービス室


喫茶室「New Spirit」


J-Lounge

（4）競技別専用練習場

施　設　名	主な設備・機能等
競泳プール	50 m× 8 コース、水深は可動床により 0 ～ 2 mまで調整可能、水球競技にも対応
アーティスティックスイミングプール	30 m× 25 m、水深 3 m、水中及び水上の音響設備
新体操・トランポリン	新体操：床面 2 面、トランポリン：8 台


競泳プール


アーティスティックスイミングプール


新体操・トランポリン

2 味の素ナショナルトレーニングセンター

味の素ナショナルトレーニングセンター（以下「味の素 NTC」という。）は、2008 年の開所当時は、競技別の専用練習場である「屋内トレーニングセンター・ウエスト（以下「ウエスト」という。）」「陸上トレーニング場」「屋内テニスコート」及び宿泊施設の「アスリートヴィレッジ」から構成されていたが、オリンピック競技とパラリンピック競技の更なる共同利用化を図るために、2019 年 6 月末に味の素「屋内トレーニングセンター・イースト（以下「イースト」という。）」が拡充・整備された。



（1）屋内トレーニングセンター・ウエスト

2008 年 1 月 21 日に開所。2025 年 3 月現在は 9 競技の専用練習場があり、各練習場とも壁面等にはハイビジョンカメラ等が設置され、併設のテクニカルルーム内の機器を用いて、映像分析を行うことが可能である。

階　層	施　設　名	主な設備・機能等
3 階	体操	男子 6 種目、女子 4 種目全ての体操種目の練習が可能
	バレーボール	コート 2 面、コートの素材には、長尺シートを使用
	バドミントン	コート 10 面、空調設備は、バドミントンのシャトルの軌道に影響がないように配慮
2 階	ハンドボール	コート 2 面、コートの素材には、長尺シートを使用
	バスケットボール	コート 2 面、壁面ゴール 4 台設置
	共用コート 2	オリンピック競技（ハンドボール、バスケットボール、バレーボール、バドミントン）や、一部のパラリンピック競技の練習が可能、コートの素材には長尺シートを使用
1 階	柔道場	6 面分、833 畳、肋木及びクライミングロープを設置
	研修室	大小合わせて合計 7 室、プロジェクター、音響設備 ※同時通訳機器（有料）を利用可能（最大 4ch、受信機 350 機）
	共用コート 1	競技を問わず多目的な使用が可能
地下 1 階	ボクシング	常設リング 1 台（仮設リングの増設も可能）、パンチングボール、サンドバッグ等を設置
	ウエイトリフティング	競技プラットフォームが 1 面、練習用のプラットフォームが 13 面設置、フォースプレート（床反力計）を 4 枚設置
	レスリング	レスリングマット 6 面設置、壁面及び天井のハイビジョンカメラ等と、併設のテクニカルルーム内の機器により、映像分析が可能、肋木、クライミングロープ、鉄棒を設置
	トレーニングジム WEST	各種トレーニングマシンを設置、専門スタッフが常駐
	25 m プール	4 コース、水深 1.3 m、ジャグジーと人工炭酸泉浴槽を併設（リラックス、リハビリテーションを目的）
各階	アスリートラウンジ	リラックススペース、異種競技間での交流･情報交換が可能、製氷機、自動販売機等設置

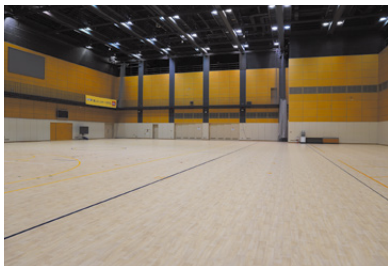

体操


バレーボール


バドミントン


ハンドボール


バスケットボール


共用コート 2

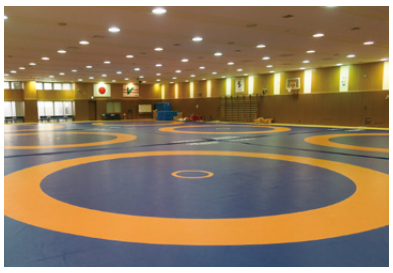

柔道場


小研修室


大研修室


ボクシング


ウエイトリフティング


レスリング


トレーニングジム WEST


25m プール


アスリートラウンジ

（2）屋内トレーニングセンター・イースト

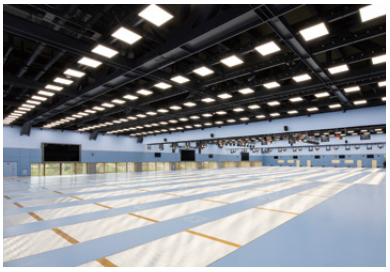
2019 年 6 月末に竣工。オリンピック競技とパラリンピック競技の共同利用を踏まえたユニバーサルデザインに考慮した設計となっている。

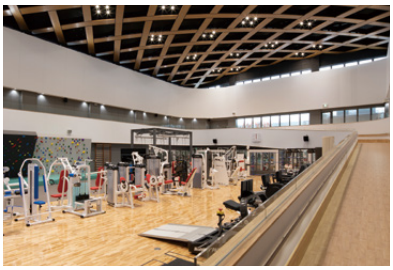
アスリートは 5 つの専用練習場や共用コートでのトレーニングに加え、食事、宿泊及びリカバリーを同一の建物内で行うことができる。



階　層	施　設　名	主な設備・機能等
6,4,2 階	見学コース	高さ体感展示、スポーツ医・科学に関する展示等
5 階	アーチェリー	屋内・屋外射場両方から 70 mの射長を確保し、標的 12・最大 36 人が並んで練習可能、夜間照明設備を有し、屋内射場のガラス戸を開放することで、夜間や降雨時にも練習可能、また、屋外射場には横風を発生させる設備を設置
	トレーニングジム EAST	パラアスリートの利用にも対応した各種マシンをはじめ、クライミングウォール、フリーウェイトエリア、6 階ランニングコースとそれに続く巨大なスロープを設置
	卓球	最大 28 面程度設置可能、電動間仕切にて全体を 3 つのエリアに分割可能、壁面の 200 インチプロジェクタースクリーンにハイビジョンカメラで撮影した競技映像を映し出すことが可能
4 階	診察室・トレーナールーム	トレーナーによる施術が可能
	ドーピングコントロール室	個室 3 部屋、待合室
3 階	フェンシング	30 ピスト設置、電動間仕切にて 3 エリアに分割可能、ピスト、リール等を床埋込式とし、フラットな床面を実現
	リカバリーエリア	交代浴、クライオセラピーを設置、チーム（複数人）での利用も可能
2 階	会議室	3 室（定員各 30 席規模）※3 室を一体として利用可能
	ミーティングルーム	6 室（定員各 12 ～ 16 席規模）※2 室を一体として利用可能
1 階	水泳	50 m × 10 レーン、水深 3 m、流水プール（埋込）、人工炭酸泉設備を併設、地下ピットの観察窓と水泳場内のカメラから水中動作の映像を収録可能
	共用コート（A,B,C,D）	パラリンピック競技（車いすバスケットボール、シッティングバレーボール、ボッチャ、ゴールボール、パワーリフティング、車いすラグビー等）や、一部のオリンピック競技の練習が可能、A、B は約 42m × 23m、C、D は電動間仕切りを収納し約 44m × 48m の大空間として利用可能
	レストラン	車いす利用にも対応したテーブルを設置、レストラン R³ や SAKURA Dining 同様、競技者栄養評価システム（mellon Ⅱ）が利用可能、全 96 席

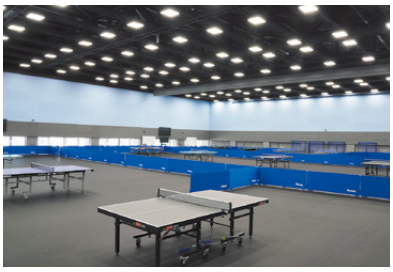
階　層	施　設　名	主な設備・機能等
地下 1 階	射撃	25m/50m 射場は 15 射座、10m 射場には 25 射座を備え、最新の電子標的システムを使用
2 ～ 5 階	アスリートラウンジ	リラックススペース、異種競技間での交流・情報交換が可能、自動販売機等設置
2 ～ 4 階	宿泊室	シングル・ツイン・コネクト・和室、143 名の宿泊が可能
2 階	託児室	未就学児対象、受入人数 3 名まで


フェンシング


トレーニングジム EAST


アーチェリー


共用コート


卓球


交代浴



射撃

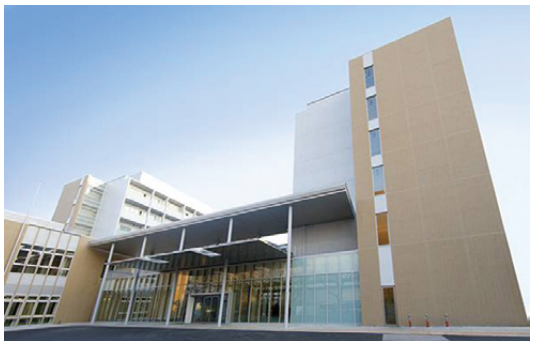

水泳


レストラン

（3）アスリートヴィレッジ

ナショナルチームの様々な合宿形態に合わせ、シングルルーム、ツインルーム、和室のほか、チーム単位での宿泊も可能なマンションタイプ（リビングを中心に、シングルルーム、トリプルルーム、シャワールーム等で構成）などの宿泊室を有しており、448 名の人員が宿泊可能。

宿泊室のほか、大浴場（勝湯）や食堂（SAKURA Dining）、託児室も併設されている。





宿泊室　洋室



食堂　SAKURA Dining



大浴場　勝湯

（4）陸上トレーニング場

屋根付きの全天候型 400m トラック（6 コース）。トラックには照明設備付の屋根があり、夜間、雨天時の練習にも対応している。トラックの内側には、天然芝で、跳躍、投てき各種目の練習施設のほか、砂場走路、さらに外周にはインラインスケート・スキー走路等が整備され、様々な競技のトレーニングに対応可能である。



屋根付きトラック



全体

（5）屋内テニスコート

全米オープンテニス会場と同様のハードコート 2 面、全仏オープンテニス会場（ローランギャロス）と同様のレッドクレイコート 2 面の計 4 面を備えている。高所からの指導や映像分析のためのキャットウォークも設置され、天井のハイビジョンカメラ等と、併設のテクニカルルーム内の機器を用い、映像分析を行うことができる。また、環境への配慮から、外壁面緑化も施されている。



ハードコート



レッドクレイコート

3 その他施設

（1）味の素フィールド西が丘

1972 年、国立西が丘競技場は、サッカー専用競技場として建設された。国際試合、天皇杯予選、全日本大学選手権、関東大学リーグ、全日本女子選手権、全国高校選手権などに幅広く利用されている。2012 年に、ネーミングライツを導入し、施設名が「味の素フィールド西が丘」となっている。



建築面積	1,186.65m²(スタンド面積 3,460m²)
延べ面積	997.17m²
芝生面積	10,614m²(サッカーコート 105m × 68m) 夏芝：ティフトン、冬芝：ペレニアルライグラスで通年緑化を実施。
収容人員	個席 =5,073 立見席 =2,180 障害者席 =5 合計収容人員 =7,258 人 夜間照明：約 1,500 ルクス
その他	大会主催者の控え室として利用される大会本部室、選手更衣室 4 室、飲食売店（A ゲート）を設置。

（2）フットサルコート

会員登録を行った団体が利用可能。会員登録は年度更新である。



芝生面積	1,080m²（フットサルコート 15 m×25 m）
コート数	全天候型人工芝 2 面（A,B）
更衣室	ロッカー男女各 24 台、シャワー 2 室。
その他	夜間照明：約 330 ルクス

（3）屋外テニスコート

年度ごとに年間利用者の募集を行い、年間利用の申込をされた一般利用者が利用可能である。

コート数	砂入り人工芝 8 面
ロッカールーム	ロッカー男女各 54 台、シャワー 1F 男女各 6 室、2F 男女各 2 室



屋外テニスコート



クラブハウス

（4）戸田艇庫

戸田ボートコース（埼玉県戸田市）付近において艇庫及び合宿施設を運営し、トップアスリート、大学・高校生、その他のボート競技者に利用されている。

建築面積等	2,099㎡（延べ 3,954㎡） 鉄骨造　二階建
艇格納数	200 艇程度
合宿室	19 室
宿泊定員	240 人



艇庫前



艇庫内



合宿施設 食堂

（文責　HPSC 運営部施設管理課）

Ⅴ 事業報告

1　ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024 の開催

1. 開催概要

ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンスは、HPSC として日本のハイパフォーマンススポーツにおける競技力向上及びそれに寄与する取組を推進することを目的に、2017 年度から実施している。

第 8 回目となる 2024 年度は、2019 年以来となる会場開催のみの形で行い、全てのセッションでオンデマンド配信を実施した。

会場開催
日　時：2024 年 12 月 11 日（水）・12 日（木）
会　場：味の素 NTC・ウエスト 1 階大研修室、研修室 1 ～ 4
テーマ：Performance Optimization in Paris
～コンディションの最適化とパフォーマンスの最大化～
オンデマンド配信
日　時：2024 年 12 月 26 日（木）から
2025 年 1 月 31 日（金）まで



写真 1　会場開催の様子



写真 2　オンデマンド配信（視聴画面）

2. 実施内容

(1) セッションⒶ
『パリオリンピック・パラリンピックへ向けた総合型サポート』

JISS スポーツ医・科学支援事業において実施している「総合型サポート」について、競泳、トランポリン、パラ陸上の 3 種目に対する活動事例を紹介し、長期的な視点で JISS ならではの支援によって得られた知見を、競技団体等に展開していく仕組みについても考えていく必要があることを議論した。

(2) セッションⒷ
『Female Athletes Research & Support Team（FARST）の新たな取り組み～女性アスリート研究・支援の現場から～』

FARST で現在取り組んでいるプログラム「女性アスリートトータルサポート」と「妊娠期・産後トータルサポート」の報告・事例紹介を行い、パネルディスカッションでは、より利用しやすい支援環境の整備の必要性を改めて確認した。

(3) セッションⒸ
『パフォーマンス最大化のためのスポーツテクノロジー』

スポーツ科学とテクノロジーの融合がもたらすパフォーマンス最大化の可能性を探るべく、競技スポーツのテクノロジー実装と活用に焦点を当て、3 名の専門家がシューズ開発やゲーム分析、映像解析の最新知見を紹介した。

(4) セッションⒹ
『アスリート育成・強化戦略の最適化』

アスリートがどのようにして国際舞台で活躍できる水準に到達するのかを、フェンシング競技を事例に振り返り、パリ 2024 大会に向けた中央競技団体（以下「NF」という。）における中長期の育成・強化戦略とそれを支える地域タレント発掘・育成事業の重要性を紹介した。

(5) セッションⒺ
『パラリンピック柔道選手のトータルコンディショニングサポート ～ ACL 再建術後からパリ大会銀メダル獲得までの 2 年間～』

パリ 2024 パラリンピックにおいて銀メダルを獲得した柔道選手がパラリンピック出場に至るまでの約 2 年間のトータルコンディショニングサポートにおける成果と今後の課題について、紹介し、情報交換を行った。

(6) セッションⒻ
『将来を見据えたトータルコンディショニング支

援のあり方を考えよう「10 年先のトータルコンディショニング支援とは？」』

4 名の海外有識者を招へいし、分野融合（Interdisciplinary）型トータルコンディショニング支援を行う上での主な課題や 10 年先の支援のあり方を議論した。

(7)『HPSC 支援 / 研究アワード 2023 受賞講演』

HPSC 支援 / 研究アワード 2023 受賞者 2 名が受賞対象となった支援・研究について講演を行った。

3. 運営等

会場開催当日は 216 名（実人数、招待者を含む。）が参加し、一部のセッションにおいては同時通訳を行った。

サブ会場では、協賛社・独立行政法人日本スポーツ振興センター（以下「JSC」という。）事業紹介ブースをはじめ、スポーツ庁「先端的スポーツ医・科学研究推進事業」を受託している 3 大学と連携し、学生・教員によるポスター発表も実施した。

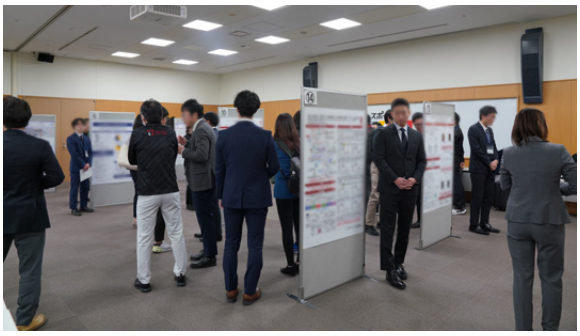


写真 3　サブ会場の様子

会場開催後は、HPSC ウェブサイトでオンデマンド配信を行い、計 3,366 回視聴された。

4. 広報・協賛・後援等

広報については、2024 年 7 月の特設ウェブサイトの公開からオンデマンド配信終了まで、HPSC の X による情報発信を計 28 回実施した。会場開催時には JSC 各部署（スポーツ振興事業部、スポーツ・インテグリティ・ユニット、災害共済給付事業部）と連携し、各種刊行物の設置・配布を行った。また、会場及びオンデマンド配信ではスポーツくじの CM 動画やスポーツ・インテグリティに関する PR 動画を放映・配信した。

企業協賛については、計 10 社獲得することができた。主な協賛特典として、本カンファレンスのウェブサイトへの企業名表記やリンクバナーの設置、オンデマンド配信時の企業ロゴマークの表示、施設見学等を行った。

後援については、2023 年度同様 4 団体（スポーツ庁、公益財団法人日本オリンピック委員会（以下「JOC」という。）、公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会（以下「JPC」という。）及び公益財団法人日本スポーツ協会（以下「JSPO」という。））から受けた。

5. まとめ

会場開催参加者を対象とした事後アンケートでは、「最先端のサポート成果、課題について知ることができた」などの声があり、回答者の 97.8% がカンファレンスの内容に「満足」・「やや満足」と回答。多くの参加者に対し、有益な情報を発信できたと考えられる。

また、サブ会場では登壇者や HPSC スタッフと参加者との活発な意見交換が行われており、交流の機会を設けることができた。

今後も HPSC だからこそできる情報発信を行うなど、日本の国際競技力向上に資するカンファレンスとなるよう努めていく。

（文責　連携・協働推進部産学協働推進課）

2　中央競技団体の中長期強化戦略実効化支援

1. 協働チームによる強化戦略プランの実効化を支援する取組

本事業は、JSC、JOC、JPC で構成され HPSC に設置される「協働チーム」が、各 NF の策定する直近及び 2 大会先のオリンピック・パラリンピック競技大会を見据えた強化戦略プランの実効化を支援することを目的とする。協働チームは、強化戦略プランの PDCA サイクルの各段階で多面的に支援している。



図　協働チームによる NF の中長期強化戦略を支援する枠組み

2. 強化戦略プランに基づく NF との対話

NF のハイパフォーマンスディレクター（HPD）をはじめとする強化責任者を中心とした関係者との対話を通じて、主な活動として、夏季 NF については、パリ 2024 大会の検証に向けて共に振り返りを行うとともに、ロサンゼルス 2028 大会やブリスベン 2032 大会に向けた強化戦略プランの策定（更新）の支援を行った。冬季 NF については、ミラノ・コルティナ 2026 大会や 2030 大会に向けた強化戦略の進捗状況の確認等を行った。

HPSC や NF の強化現場を中心に、パリ 2024 大会も含め年間を通じて NF との対話機会を創出し、本活動を通じて得られた情報は後述するコンサルテーション等に活用した。

3. 協働チームによるコンサルテーションの実施

夏季及び冬季 NF が推進する強化戦略プランの計画性・実行性（マイルストーン含む）の検証等を NF と協働チーム間で行うための会議（協働コンサルテーション）を 101 競技・種別に対して実施した。

本会議では、各 NF がオリンピックやパラリンピック競技大会に向けて設定する中長期の目標達成に向けたマイルストーン、戦略の進捗状況等を確認している。また、日常的な対話を通じて得られた情報や近年における各 NF の国際競技力に係る情報等も活用し、協働チームは強化戦略プランに記載された目標を達成するための課題を明確にし、課題解決につながる情報を NF に提示している。

夏季 NF については、パリ 2024 大会の結果を踏まえ、強化戦略プランの計画及び実行状況を 8 年前のプラン策定時から振り返るとともに、ロサンゼルス 2028 大会以降を見据えた戦略の進捗状況等を確認した。

4. 協働チームの取組の振り返りや支援活動の見直し

2024 年度は、パリ 2024 大会の開催により、各 NF が設定したオリンピック・パラリンピック競技大会の目標の達成状況等を確認する機会となった。本事業としても、リオ 2016 大会以降実施してきた取組の振り返りを行い、これまで強化戦略プランの PDCA サイクル各段階における多面的な支援活動を実施してきた結果、強化戦略プランの計画性及び実効性の向上が確認できた。

支援活動の見直しにあたっては、「強化戦略プランを組織内で共有するのが難しい」「自由記載よりは記載項目が構造化されていた方がよい」といった NF の声も踏まえ、NF 自身の現状分析、戦略策定、モニタリング・評価、関係者への共有等において改善できるよう、また、協働チームにおいても NF の活動内容や課題等をより把握できるようにするため、記載項目を細分化するなどロサンゼルス 2028 大会及びブリスベン 2032 大会向けの強化戦略プランのフォーマットの改訂を行った。

5. 強化戦略プランの PDCA サイクル促進に向けて

夏季 NF については、パリ 2024 大会が終了し、ロサンゼルス 2028 大会及びブリスベン 2032 大会に向けた強化戦略プランの策定（更新）に先立ち、協働チームとして、説明会を実施した。本会では、強化戦略プランの目的・活用方法、フォーマットの変更点や策定に係る教材の紹介等を行った。

また、説明会での情報提供に加えて、強化戦略プランの個別相談会を実施し、策定に関する質問・相談等に対応した。相談会では強化戦略プラン記載項目における「1. 方針」「2. 現状分析」に関する質問が多く寄せられた。「相談事項は全て解決しましたか」の問いに対して、相談会に参加した全ての NF から「解決した」の回答が得られたことから、参加した NF において、ロサンゼルス 2028 大会及びブリスベン 2032 大会に向けた強化体制において強化戦略プランに関する共通理解が得られたものと考える。

今後に向けては、協働チームにおける取組の振り返りを踏まえ、協働チームで情報共有や方針を検討し、強化戦略プランの進捗状況の確認、情報提供及び協働コンサルテーションを通じた課題解決について、NF の取組状況に応じた支援等を行い、NF の中長期の強化戦略プランの実効化を支援していくことで戦略的な選手の発掘・育成・強化、持続可能な国際競技力向上への貢献を目指す。

（文責　ハイパフォーマンス戦略部戦略課）

3　アスリート育成パスウェイの構築支援

1. 概要

本事業は、NF 等が行うアスリートの発掘・育成・強化の取組が持続可能なシステムとなり、世界で活躍するアスリートが継続的に輩出されるよう、JOC、JPC、JSPO 等と連携し、競技別パスウェイモデルの策定支援及び各競技団体の現状把握や課題解決に資するプログラムの提供等の支援を行っている。

2. 実施内容

(1) エビデンスに基づく競技別パスウェイモデル構築の支援

①競技別パスウェイモデルの策定支援

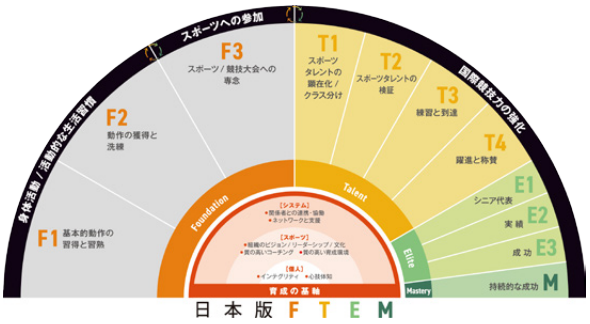


図　スポーツとアスリート育成の枠組み「日本版 FTEM」

第 3 期スポーツ基本計画に則り、スポーツとアスリート育成の包括的な枠組み「日本版 FTEM」(図) を活用した各 NF が発掘から育成・強化までを一貫して行うアスリート育成パスウェイの構築支援を行った。特に 2024 年度は「アスリート育成パスウェイの構築・活用のためのワークショップ」を年 6 回開催し、35 競技・種別（オリンピック競技 29 競技・種別、パラリンピック競技 6 競技・種別）延べ 333 名が参加した。各 NF はワークショップ参加に当たり NF におけるパスウェイの現状を把握するためのツール「パスウェイヘルスチェック」を実施し、各競技・種別の課題を明確にした上で臨んだ。また、ワークショップに参加した NF のうち、24 競技・種別（オリンピック競技 20 競技・種別、パラリンピック競技 4 競技・種別）により、「パスウェイマップ（コーチ・関係者向け）」が構築された。今後もより多くの NF への概念の普及と競技別パスウェイモデルの構築を目指す。

②パスウェイ教育プログラムの推進

パスウェイ教育プログラムは、スポーツタレントに対し、「アスリートライフスタイル」について考え、学ぶ機会を提供するものである。2024 年度は、10 地域で 420 名に対してプログラムを提供した。また、パスウェイ教育プログラム推進会議を開催し、内容や提供方法について議論を行い、アスリートライフスタイルプログラムを HPSC が有する知見をパッケージ化した「HPSC パッケージ」として再構成するための整理・調整を行った。

(2) 地域タレント発掘・育成事業との連携

JSC は、地方公共団体等が実施する地域タレント発掘・育成（TID）事業や競技団体等との連携・協働のプラットフォームとしてワールドクラス・パスウェイ・ネットワーク（WPN) を設置し、2025 年 3 月時点で 47 の地域が加入している。

WPN 加入地域に対しては、HPSC で実施している事業や他地域の活動等に関する情報共有の一環として WPN ニュースをメール配信（15 投稿）しているほか、オンラインも活用して 5 月に新任者向け事業説明会（26 地域･43 名参加)、6 月に連絡会議（37 地域・82 名参加)、12 月に連携会議（39 地域・78 名参加）を開催した。2024 年 12 月 5、6 日に開催した連携会議では、1 日目に「地域から国際舞台で活躍するアスリートを輩出するための取組を考えよう」をテーマに京都府、和歌山県、NF（ラグビー）のキーパーソンによるトークセッションやワーク、2 日目に「ハイパフォーマンススポーツセンターネットワークを通じた医・科学、情報サポートの展開」をテーマに、連携･協働推進部と連携し、HPSC パッケージ（栄養・心理）や人材検索データベースの活用について情報提供した。また、随時、個別の相談等（31 件）にも対応した。



写真 1　WPN 連携会議の様子

(3) データを活用した発掘システムの構築

アスリートの体力測定や競技成績に関するデータを、アスリート育成パスウェイの軌跡として集約・活用するためのプラットフォームとして構築した「アスリートパスウェイシステム（APS)」が、NF によるアスリートの発掘に活用された。また、WPN 加入地域向けに所属スポーツタレントへの説明会を実施し、APS の認知度向上に努めた。APS 登録アカウント数は、地域 TID 事業 23 団体 51 人、NF23 団体 35 競技･種別 67 人、アスリート 3175 人（オリンピック競技 3113 人、パラリンピック競技 62 人）となった。(2025 年 3 月 31 日時点)

(4) ジャパン・ライジング・スター・プロジェクト（J-STAR プロジェクト）

本プロジェクトは全国規模のタレント発掘・検証を実施するプロジェクトで、2017 年度から 2020 年度まで JSPO に委託し、スポーツ庁、JOC、公益財団法人日本パラスポーツ協会（以下「JPSA」という。）、JPC、NF 及び地方公共団体等と連携して実施してきた。2021 年度から、オリンピック競技は JSC が、パラリンピック競技は JSC から JPSA に委託をして実施している。

2024 年度は、オリンピック競技については委託した 11 競技・種別が APS を活用し、スポーツタレント候補が居住する地域指導者と連携しながら発掘プログラムを実施した。APS 登録アスリートのうち、J-STAR プロジェクトスカウト対象期間に NF からのスカウトを希望した者から NF によるデータ選考を経て、延べ 176 名が発掘プログラムに参加した。最終的には 10 競技・種別 52 名が今後 NF による育成プログラムによって育成されていくこととなった。

パラリンピック競技（8 期）については夏冬パラリンピック実施 28 競技を対象に、全国 9 ブロックで基礎測定会を実施した。エントリー総数は 231 名だった。基礎測定会で選出されたスポーツタレント候補のうち延べ 92 名が専門測定を含む検証プログラムに参加しており、最終的には 14 競技・種別で延べ 32 名が今後 NF による育成プログラムによって育成されていくこととなった。

パリ 2024 大会では、J-STAR プロジェクトで発掘されたアスリート 1 名（自転車トラック）が初めてオリンピック競技に出場した。また、パラリンピック競技では、J-STAR プロジェクトで発掘されたアスリート 8 名が出場し、ゴールボールで金メダル、水泳で銅メダルを獲得した。



写真 2　発掘プログラム（ホッケー）の様子

(5) 課題解決型プログラムによるアスリート育成パスウェイ構築への支援

持続可能な競技力の向上には、アスリートの発掘・育成・強化の取組のシステム化・プログラム化に向けたアスリート育成パスウェイの構築が欠かせない。このため、2023 年度から「課題解決型アスリート育成パスウェイ構築支援プログラム」を実施し、これまで各段階で個別に実施してきた戦略的強化を一体的なプログラム構造で取り組んだ。

2024 年度も引き続き、メダルポテンシャルスポーツ育成のための持続可能なシステム構築支援（システム構築）に 10 競技・種別、地方公共団体と連携した育成環境の整備（環境整備）に 4 競技・種別を対象に事業を委託した（表）。

表　課題解決型プログラム対象競技一覧

システム構築（10）
【オリンピック競技（7）】 7人制ラグビー女子、スポーツクライミング、スキークロス、スケルトン、スノーボード・ハーフパイプ、トライアスロン、フェンシング（男子サーブル） 【パラリンピック競技（3）】 車いすバスケットボール、水泳、トライアスロン
環境整備（4）
【オリンピック競技（2）】 エアリアル、スケートボード 【パラリンピック競技（2）】 卓球、陸上

システム構築では、強化戦略プランの 8 年プランから対象アスリートを選出し、育成のための持続可能なシステムの礎を築くことで、4 年プランへの引き上げを目指した。また、環境整備では、継続的なタレントの輩出・育成環境の整備を目指し、NF が地方自治体・都道府県競技団体（以下「PF」という。）と協働し、13 地域の地方自治体との連携を構築した。

夏季競技は 2024 年度で委託期間が終了となるが、スポーツクライミング及びパラ水泳において、育成プログラムの実施を通じて蓄積された知見を活用し、日本版 FTEM に基づくアスリート育成パスウェイに沿った指導教本を作成した。この指導教本により、育成プログラムの内容が平準化され、NF が有する指導ノウハウを地域の指導者も活用できるようになり、育成プログラムの高度化が期待できる。また、7 人制ラグビー女子において、高校生年代を対象に実施した育成プログラムの成果測定のため、ユース世代の主要な国際大会（グローバル・ユース・セブンス）に出場し、強豪国であるニュージーランド、オーストラリアに勝利し、優勝した。冬季競技では、スノーボード・ハーフパイプにおいて、これまで NF がアプローチできていなかった低年齢の選手を対象とした育成プログラムを実施した結果、対象選手が 2025 年世界選手権に出場し、銀メダルを獲得した。なお、事業の検証・評価では、委託した全 NF がアスリート育成パスウェイに関わる課題が解決している傾向にあることを確認した。

（文責 ハイパフォーマンス戦略部開発課）

4　地域・大学等との連携・協働

(1) HPSC ネットワークを通じた医・科学、情報サポートの展開事業

1. 事業概要

2018 ～ 2022 年度の 5 年間で実施してきた「ハイパフォーマンススポーツセンターネットワークの構築」事業においては、競技力向上事業の一環として、NF 等が実施するアスリートの発掘・育成・強化活動を、競技団体が必要とする場所・タイミングで包括的に支援するため、国内にある地域のスポーツ医・科学センター、大学、NTC 競技別強化拠点等のネットワーク化とこれを推進する人材の育成を進めた。

2023 ～ 2027 年度の 5 年間の実施予定として新たに開始した「ハイパフォーマンススポーツセンターネットワークを通じた医・科学、情報サポートの展開」事業では、2022 年度までに構築してきた HPSC ネットワークを基盤として、HPSC が行ってきたスポーツ医・科学、情報サポートの事例や知見をパッケージ化した「HPSC パッケージ」を全国に展開し、地域におけるトップアスリートのサポート環境の整備とサポート・スペシャリストの養成を促進することで、質の高いサポートが全国各地でシームレスに実施されるような環境の構築を目的としている。

2. 実施内容

(1) 連携機関指定等による地域でのサポート環境の整備

HPSC では、全国各地の大学、スポーツ医・科学センター等を対象に、一定の要件を満たす機関について、「連携機関（アスリート支援）」として指定を進めている。

連携機関（アスリート支援：体力測定）には、①形態、②身体組成、③筋力、④有酸素性能力の 4 つの測定項目を設けており、測定項目ごとに、HPSC とのデータ共有が可能な測定機器を定めている。連携機関（アスリート支援：体力測定）として指定を受けるためには、測定機器の保有とともに、アスリートを対象とした測定実績や、測定マニュアルの整備など、HPSC が定める一定の要件を満たす必要がある。

また、連携機関（アスリート支援：FAAB）は、スポーツ外傷・障害予防のための姿勢チェック（FAAB）を実施できる機関のことで、連携機関（アスリート支援：体力測定）と同様に、指定を受けるためには、測定機器の保有など、HPSC が定める一定の要件を満たす必要がある。

2024 年度は、既に連携機関（アスリート支援：体力測定）として指定済みであった 2 機関を含む 4 つの機関に対し、連携機関（アスリート支援：FAAB）の指定を行った。また、連携機関（アスリート支援）の指定に関心を持つ大学、スポーツ医・科学センター等の機関に対し、新規指定に向けた情報提供・情報交換、当該機関の視察等の連携活動を進めた。

スポーツ庁委託事業「地域におけるスポーツ医・科学サポート体制構築事業」において設立された 5 地域のスポーツ医・科学コンソーシアムとの関係においては、2023 年度から継続して、定期的な情報交換、HPSC 施設の視察対応、構成団体への往訪といった連携活動を進めた。

表 1 は、2025 年 3 月時点での HPSC ネットワーク連携機関（アスリート支援）の一覧で、連携機関（アスリート支援：体力測定）は合計 17 機関、連携機関（アスリート支援：FAAB）は 10 機関となっている。

表 1　連携機関（アスリート支援）一覧（2025 年 3 月時点）

No.	連携機関（アスリート支援）機関名	体力測定	FAAB
1	北海道立総合体育センター北海きたえーる	○	
2	北翔大学	○	○※
3	青森県スポーツ科学センター	○	
4	とちぎスポーツ医科学センター	○	
5	千葉県総合スポーツセンター	○	○
6	国際武道大学	○	
7	帝京大学スポーツ医科学センター	○	
8	横浜市スポーツ医科学センター	○	
9	山梨学院大学スポーツ科学部	○	
10	新潟医療福祉大学		○※
11	新潟リハビリテーション病院		○※
12	新潟県健康づくり・スポーツ医科学センター	○	○※
13	富山県総合体育センター	○	○
14	びわこ成蹊スポーツ大学	○	○
15	立命館大学スポーツ健康科学部	○	○
16	京都トレーニングセンター	○	○
17	大阪体育大学	○	
18	公立大学法人和歌山県立医科大学 みらい医療推進センターげんき開発研究所	○	○
19	高知県スポーツ科学センター	○	

※ 2024 年度に指定を行った機関

(2) HPSC パッケージの開発・研修プログラムの実施

2024 年度も引き続き、HPSC パッケージの開発を進めた。併行して、既存の HPSC パッケージのリニューアルを進めた。また、HPSC が実施する研修プログラムを修了した外部のサポート・スペシャリストにより、各地の競技現場で活動する NF、PF、各地域の TID 事業参加者等に対して、HPSC パッケージを用いた講習会に活用され、地域において質の高いサポートが全国各地でシームレスに実施されるような体制の構築を進めた。

表 2 は、2025 年 3 月時点での HPSC パッケージの一覧で、2024 年度には 1 件の HPSC パッケージを新たに開発し、合計 5 分野 14 件となった。

表 2　HPSC パッケージ一覧（2025 年 3 月時点）

No.	分野	HPSC パッケージ名
1	体力測定	JISS フィットネスチェック
2	栄養	アスリートのための食事の基本
3		アスリートのための水分摂取・脱水対策
4		アスリートのための貧血予防
5		アスリートのための食事の基本ジュニア版
6		アスリートのためのウエイトコントロール
7		アスリートのための遠征時の食事
8		アスリートのための試合期の食事
9	心理	チームビルディング
10		アスリートのためのメンタルトレーニング基礎編（メンタルトレーニング技法の獲得）
11		アスリートのためのメンタルトレーニング応用編（メンタルトレーニング技法の活用法）
12	映像・情報技術	JISS Air
13		JISS strobo
14	障害予防	姿勢チェック（FAAB）

また、表 3 は、各パッケージの研修プログラム修了者（サポート・スペシャリスト）数の一覧である。

表 3　HPSC 外部のサポート・スペシャリスト数一覧（2025 年 3 月時点）

No.	HPSC パッケージ名	人数
1	JISS フィットネスチェック	30 名
2	アスリートのための食事の基本	70 名
3	アスリートのための水分摂取・脱水対策	67 名
4	アスリートのための貧血予防	67 名
5	アスリートのための食事の基本ジュニア版	69 名
6	アスリートのためのウエイトコントロール	66 名
7	アスリートのための遠征時の食事	63 名
8	アスリートのための試合期の食事	52 名
9	チームビルディング	38 名
10	アスリートのためのメンタルトレーニング基礎編（メンタルトレーニング技法の獲得）	26 名
11	アスリートのためのメンタルトレーニング応用編（メンタルトレーニング技法の活用法）	12 名
12	JISS Air	74 名
13	JISS strobo	17 名
14	姿勢チェック（FAAB）	31 名



写真 1　連携機関・北海道立総合体育センター北海きたえーるでの JISS フィットネスチェックの様子

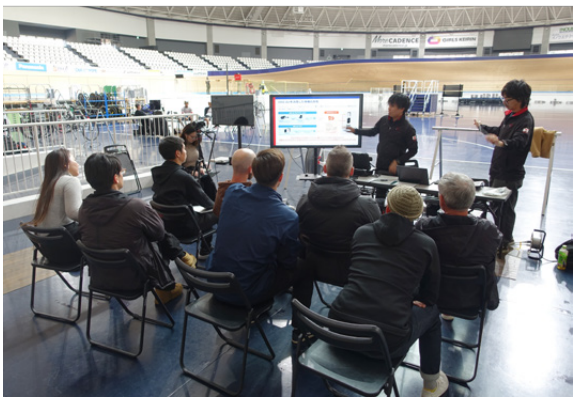


写真 2　NTC 競技別強化拠点・日本サイクルスポーツセンターでの映像・情報技術分野研修プログラムの様子

（3）研究分野の外部連携

連携・協働推進部にリサーチアドミニストレーターを配置し、研究戦略支援（HPSC の研究に係る調査や分析、整理等）、研究推進支援（外部機関に向けた窓口、共同研究に係る調整・実績管理や研究に有用な情報収集等）、研修企画支援（HPSC における研修やセミナーに係る調整）、研究広報等（研究成果の発信に係る調整等）を担当し、HPSC における研究活動の効率化や外部機関との連携促進を図った。

また、2022 年度から 5 年間の予定でスポーツ庁が実施している「先端的スポーツ医・科学研究推進事業」において採択された 3 大学との、研究情報の交換や、人事交流をはじめとした若手研究者育成プログラムに関する HPSC との連携を促進するため、リサーチアドミニストレーターが各大学との調整を実施した。

他に、研究機関や民間企業等からの技術提案や製品紹介について、リサーチアドミニストレーターが窓口となり HPSC の研究者等との連携・調整を進めた。

リサーチアドミニストレーター自身の活動としては、一般社団法人リサーチ・アドミニストレーション協議会年次大会や各種研修等に参加し、大学リサーチアドミニストレーター（URA）に関する基本的な業務に関する情報や知識を習得したほか、他機関の URA とコミュニケーションを図り、大学等研究機関の URA の取組事例について情報収集を行い、HPSC 内の還元に努めた。

（文責　HPSC ネットワーク事業・企画 WG）

(2) 大学等との連携

1. はじめに

国際競技力の向上のための取組として、JSC 第5期中期計画に掲げられる「HPSC の場を活用した実践機会の提供」、「スポーツ医・科学、情報等による研究・支援を担う人材育成」等を推進するため、連携協定を締結している大学・大学院をはじめとした外部機関と連携し、人材育成・人事交流に係る活動を実施した。

2. 大学・大学院等との人材育成・人事交流

(1) 人事交流等

HPSC の研究員が大学・大学院の客員教員・連携教員等として研究指導等に協力した（表1）。そのうち、鹿屋体育大学から、1名の連携大学院生を新たに受け入れた。

表1　客員教員等の委嘱を受けた HPSC 研究員

大学名	客員教員等の委嘱を受けた HPSC 研究員	役職名
筑波大学	和久貴洋（JISS 副所長 / 総合企画部長）	教授（連携大学院）
	清水和弘（JISS スポーツ科学研究部門）	准教授（連携大学院）
順天堂大学	中嶋耕平（JISS 副所長）	客員教授
鹿屋体育大学	星川雅子（JISS 副所長）	客員教授
	横澤俊治、山下大地（JISS スポーツ科学研究部門）	客員准教授
立命館大学	窪康之、横澤俊治、尾崎宏樹、中村真理子、景行崇文、小出所大樹、山岸卓樹（JISS スポーツ科学研究部門）、柄木田健太、妙圓園香苗（JISS スポーツ医学研究部門）、田中友丈（デジタル推進室）	客員研究員

(2) 大学・大学院等と連携した講義等の実施

大学・大学院等と連携し、HPSC の研究員等の講師派遣及び講義への協力を計15件実施した（表2）。また、大学・大学院の教員・学生による HPSC での研究ディスカッション等を5件実施した。以下、主な事例を紹介する。

①早稲田大学大学院スポーツ科学研究科において、2024 年 8 月 20 日から 23 日に久木留 JISS 所長ほか JISS 副所長含め各分野の研究員・専門職員計15名による「ハイパフォーマンススポーツ概論」と題した夏季集中講義を実施した。スポーツ医・科学、情報等による多面的で高度な支援及びその基盤となる研究の実践事例を紹介するとともに、その背景にあるハイパフォーマンススポーツに関するスポーツ医・科学、情報等に関する基礎的な知識を解説した。

②立命館大学の「スポーツ健康科学特殊講義Ⅱ」において、2024 年 9 月 27 日から 2025 年 1 月 17 日に「ハイパフォーマンススポーツの科学」



写真1　早稲田大学大学院スポーツ科学研究科の夏季集中講義の様子

をテーマに 12 コマの講義を行った。前半7回は JISS が行っている医・科学支援について解説を行い、後半5回の講義は、バイオメカニクス、トレーニング、心理、栄養、映像・情報の各分野の研究員・専門職員による講義を対面で実施した。

③大阪体育大学大学院の「スポーツ科学セミナー」において、2024 年 11 月 25 日に「HPSC の概要」、12 月 9 日に「ハイパフォーマンススポーツにおけるコンディショニングに関する支援と研究」、2025 年 1 月 27 日に「ハイパフォーマンススポーツにおける科学的サポート」をテーマに HPSC 研究員による計3回の講義を行った。

④日本体育大学大学院の「競技力向上サポート特論」において、2024 年 12 月 23 日に、「強化現場における科学サポート」をテーマに HPSC の場を活用した講義を実施した。研究・支援に関する情報提供やグループワーク等に HPSC 研究員が参加し、HPSC と日本体育大学との連携に関する意見交換を行った。



写真2　日本体育大学大学院「競技力向上サポート特論」における HPSC での講義の様子

表２　大学・大学院等と連携して実施した講義等

連携先	講義・コマ名	実施日・期間	担当研究員等（部署名は所属当時）
順天堂大学	スポーツ心理学	2024年5月8日、6月19日	永尾雄一（JISS スポーツ科学研究部門 / デジタル推進室）
順天堂大学	スポーツ情報科学	2024年5月23日	相原伸平（JISS スポーツ科学研究部門 / スポーツ情報処理技術研究室室長）
早稲田大学	ハイパフォーマンススポーツ概論	2024年8月20日～23日	久木留毅（HPSC センター長 /JISS 所長）、石毛勇介、中嶋耕平、星川雅子（JISS 副所長）、友利杏奈、福嶋一剛、柄木田健太（JISS スポーツ医学研究部門）、横澤俊治、元永恵子、松林武生、山下大地、岩田理沙（JISS スポーツ科学研究部門）、山下修平（ハイパフォーマンス戦略部）、三浦智和（デジタル推進室）、白井克佳（連携・協働推進部）
立命館大学	ハイパフォーマンススポーツの科学	2024年9月27日～2025年1月17日	窪康之、横澤俊治、中村真理子、尾崎宏樹、景行崇文、山岸卓樹（JISS スポーツ科学研究部門）、柄木田健太、妙圓園香苗（JISS スポーツ医学研究部門）田中友丈（デジタル推進室）
筑波大学	スポーツパフォーマンス向上のための先端的体・医・工融合研究	2024年10月9日	中村有紀（連携・協働推進部 /JISS スポーツ科学研究部門）
立命館大学	エグゼクティブレクチャー	2024年10月3日、11月7日	小出所大樹（JISS スポーツ科学研究部門）
順天堂大学	ハイパフォーマンス科学	2024年11月14日	中嶋耕平（JISS 副所長）
大阪体育大学	スポーツ科学セミナー	2024年11月25日、12月9日、2025年1月27日	中村宏美（連携・協働推進部 /JISS スポーツ科学研究部門）、ヘンダーソンフレデリック（JISS スポーツ科学研究部門）、髙橋由衣（JISS スポーツ医学研究部門）
鹿屋体育大学	令和６年度鹿屋体育大学健康セミナー	2024年12月17日	星川雅子（JISS 副所長）
順天堂大学	スポーツと AI	2024年12月23日	相原伸平（JISS スポーツ科学研究部門 / スポーツ情報処理技術研究室室長）
日本体育大学	競技力向上サポート特論	2024年12月23日	尾崎宏樹（JISS スポーツ科学研究部門）
順天堂大学	ハイパフォーマンス科学特別演習	2025年1月9日	中嶋耕平（JISS 副所長）
早稲田大学	International Sports Nutrition Conference	2025年2月22日	元永恵子（JISS スポーツ科学研究部門）
日本体育大学	日本体育大学ハイパフォーマンスセンターシンポジウム	2025年3月12日	久木留毅（HPSC センター長 /JISS 所長）、中村有紀（連携・協働推進部 / JISS スポーツ科学研究部門）
札幌医科大学	第６回スポーツ理学療法とスポーツ科学の融合	2025年3月29日	中嶋耕平（JISS 副所長）、鈴木章（JISS スポーツ医学研究部門）

(3) インターンシップの受入

学生にトップアスリートに対するスポーツ医・科学、情報等による研究・支援についての理解を深めてもらうことで、スポーツ医・科学、情報等による研究・支援を担う人材の育成を推進することを目的に、大学院生等のインターンシップを４機関から、計 10 名受け入れた。受入にあたっては、学生の所属研究室の専攻内容を踏まえつつ、幅広い分野での就業体験を提供するため、HPSC 各部署と連携した研修プログラムを実施した。

(4) 先端的スポーツ医・科学研究推進事業の受託大学と連携した取組

スポーツ庁委託事業「先端的スポーツ医・科学研究推進事業」を受託している大学の若手研究者・学生を対象として、人材育成等に資する取組を実施した。

ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024 を結節点に、2024 年 12 月 10 日にはプレセミナー（ファシリテーター：安藤良介研究員、研究発表：白木駿佑研究員 / JISS スポーツ科学研究部門）を開催し、受託大学・HPSC/JISS の双方が、研究に関する発表・意見交換を行った。また 12 月 11 日には、受託大学が先端的スポーツ医・科学研究推進事業で進めている研究について、ポスター発表の場を設けた。

加えて、2025 年３月 27 日には、競技パフォーマンス構造モデルに関するワークショップ（講師：景行崇文研究員 / JISS スポーツ科学研究部門）を開催した。

(5) 地域におけるスポーツ医・科学サポート体制構築事業の受託大学と連携した取組

スポーツ庁委託事業「地域におけるスポーツ医・科学サポート体制構築事業」を受託している宮崎大学からの依頼を受け、同大学が中心となり組織する宮崎県内の医療職能団体とのコンソーシアムより医師３名、看護師２名、トレーナー３名、管理栄養士２名を１月 22 日～24 日の３日間、研修者として受け入れた。HPSC の場を活用した医師をはじめとするスポーツ医・科学分野の人材育成・確保等に資するための取組としてスポーツ医学研究部門をはじめ各部署・部門と連携し、スポーツ診療事業やアスリートリハビリテーション等に関する各種研修プログラムを提供した。

3. その他外部機関との連携

埼玉県、石川県等から長期間の研修生を受け入れた。また、日本アスレティックトレーニング学会との意見交換や、日本スポーツパフォーマンス学会大会での講演など、外部機関と連携した取組を実施した。

4. まとめ

以上のとおり、大学･大学院等と連携しつつ、HPSC 各部署が協働しながら、スポーツ医・科学、情報等による研究・支援を担う人材育成に取り組んできた。

スポーツ基本計画の施策目標や JSC 第 5 期中期目標の達成に向けて、HPSC の機能強化と同時に、HPSC の場や知見等の更なる活用・還元が求められている。

今後も大学・大学院等の関係機関との連携を推進し、HPSC の場を活用した実践機会の提供等を行うことにより、スポーツ医・科学、情報等による研究・支援を担う人材育成や HPSC の知見の更なる還元を図り、もって持続可能な国際競技力向上につなげていきたい。

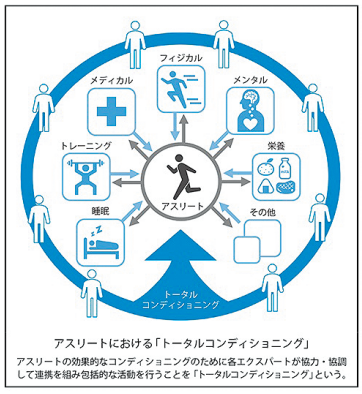
＜参考：連携協定を締結している大学一覧＞
国立大学法人 鹿屋体育大学
学校法人朴沢学園 仙台大学
学校法人 早稲田大学
国立大学法人 筑波大学
学校法人 日本体育大学
国立大学法人 大阪大学
国立大学法人 奈良先端科学技術大学院大学
学校法人浪商学園 大阪体育大学
国立大学法人 東京大学
学校法人 朝日大学
学校法人立命館 立命館大学大学院
スポーツ健康科学研究科
学校法人順天堂 順天堂大学
国立大学法人北海道国立大学機構
北見工業大学
北海道公立大学法人 札幌医科大学
※締結日順（2025 年 3 月 31 日現在）

（文責　連携・協働推進部産学協働推進課）

(3) Total Conditioning Research Project NEXT

1. はじめに

国際競技力の向上を図るためにコンディショニングを中心とした研究プロジェクトを実施し、そこで得られた知見をアスリートのセルフコンディショニングに関するガイドラインとして策定することを目的に、JSC と大塚製薬株式会社（大塚製薬）は、2016 年 12 月より、共同プロジェクト「JSC ハイパフォーマンススポーツセンター Total Conditioning Research Project（TCRP）」を実施した。その成果を踏まえ、コンディショニングに関する更なる研究とトータルコンディショニングに関する普及・啓発を図ることを目的に、2023 年より、後継プロジェクトとして「JSC ハイパフォーマンススポーツセンター Total Conditioning Research Project NEXT（TCRP NEXT）」を実施している。



出典：独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター（2023）.「アスリートのためのトータルコンディショニングガイドライン」.69 頁

図 1　アスリートにおける「トータルコンディショニング」

2. TCRP NEXT

2023 年度開始した共同プロジェクト「TCRP NEXT」の運営は、HPSC と大塚製薬が担当している。TCRP の成果を踏まえ、2023 年度に引き続き、開催が決定しているパリ 2024 大会からブリスベン 2032 大会に向けて、持続可能な国際競技力向上のためのコンディショニングに関する研究を継続して実施するとともに、それらの成果を国際競技力向上（ハイパフォーマンス）のみならず国民のライフパフォーマンス向上のため活用・応用するための普及・啓発活動に取り組んだ。その一環として、主に以下の取組を実施した。

(1) 持続可能な国際競技力向上のためのコンディショニングに関する研究（2 課題）

以下の 2 課題について研究計画を策定し、それに基づく研究を進めた。（50 ページ「競技会開催地に応じた特殊環境対策の実装」に詳述）

①温熱刺激を活用したリカバリー及び暑熱順化プロトコルの開発

②アスリートの海外遠征におけるコンディショニングに関する研究開発

(2) 研究成果を活用・応用した普及・啓発活動

①「アスリートのためのトータルコンディショニングハンドブック」の作成

2023 年 8 月に発刊した書籍「アスリートのためのトータルコンディショニングガイドライン」で紹介する学術的・専門的な知見や技術をアスリートやアスリートを支える関係者に向けてより分かりやすく解説した「アスリートのためのトータルコンディショニングハンドブック」を作成し、2024 年 6 月に HPSC のウェブサイトへ公開した。

本ハンドブックはハイパフォーマンスを発揮するために必要なコンディショニングの理論と実践法を 4 つのポイントに沿って簡潔に解説している。本ハンドブックを通じて、アスリートやアスリートを支える関係者による『コンディショニング』と『トータルコンディショニング』の理解を促進し、充実したコンディショニングの実践とアスリートのより高いパフォーマンス発揮につなげることを目指す。



図 2　「アスリートのためのトータルコンディショニングハンドブック」（A5 判 / 96 ページ）

【ハンドブックの概要】

■タイトル：～ハイパフォーマンスを発揮して勝つ！～ アスリートのためのトータルコンディショニングハンドブック
■編集 / 発行：独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター
■発行日：2024 年 6 月 28 日

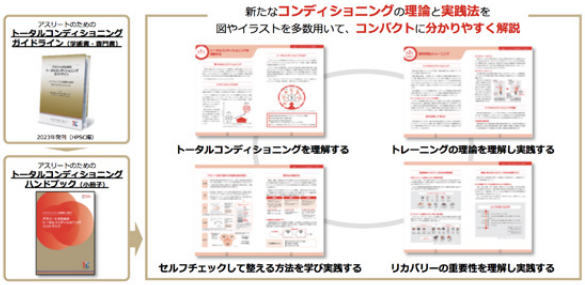


図 3　ガイドラインとハンドブックの関係について

② HPSC 主催研修会での実施

スポーツ指導者向けに「トータルコンディショニング」の更なる普及・啓発を図るため、JSPO 公認スポーツ指導者更新研修として「ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス：特別セミナー スポーツ指導者のための『トータルコンディショニング』研修会を実施した。

本研修会は、スポーツ指導者が「トータルコンディショニング」に関する学びを深めることを通じて、エクスパートとしての実践力の向上、コンディショニングに関する幅広い知識の獲得、アスリートの成長や競技力向上を包括的に支援する環境づくりへの理解や実践につなげることを目的に実施した。JSPO 公認スポーツ指導者をはじめとした 52 名が参加した。



写真 1　ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス：特別セミナー スポーツ指導者のための『トータルコンディショニング』研修会の様子

③その他の普及啓発活動

上記の取組に加え、ガイドラインの販売や学会大会、HPSC 事業の研修会等のハイパフォーマンス領域における各種機会を活用し、主に次の活動を実施した。

【主な普及・啓発活動】

- 第 78 回国民スポーツ大会（SAGA2024）ドクターズ・ミーティング（講演）(9/8)
- 第 13 回日本アスレティックトレーニング学会学術大会（ブース出展・ランチョンセミナー）(9/14-15)
- 第 37 回日本トレーニング科学会大会（ランチョンセミナー）(11/3)
- 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会（ブース出展・書籍販売）(11/16-17)
- 日本陸上競技連盟・指導者セミナー (11/24)（大塚製薬と連携し実施）
- ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024（書籍販売）(12/11-12)
- 第 11 回日本スポーツ理学療法学会 (1/25-26)

④ライフパフォーマンスへの知見還元に向けた取組

大塚製薬の活動と連携し、HPSC が推進するトータルコンディショニングの知見をライフパフォーマンス領域へ応用する取組を実施した。具体的には、HPSC が大塚製薬発行の「ウェルビーイングのためのトータルコンディショニングハンドブック」を監修し、同ハンドブックが医師、栄養士、薬剤師、保健師など、人々の健康を支える関係者にライフパフォーマンス領域で活かしやすいものとなるよう編集に協力した。同ハンドブックが活用されることにより、HPSC が推進する「トータルコンディショニング」の知識や実践法がライフパフォーマンス領域に還元されていくことを目指す。



写真 2　第 13 回日本アスレティックトレーニング学会学術大会の様子

3. まとめ

HPSC が推進する「トータルコンディショニング」の更なる普及・啓発を目指し、ガイドラインでまとめた学術的・専門的な知識・技術をアスリートやアスリートを支える関係者がより実践しやすいよう、コンパクトに分かりやすく解説したハンドブックを発刊した。

2023 年に開始した TCRP NEXT を通じて、持続可能な国際競技力向上のためのコンディショニングに関する研究を着実に進めるとともに、ガイドラインを始めたコンテンツの充実・発信を通じて、「トータルコンディショニング」に基づくアスリート支援の充実を一層図っていきたい。

また、大塚製薬との連携を通じ、「トータルコンディショニング」の知見を国民のライフパフォーマンス領域に還元することにより、「ハイパフォーマンスとライフパフォーマンスの循環」の推進を目指していきたい。

（文責　連携・協働推進部産学協働推進課）

(4) 共同研究

1. 背景・目的

HPSC/JISS では、単独で実施するよりも時間的・経済的に有利であり、国際競技力向上のために優れた成果が得られると期待できる場合、外部団体と共同研究契約を締結し、共同で研究を実施している。

2024 年度は、以下の 11 件の共同研究を実施した。

2. 実施概要

No.	研 究 課 題 名	共 同 研 究 相 手
1	ウエイトリフティング競技選手の心臓リモデリング調査	公益社団法人日本ウエイトリフティング協会
2	スポーツクライミングの運動計測に関する研究	国立大学法人九州大学
3	男子プロバスケットボールチームにおけるトレーニング負荷管理：傷害リスクの減少および高強度活動を高めるための探索的研究	トヨタアルバルク東京株式会社
4	アスリートの特性からみた外傷・障害のリスク要因の探索	学校法人慶應義塾
5	食事写真からの高精度な食品リストおよび栄養素量推定モデルの開発	国立大学法人東京大学
6	陸上競技選手の動作解析によるアスリート毎の課題抽出	公益財団法人日本陸上競技連盟
7	第 18 回オリンピック競技大会出場選手の体力と健康の関係を明らかにする長期追跡研究	公益財団法人日本スポーツ協会
8	氷上を進むカーリングストーンの振動計測に関する研究	国立研究開発法人産業技術総合研究所
9	地域タレント発掘・育成事業参加者の体力特性に関する検討	公益財団法人山口県スポーツ協会
10	オリンピックアスリートの心血管リスク因子調査	学校法人聖マリアンナ医科大学
11	Investigation of Sport-Specific Athlete Development Pathways in Singapore through the Foundation, Development, Excellence and Sustainability (FDES) Framework	National Youth Sports Institute (Singapore)

（文責　連携・協働推進部産学協働推進課）

5　国際情報戦略事業

(1) 情報調査

1. 国際情報をオールジャパン体制で共有する仕組みの構築～国際スポーツ情報活用推進会議

第５期中期計画において「ハイパフォーマンススポーツ等に関する情報の収集・分析・蓄積・展開の充実を図るため、国内外の関係機関との連携体制を整備するとともに、国際スポーツに関する相談対応の仕組みを構築し、情報の蓄積・展開に関わる効果的・効率的な手段を講じる」としている。これを受けて、国際情報戦略部では、国際競技力向上に関わる国際スポーツ情報の一元化を図り、意思決定者等が国際スポーツ情報を戦略的に活用するための連携体制として「国際スポーツ情報活用推進会議（推進会議）」を設置した。

(1) 推進会議構成メンバー：
・委　員：JSC、JOC、JPC
（JOC・JPC はパリ 2024 大会選手団団長又は副団長）
・オブザーバー：スポーツ庁、JSPO
(2) 開催回数：計３回
（2024 年６月、10 月、2025 年３月）

第１回推進会議では、室伏スポーツ庁長官出席のもと、国際スポーツ情報の重要性を確認するとともに、推進会議にて関係団体間での国際競技力向上に関わる国際スポーツ情報を一元的に共有・集約していくことを決定した。

また、第１回推進会議は、パリ 2024 大会開催を控えた６月に開催したことから、大会期間中の情報連携体制を整備することで合意した。



写真　第１回推進会議の様子

2. パリ 2024 大会において初となるオールジャパン体制での情報連携～エグゼクティブレポート

第１回推進会議の合意事項を踏まえ、大会期間中に、スポーツ庁、JOC、JPC、JSC、JSPO 等の意思決定者等がオールジャパン体制で国際スポーツ情報のタイムリーな共有を図るための初となる取組を実施した。

具体的には、国際情報戦略部が事務局となり、大会期間中の各種国際スポーツ情報を「Paris 2024 エグゼクティブレポート（エグゼクティブレポート）」として取りまとめ、推進会議構成メンバー等に共有した。

エグゼクティブレポートの概要：
(1) 配信先：スポーツ庁長官をはじめとする推進会議委員及びオブザーバーなど
(2) 配信回数：計９回
（オリンピック：6 回、パラリンピック：3 回）
(3) 主なトピック：各種ミーティング、選手村内外の動向、大会結果分析など

本取組は、以下の３つの観点から初の試みと言える。１つ目は、JOC・JPC の協力を得て、大会期間中の選手団団長会議で議論・検討される重要課題の共有が図れたことである。２つ目は、オールジャパン体制で共有を図ったことで、パラリンピックを控える JPC がオリンピック大会期間中の現地情報や課題を把握できたことである。３つ目は、JSC のリザルト分析に関する情報も、各団体の意思決定者等に直接提供したことである。大会期間中のオールジャパン体制による情報連携の仕組みを構築したことにより、各団体の意思決定者等が同じタイミングで同じ国際スポーツ情報を把握することが可能となった。パリ 2024 大会後の推進会議では、各委員から、大会期間中の本取組についての有用性及び重要性について言及された。

今後は、大会期間中だけでなく、２～３大会先を見据えて、戦略的な国際スポーツ情報の更なる活用を目指し、推進会議を運営していく。



図　提供資料例
（PARIS 2024 エグゼクティブレポート）

（文責　稲福　貴史、バイネルト　トビアス）

(2) 国際ネットワークのマネジメント

パリ 2024 オリンピック大会期間中、国際ネットワークの構築、維持、強化、活用を図る活動として、JOC がパリ日本文化会館内に設置した TEAM JAPAN HOUSE（TJH）を結節点とし、様々な取組を行った。具体的には、東京 2020 大会を通して得られた成果を東京 2020 モデルとして対外的に発信するため、JSC/HPSC の展示ブースを設置・運営した。また、TJH を結節点に、国際的な情報発信、情報収集、ブース内外での関係者との面会等を行い、国際ネットワークの構築及び強化を図った。

本取組は、スポーツ庁、関係団体、パートナー等と連携し、オールジャパン体制で実施した「日本のスポーツや文化（東京 2020 レガシー）」の発信にも寄与した。

1. HPSC に蓄積された知見の発信

東京 2020 大会を契機として HPSC に蓄積された知見を広く国際的に発信するための取組として、HPSC 全体で連携し JSC ブースでポスター展示を行った。ここでは、東京 2020 大会での感染症対策や暑熱対策、東京 2020 大会後を見据えて取り組んできたトータルコンディショニングの研究・支援、女性アスリート支援やアスリートパスウェイの取組、SDGs ガイドブックの開発及び活用に関する情報を発信した。



写真 1　ブース内でのポスター展示の様子

2. バーチャルローイング体験会

2023 年 11 月 14 日、ローザンヌ（スイス）において、ローイングの国際統括団体であるワールドローイングとの間で連携協定覚書（MOU）を締結し、バーチャルスポーツに関する国際共同研究プロジェクトを立ち上げた。この MOU は、JSC として初めて国際統括団体と協定を締結したものであり、画期的な試みといえる。

本覚書に基づき、プロジェクトの一環としてバーチャルローイング体験会を TJH の JSC ブースにて開催した。体験会では、東京 2020 大会のローイング競技会場である「海の森水上競技場」をメタバース空間で再現したアプリを使用し、大きな注目を集めた。このアプリは、新しい形での大会レガシーの発信だけでなく、スポーツの更なる発展に向けたバーチャルスポーツ活用のモデルケースとなった。

さらに、通常は水上でしか体験できないローイング競技を、メタバースを活用することで気軽に体験できる環境を提供したことで、参加者にスポーツをより身近に感じてもらう機会を創出した。これにより、新しいスポーツとの出会いを促進し、競技の普及やスポーツ文化の振興にも寄与する成果を得ることができた。



写真 2　バーチャルローイング体験の様子

（文責　山口　伊都子、坂田　博史）

3. UK スポーツ・UKSI 連携協定締結

パリ 2024 大会開催期間中である 2024 年 7 月 29 日、パリ（フランス）に設置された TJH にて、国際競技力向上に関する連携やハイパフォーマンススポーツを通じた社会還元等を目的として、UK スポーツ及び英国スポーツ研究所（UKSI）との連携協定を締結した。

JSC と UK スポーツは 2013 年に初めての連携協定を締結し、2016 年の更新を経て長年の協力関係を築いており、今回が 3 度目の更新となった。また今回新たに、英国のオリンピック・パラリンピック競技団体にスポーツ医・科学、情報・工学サポートサービスを提供する UKSI が連携協定に加わり、ハイパフォーマンス分野における更なる連携の推進を図る枠組みを整備した。



写真 3　UK スポーツ・UKSI との調印後の集合写真

（文責　小野瀬　泰誠）

4. ASIA Gathering

JSC は、アジアにおける国際競技力向上のための連携を強化する目的で、アジア強化研究拠点連合（Association of Sports Institutes in Asia: ASIA）を設立し、委員長として 16 か国地域 20 組織のメンバーを牽引している。ASIA の活動の柱である、国際総合競技大会における連携プロジェクトの一環としてパリ 2024 大会では、「ASIA Gathering」を TJH にて実施した。

日時：2024 年 7 月 31 日 11:00-13:00
参加国・組織：
Inspire Institute of Sport（インド）
Singapore Sport Institute（シンガポール）
Sports Authority of Thailand（タイ）
National Sports Training Center Chinese Taipei（台湾）
Japan Sport Council（日本）

ASIA Gathering には、上記 5 か国地域の代表者が参集し、2026 年愛知・名古屋アジア競技大会組織委員会から大会概要や準備状況等の情報提供を行ったほか、各メンバーからパリ 2024 大会の期間中の取組等について情報交換を行った。



写真 4　ASIA Gathering 集合写真

（文責　野口　順子）

5.「スポーツの SDGs への貢献を可視化するための M&E ワークショップ」の開催

8 月 4 日に TJH にて、スポーツを通じたジェンダー平等や社会的包摂の促進、気候変動対策等に取り組む際、事業設計でどのようにスポーツをツールとして組み込み、効果的な事業のモニタリング・評価（M&E）のためにはいかに成果を測定すべきかを、JSC と sportanddev が開発した“Bridging the Divide”ガイドブックを用いて検討するワークショップを開催した。

国際オリンピック委員会（以下「IOC」という。）レガシー部門長やブリスベン 2032 大会組織委員会レガシー担当者も参加し、東京 2020 大会のレガシーから得た知見を次へつなぐ機会となった。



写真 5　ワークショップの様子

6. ミニセミナー「市民のためのオリンピックレガシー：東京 2020 からパリ 2024 へ」の開催

8 月 9 日には TJH にて、アクティブなライフスタイルやボランティア精神、社会的包摂の促進など、大会を機運に芽生えた一般市民にとっての変化を、大会後も持続可能なものとしレガシーへ育て上げるためには何が必要かを、東京 2020 大会の事例から探るミニセミナーを開催した。

近年のオリンピック・パラリンピック競技大会においては競技的側面だけでなく、スポーツの社会的役割が益々重要視されてきている中で、社会にとってのレガシーを、フランス・アメリカ・ポルトガル・日本等各地から集まった 20 名の一般市民と共に検討した。

以下は TJH とは異なる活動であるが、JSC が有する知見をパリ 2024 大会に関する国際ネットワーク内で活用している一事例として報告する。

7. パリ 2024 インパクト & レガシー戦略評価監督委員会の委員としての活動

山田は 2022 年から、パリ 2024 大会組織委員会より「パリ 2024 インパクト & レガシー戦略評価監督委員会」の委員として任命され活動している。パリ 2024 大会の「レガシー & サステナビリティ戦略」は「より持続可能で革新的な大会を実現する」ことと、「パリ大会の社会的・環境的レガシーを構築する」という二つの柱に基づいているが、フランス国内外 9 名の専門家から成る専門委員会では、そのレガシー評価を独立した立場から監督し、評価プロセスの厳密性と妥当性を確保するためにアドバイスや提言を行ってきた。

成果を評価するための指標やツール、関連データの分析・解釈等に関する提案や、「パリ 2024 インパクト & レガシーに関する中間評価報告書」等のレビューを担い、パリ 2024 大会の経済的・社会的・環境的便益の創出に貢献してきた。

（文責　山田　悦子）

（3） 能力開発

1. HPSC 国際人材プールの設置・運用

国際情報とネットワークを活用した人材育成プロジェクトにおいて実施したアンケート調査結果に基づき、国際情報戦略事業を通じて創出する国際的な活動機会を HPSC 職員に適切かつ優先的に提供する新たな仕組みとして「HPSC 国際人材プール」を設置した。2024 年度の登録者数は、42 名であった。その中から、以下の国際カンファレンスを含め、合計 5 名の職員・研究員を海外に派遣した。具体的には、国際カンファレンスにおいて登壇者として国際的に HPSC の取組を発信するとともに、海外の専門家等との交流を通じて情報収集や今後に向けたネットワークの構築を図った。これらの活動から得た学びや知識を今後の HPSC における取組に活用していく。本取組は、HPSC の機能強化の一環として推進するものである。

2. 国際ネットワークを活用した「INSEP-JSC 共催 国際カンファレンス」の開催及び人材育成機会の創出

JSC は、フランスの国立スポーツ体育研究所（INSEP）と、2014 年から連携協定覚書（MOU）を締結している。パリ 2024 大会を控えた 2023 年には、HPSC を結節点に両国のハイパフォーマンススポーツ人材の育成に資する協力体制として、両組織にワークスペースを設けるなど国際共同研究や人事交流などの連携基盤の更なる強化を進めてきた。

これを受け、JSC と INSEP は双方の国際ネットワークを活用し、互いの研究成果を含む最新の情報を国際的に発信・共有する機会として、国際カンファレンスを共催した。また、本カンファレンスを次世代人材の育成等を推進するための具体的方策の一つとし、JSC からの登壇者に加え、カンファレンス運営担当者を配置し、INSEP と協働で事前準備及びカンファレンス運営を担い、国際カンファレンス等の開催・運営を経験する機会とした。



写真　ワークショップの様子

本カンファレンスは、自国におけるオリンピック・パラリンピック競技大会開催後のレガシーとして、環境ストレスを活用したパフォーマンスを最適化するための最新の進歩と革新を探求する場とした。また、ミラノ・コルティナ 2026 大会やロサンゼルス 2028 大会を見据えた環境ストレスの展望及び準備と応用についても情報提供がなされ、参加者のみならず登壇者などにとっても最新の研究成果やトレーニングなどを知り、議論できる場となった。JSC の研究員にとっても、当該研究領域の国際的に著名な研究者などとのネットワーク強化・拡大、国際カンファレンスにおけるファシリテーションの経験など、知見を広げる機会となった。

（1）カンファレンス概要

テ ー マ：Using environmental stressors to achieve peak performance: From evidence to avenues to explore
「環境ストレスを利用したピークパフォーマンスの達成：エビデンスから道筋を探る」

日　　程：2025 年 3 月 26 日（水）～ 27 日（木）

会　　場：フランス・INSEP

参加者数：326 名（延べ人数）

（2）セッション・プログラム

6 つのセッションに 25 のプログラムを設定し、25 名が登壇した。登壇者は、JSC 及び INSEP の国際ネットワークを通じて選出し、JSC 及び INSEP の研究員、ローザンヌ大学や立命館大学、イタリアや英国など、環境ストレスを活用してパフォーマンスを最適化するためのトレーニングや研究領域などにおける国際的に著名な研究者などが登壇した。

①トレーニングと試合：環境ストレスを活用した現代のトレーニングと競技のアプローチ
②フランスと日本のオリンピックサポートからのフィードバック
③栄養：過酷な環境条件下でのパフォーマンス最適化における栄養の影響
④基調講演：低酸素環境下での運動耐性の検出
⑤リカバリー＆リハビリテーション：筋肉の再生を最大化し、競技に復帰するための環境ベースの戦略
⑥環境ストレスを活用したパフォーマンスの最大化：エビデンスと今後の展望

（文責　稲福　貴史、野口　順子）

6 スポーツ医・科学支援事業

1. 目的

スポーツ医・科学支援事業は、国際競技力向上に向けて各 NF が抱える課題に対し、スポーツ医・科学、情報の各側面から組織的、総合的、継続的な支援を行い、競技力の向上に資する医・科学的情報を提供し、NF の国際競技力を高めることを目的として実施されるものである。

2. 事業の実施内容

本事業では、(1) フィットネスチェック (FC)、(2) 分野別サポート、(3) 総合型サポートを配置した。サポートの対象は 70 種別であった。

(1) FC では、トレーニングの効果を検証し、課題を明らかにすることを目的とした各種測定を実施した。測定コーディネーターが測定の日時を、種目担当者が測定とフィードバックの内容を NF 担当者と協議して調整した。

(2) 分野別サポートでは、心理、栄養、トレーニング、映像・情報技術の各分野において、個人又はチームを対象とした競技力向上に関する相談、実技指導、講習会などを実施した。実施に当たっては、NF からの申請に基づき、各分野リーダーがサポート内容と分野内のサポート担当者を調整した。

(3) 総合型サポートでは、対象競技を選定し、競技力向上のための組織的、総合的、継続的なサポートを JISS の人的、物的資源を集中して実施した。対象競技の選定は支援事業部会が行い、選定のプロセスにおいては複数名の外部有識者からなる HPSC アドバイザーによる助言を得た。

3. 事業の実施体制

本事業では、支援事業部会を設置し、統括する責任者（事業部会長）を置いた。

事業部会長の統括で競技種目系（記録系、格闘技系、ラケット系、採点系、標的系、球技系、水辺系、雪上系、氷上系、パラスポーツ系、エリートアカデミー系）を設定し、系内種目のサポートの進捗を管理する責任者（系リーダー）を各系に置いた。また、サポート分野ごと（トレーニング指導、心理、栄養、映像・情報技術）にサポートの質の向上を図る責任者（分野リーダー）を置いた。

系リーダーと分野リーダーからなる支援企画ワーキンググループ（支援企画 WG）を支援事業部会の中に設置し、FC、分野別サポート、総合型サポートの進捗状況を共有し、課題解決に関して議論した。

サポートの実施に当たっては、NF との間でサポート内容を調整する JISS 内担当者（種目担当者）を置き、種目担当者の指揮の下、各分野から必要な人員を配置し、チームを形成してサポートに当たった。サポート活動には、必要に応じて外部協力者を配置した。

4. 事業の進め方

スポーツ庁からの受託事業であるハイパフォーマンス・サポート事業と本事業との共通の窓口において NF の課題を集約し、専門性や必要とされる人員の多寡により役割分担を調整した。

本事業については、JISS 種目担当者が詳細なサポート計画を立て、本計画を基に JISS と NF との間でサポートに関する覚書を締結した。

支援事業部会において各 NF に対する年間サポート計画の内容を精査し、支援企画 WG において個別の活動の申請書と報告書を精査した。

（文責　窪　康之）

（1） フィットネスチェック

1．背景・目的

どの競技種目においても、競技力の向上を図る際にはまず身体能力等の現状を把握し、課題がどこにあるのかを明確にすることが必要である。JISS から NF へ提供するフィットネス測定の支援としてフィットネスチェック（FC）があり、予め準備された測定項目から幾つかを選択して実施する。フィットネス測定によって得られたデータは、各 NF の選手強化のための資料として活用され、フィットネス課題の抽出、トレーニング計画の立案及びその効果検証などに役立てられる。以下には、FC におけるフィットネス測定について報告する。

2．実施概要

右表は競技種目別の FC 実施実績である。2024 年度の測定実施日数は延べ 107 日、実施対象者は延べ 529 名（男子 294 名、女子 235 名）であった。

2023 年度の FC 実施実績（98 日、431 名）と比較すると、日数、対象者数ともに増加した。2024 年度はパリ 2024 大会が開催され、同大会を目指したトレーニングサイクルにおけるフィットネス測定が実施されたことが実績数の増加につながったと考えられる。

パリ 2024 大会が終了し、夏季競技にとって 2025 年度は新しい強化サイクルが始まるタイミングとなる。また、冬季競技にとってはミラノ・コルティナ 2026 大会の開催及びその直前シーズンという重要な時期となる。測定で得られた各種フィットネスデータが選手強化に役立てられるよう、測定内容の検討や結果整理に尽力し、測定の活用を促進していきたい。

（文責　松林　武生）

表　競技種目別の FC 実施対象者数

競技種目	実施日数	延べ対象者数		
		男子	女子	計
夏季オリンピック				
ローイング	6	39	27	66
陸上競技	9	29	18	47
エリートアカデミー	8	14	30	44
トランポリン	3	19	0	19
ソフトテニス	2	8	10	18
セーリング	2	9	6	15
アーチェリー	2	6	7	13
ゴルフ	1	6	7	13
自転車	2	7	4	11
アーティスティックスイミング	1	0	9	9
ビーチバレー	1	4	4	8
ウエイトリフティング	1	0	7	7
体操競技	1	1	0	1
小計	39	142	129	271
夏季パラリンピック				
バスケットボール	4	15	15	30
トライアスロン	4	15	3	18
テニス	3	3	4	7
フェンシング	1	4	0	4
パワーリフティング	1	1	1	2
陸上競技	1	2	0	2
小計	14	40	23	63
冬季オリンピック				
フィギュアスケート	2	16	14	30
スキーアルペン	3	15	12	27
スノーボードスロープスタイルビッグエア	5	13	13	26
スノーボードハーフパイプ	4	11	9	20
スノーボードアルペン	3	7	10	17
カーリング	9	6	8	14
スピードスケート	8	7	2	9
山岳スキー	2	3	6	9
スキースロープスタイル	1	4	4	8
スキーコンバインド	2	6	0	6
小計	39	88	78	166
冬季パラリンピック				
スキーアルペン	10	12	4	16
スノーボード	2	10	0	10
スキークロスカントリー	3	2	1	3
小計	15	24	5	29
総計	107	294	235	529

(2) トレーニングサポート

1. 背景・目的

トレーニングサポートはあらゆる競技に共通する分野として支援のニーズが高く、また、HPSC においては JISS で行われる医・科学研究事業、医・科学支援事業の成果が還元されることが多い分野でもある。トレーニング指導においては、エビデンスに基づく科学的なアプローチは元より、個人から得られた事例を基に先進的な知見につなげ、競技力の強化や社会への還元につなげていくことも重要であると考えている。

2. 実施概要

2024 年度は年間でオリンピック競技、パラリンピック競技合計 81 競技において、4,125 件の個別サポート、37 件の講習会が行われ、トレーニングデータやサポートから得られた知見を蓄積することができた。

(1) 競泳競技におけるトレーニングサポート

オリンピック競技に向け、競泳代表選手を対象に継続的なトレーニングサポートを実施した。特に、スタート動作やターンの改善はパフォーマンス向上において重要な要素であり、瞬発的な力発揮が求められるため、カウンタームーブメントジャンプ(CMJ)を評価基準として設定し、下肢の筋力強化や爆発的パワー向上を目的としたトレーニングプログラムを実施した。

CMJ を定期的に評価することで、選手の瞬発力向上を確認するだけでなく、コンディション管理の指標としても活用した。特に、大会前のテーパリング（調整期間）の評価にも取り入れ、パリ 2024 大会選考会、そして本番に向けた調整に役立てた。試合直前のコンディション変化を CMJ の評価を通じて把握し、個々の選手に応じた最適な負荷調整を実施した。これにより、ピークパフォーマンスを発揮できる状態でレースに臨めるよう支援した。



写真 1

今後は、これまでの活動を通じて得られたデータを蓄積・分析し、トレーニングやコンディション管理の精度を更に向上させることで、持続可能な強化を支援していく。

2024 年度シーズンで蓄積したデータをベースに、オリンピック選考レース期間中の負荷及びコンディション管理や、コロナ隔離や怪我後のリトレーニング時の復帰指標とすることも視野に入れ、段階的な介入を他の専門分野と連携して検討を進めている。

(2) パリ 2024 パラリンピック競技におけるトレーニングサポート

2024 年度は、13 競技のパラリンピックアスリート計 38 名に対して、個別及び代表チーム対象のフィジカルトレーニングサポートを実施した。特に 2020 年 6 月からサポートを開始したゴールボール男子代表チームは、開催国枠で出場した東京 2020 パラリンピック 5 位から、パリ 2024 パラリンピックでは初の金メダルを獲得するまで大躍進した。出場権を獲得した本番 1 年前の大会から 2 度ピーキングの予行演習に見立てた国際大会を経験したことで、パリ 2024 パラリンピックにはコンディション万全で臨むことができたことも、好結果につながった要因と思われる。また、前十字靱帯再建術後に約 2 年にわたってトータルコンディショニングサポートを実施していた視覚障害者柔道の女子軽量級選手が 4 回目のパラリンピック出場で初の銀メダルを獲得。減量問題が大きかった復帰初戦までの時期や、出場権獲得のための怒涛の国際大会スケジュール、そしてパリ 2024 大会本番までのピーキングなど、患部以外でも外傷発生率の高い格闘技系種目のアスリートを、リハビリテーション分野と栄養分野の専門スタッフと共にサポートした。



写真 2

3. まとめ

2024 年度はパリ 2024 大会に向けて集大成となった。出場選手については、課題を評価してモニタリングしながら、改善に努めた。五輪直前の選手村近隣に設置した JSC 村外サポート拠点でもモニタリングを継続して実施し、選手にフィードバックを行った。

（文責　月野　雄一、大石　益代、田村　尚之）

（3）心理サポート

1. 背景・目的

心理グループ（心理G）は、例年どおり、国際競技力向上のために、個別サポートと講習会を実施した。これらの活動について報告する。

2. 実施概要

（1）個別サポート

表に、2017～2024年度までの個別サポート（対面、オンライン、メール）のセッション数（延べ）と新規申込者数の年度別件数の推移を示した。2024年度の個別サポートのセッション数（延べ）は2023年度よりやや増加し、新規の申込はやや減少した。2024年度の個別サポートの競技種目で見てみると、パリ2024大会の終了に伴い夏季競技のサポートが減少し、一方でミラノ・コルティナ2026大会に向けた冬季競技のサポートが増加した。また、新規申込においても、冬季競技選手からのサポート申込が増加傾向にあることがうかがえた。

（2）講習会（啓発・研修）

表に、2017～2024年度の講習会（心理サポートやメンタルトレーニングに関すること等）の数を示した。2024年度の講習会の数は、パリ2024大会が終了したこともあり減少した。今回の講習会では、パリ2024大会に出場する競技団体から、複数回の講習会の依頼を受けたケースがあった。本番に向けた目標設定や、ポジションごとに分かれ、試合の映像を見ながら選手同士のコミュニケーション向上を図るグループワーク等を行った。

また、冬季競技のチームがミラノ・コルティナ2026大会の出場権の獲得に向けた試合の前に、講習会を複数回依頼してきたケースがあり、緊張への対策やチームビルディングを中心にした内容を実施した。当該チームは、本講習会後の試合で勝利し、ミラノ・コルティナ2026大会の出場権を獲得した。試合後、本チームの関係者から「今回の講習会をきっかけにチーム内のコミュニケーションが改善した。非常に効果があった。」という報告を受けた。

2024年度の講習会の特徴は、オリンピック直前やオリンピックの出場権がかかった重要な試合の前に、複数回行ったケースがあったことである。チーム内のコミュニケーションの向上やチームビルディングが主な目的であり、それらの要望に応える形で指導者やチームスタッフと入念な打合せを行い実施した。改めてチームサポートにおける講習会の有効性を感じた。

（3）リハビリ室への滞在と他分野間連携

2023年の8月から心理サポートの広がりと浸透（理解）を主たる目的として、心理Gのスタッフが週2回/1時間、リハビリ室に交代で滞在している。2024年度は、心理Gスタッフがより身近になるように、担当スタッフの顔写真付きのポスターをリハビリ室内に掲示し、滞在中には「心理スタッフ」の札を付けて滞在している。これらの活動により、選手やリハビリスタッフとのコミュニケーションが活発になり、心理サポートの認知度も向上していると感じている。

その他、リハビリ以外の他分野のスタッフとの連携・サポートも充実しており、他分野間連携がより進んでいると感じている。

（4）「HPSC内心理部門（スポーツ心理、臨床心理、心療内科）合同カンファレンス」の開催

心理Gは、アスリートの心理面の多様な問題・課題・要望等に対応するために、2001年のJISS開所以来、心理部門のスポーツ心理、臨床心理、心療内科の専門家が協力・協働してきた。「3者」の協力・協働により、これまで様々な事例に対応してきている。この「3者」による情報共有・協働を更に深めるため、2024年度の5月から「HPSC内心理部門（スポーツ心理、臨床心理、心療内科）合同カンファレンス」を開催している。ここでは、サポートに関するそれぞれの立場や視点から、サポート経過に関する内容等の議論を行い、お互いの立場を理解し、尊重しながらより良いサポートにつなげられる情報共有・議論を行っている。このように「3者」が協力・協働している施設は、世界的にも非常に少ないと思われる。

3. まとめ

2024年度も、個別サポート、講習会共に充実したサポートが実施できた。また、スポーツ心理、臨床心理、心療内科の「3者」による協力・協働が更に充実した。今後も選手及び競技団体の要望に可能な限り応えられるようHPSC内の心理G全員で力を合わせ、引き続き国際競技力向上に貢献していく所存である。

（文責　立谷　泰久）

表　2017～2024年度　年度別個別サポートと講習会の数（単位：人、件）

		2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
個別サポート	セッション数（延べ）	785	971	738	1,152	816	602	613	650
	新規申込者数	41	45	38	30	23	28	38	31
講習会	啓発・研修	35(5)	24(0)	29(1)	9(0)	18(0)	13(0)	29(0)	18(1)

※講習会の（ ）の数は、全体の数のうちパラリンピック選手を対象として行ったもの

（4）栄養サポート

1. 背景・目的

2024 年度は、パリ 2024 大会に向けたコンディショニングのための食環境を整えることに重点を置き、選手個人や競技団体の要望に応じた栄養・食事面からのサポートを以下のとおり実施した。

2. 実施概要

⑴ 個別栄養サポート

個別栄養サポートは、JISS スポーツクリニック栄養相談室やコンディショニングスペースでの対面式を基本とし、必要に応じてメールやオンラインでも実施している。2024 年度の個別栄養サポート件数は合計 436 件で、2023 年度 558 件から減少した。内訳はオリンピック競技選手 334 件（2023 年度 430 件）、パラリンピック競技選手 102 件（同 128 件）の実施であった。2024 年度はパリ 2024 大会開催に伴う HPSC 利用者数の減少や、味の素 NTC・イーストの一時利用停止による影響が考えられる。

また、サポート種別でみると、コンディショニングチームの各分野スタッフが外傷・障害の回復に向けて連携するトータル・コンディショニングサポート（TCSP）での栄養サポートが 93 件（2023 年度 106 件）、パフォーマンス発揮を目的に複数分野で連携するコンバインド・コンディショニングサポート（CCSP）は 28 件（同 56 件）、栄養分野のみで行う食事分析、体組成改善、栄養情報提供を中心とした栄養サポートは 232 件（同 289 件）、JOC エリートアカデミー生を対象としたサポートは 52 件（同 107 件）であった。

なお、相談内容は減量、増量、体組成改善といったウエイトコントロールが 268 件と全体の約 6 割を占めた。減量を目的とした場合、HPSC レストラン 3 か所内に設置されている栄養評価システム「mellon Ⅱ」を日々活用することで、エネルギー及び栄養素摂取量の過不足をモニタリングし、食事調整に役立てることができる。さらに、栄養グループがウェブサイトで公開している「体重階級制競技のウエイトコントロールガイドブック」が、選手及びスタッフにも活用されている。

⑵ 栄養講習会

競技団体から JISS 医・科学サポート受付に依頼のあった HPSC 内で開催された栄養講習会は 16 件（延べ受講者数 441 名）で、2023 年度の 26 件（延べ受講者数 739 名）に比べ減少した。個別栄養サポートと同様にパリ 2024 大会開催年度であったことの影響が考えられる一方で、JISS への依頼ではなく、ネットワーク事業栄養分野が作成した講習会パッケージを活用できるスペシャリストを、栄養講習会講師として各 NF 内で調整されたことによるものとも考えられる。今後より一層、選手の育成と強化活動に活用いただけるよう、栄養講習会パッケージの普及・推進に努めたい。

⑶ 栄養評価システム「mellon Ⅱ」の利用状況

HPSC 内にある 3 つのアスリート向けレストラン「R^3」、「SAKURA Dining」、「イースト食堂」での mellon Ⅱの 2024 年度の利用実績は、合計 20,541 件（オリンピック競技 17,144 件、パラリンピック競技 3,420 件）であり、2023 年度合計 33,082 件と比べ利用件数が減少した。2024 年度前半はパリ 2024 大会前調整期から試合期であったこと、大会期間中、大会終了後に HPSC での強化合宿の開催が減少したこと、更には味の素 NTC・イーストの一時利用停止といったことが影響した可能性が考えられる。

今後も選手のコンディショニングに向けた食事摂取量の確認及び評価に mellon Ⅱが活用されるよう、引き続き栄養評価システムの安定稼働と整備を行う。

⑷ JISS-NF 栄養スタッフ会議の開催

本会議は、各 NF の栄養スタッフと連携を深め、栄養サポートに関するネットワークを強化することを目的としている。2024 年度はパリ 2024 大会開催前の 4 月（第 9 回）と開催後の 11 月（第 10 回）の 2 回にわたって開催し、JOC 及び JPC に加盟する NF の栄養スタッフや NF 関係者と、JOC 及び JPC のスタッフ、そして HPSC スタッフなど総勢約 90 名が各回で参加した。

第 9 回では、パリ 2024 大会に向けた各種情報共有を行い、大会終了まで随時必要な情報を「パリ栄養ニュース」として配信することとその共有方法を説明した。

第 10 回では、パリ 2024 大会の振り返りを行い、初めて実施した情報共有「パリ栄養ニュース」配信についての振り返りと評価を行った。NF 栄養スタッフからパリ 2024 大会栄養サポートに活用したとの意見が多くあった。多くの競技団体が国際大会での栄養サポートにおいて事前に食環境情報を必要とし、NF 栄養スタッフからの海外の食環境情報の需要も高い。今後も国際総合競技大会時の食環境情報の収集と適切なタイミングでの情報共有を検討する。

3. まとめ

2025 年度はミラノ・コルティナ 2026 大会が開催される一方、夏季種目競技団体においてはロサンゼルス 2028 大会に向けた新たな体制での NF 強化活動が予測される。引き続き選手や関係者に必要とされる栄養サポート、環境整備に努めたい。

（文責　亀井　明子、元永　恵子）

(5)　映像 / 情報技術サポート

1. 背景・目的

JISS の映像 / 情報技術サポートでは、映像・情報技術を用いた競技団体への支援活動を継続して行っている。2024 年度については、パリ 2024 大会本番中の JISS からのリモート映像分析支援ブースを開設し現地へ向けた後方支援や、ミラノ・コルティナ 2026 大会へ向けた継続的な強化活動の中での映像・情報技術の活用促進、また、これらの活動から得られた知見を更に競技現場へ還元するために、競技団体の人材育成のための講習会の開催も行った。

2. 実施概要

(1) 映像技術サポート

①ビデオフィードバックシステム運用支援

映像技術サポートでは、競技現場でのビデオシステム活用支援を継続して行った。Wi-Fi 対応 SD カード（FlashAir）に独自開発した JISS Air ベースのシステムと、同等の機能を実装したスマートフォンアプリについて、ノルディック複合男女、スキージャンプ女子、スノーボードクロス男女、スノーボードスロープスタイルビッグエア男女など冬季競技のナショナルチームを中心に、ワールドカップや世界選手権など国際大会にてコーチング支援ツール及びアスリートの動作改善のために活用された。

② JISS nx 運用支援

クラウド型スポーツビデオデータベース JISS nx について、2024 年度はオリンピック競技（39 種別）、パラリンピック競技（22 種別）から申請があり、合計 61 種別で利用された。

2024 年度末の総映像登録数は 833,263 件、総アカウント数は 6,646 件であった。講習会は管理者向け（リモート又は対面で）が 7 件（計 11 名）、利用者向けは 2 件（計 56 名）だった。映像登録件数トップは変わらず体操競技で 135,186 件だった。また、ウエイトリフティングでは、中高生エリート育成合宿の中で利用者講習会を行い、選手たち自身が競技動作について深く考えるきっかけ作りとしていた。JISS nx スマートフォンアプリ、タブレットアプリについて、メンテナンス及び利便性向上を目的としたアップデートを行った（写真 1）。



写真 1　JISS nx アプリアップデート

③パリ 2024 大会本番中のリモート映像分析支援

パリ 2024 大会開催期間中に、スポーツ医・科学支援事業とハイパフォーマンス・サポート事業で連携を図りながら、JISS の情報サービス室を活用して大会公式映像を視聴しながら映像分析支援ができるブースを設けた。オリンピック期間中は水泳（AS）、体操、レスリング、卓球、バドミントン、トライアスロンの 6 競技延べ 103 名のコーチ・スタッフの利用があった（写真 2）。パラリンピック期間中は 3 競技延べ 16 名の利用にとどまったが、車いすテニス、視覚柔道、パラリンピック陸上競技（マラソン）とどれもメダルを獲得した競技だった。



写真 2　JISS 映像分析ブースの様子

(2) 情報技術サポート

①ツール開発による IT 支援

情報技術サポートでは、インターネット上で公開されているリザルトなどのデータを自動収集するツールの開発を行った。ノルディック複合向けリザルト収集システムは、ワールドカップほか国際大会のリザルトデータを自動収集し、コーチや分析スタッフが加工しやすい形でダウンロードできるようにした。このツールの横展開として、ブレイキン、柔道、卓球、ウエイトリフティングなどの競技で同様のツールをコーチやアナリストが自らツール作成とその改善ができるよう継続的に支援を行った。

② JISS share 運用支援

ファイル共有 Web システムの JISS share はオリンピック競技（43 種別）、パラリンピック競技（29 種別）から申請があり、合計 72 種別で利用された。リモートもしくは対面で 10 件（計 18 名）の管理者向け講習会を行った。各競技の保存容量は 1TB を上限とし、必要に応じて容量の増量を行った。総アカウント数は 1,740 件で、総データ容量は 35,200GB であった。また、本システムの基盤となるミドルウェアの大幅なアップデートを行うことで、システム安定性向上及び利用者の利便性向上も図った（写真 3）。

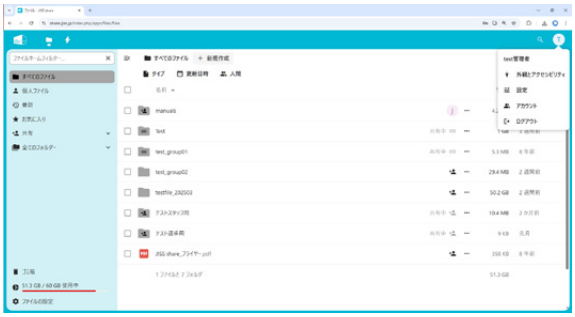


写真 3　JISS share 基盤アップデート

(3) 映像・IT アカデミー（DiTS）の開催

競技現場での映像・IT 技術の活用促進や人材育成支援を目的として「ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー（DiTS)」を開催した。2024 年度も映像基礎講座「BASIC」、映像応用講座「ADVANCE」、プログラミング基礎講座「プログラミング BASIC」、プログラミング応用講座「プログラミング ADVANCE」の 4 講座を設け、受講者が選択して受講できるようにした。「BASIC」では、映像基礎、動作分析、ゲーム分析といったスポーツ場面における映像サポートの一連の流れを学べ、「ADVANCE」では、BASIC の内容を発展させ、より専門的かつ実践的な知識や技術を学ぶことができる。「プログラミング」では、最近利用者が増加している「Python」を利用して、データ処理を自動化する方法などを学ぶことができる。有料講習会としているが、2024 年度も計 22 名の受講があった。DiTS の受講者は、競技団体のコーチ、スタッフが大半であるが、2 月開催の BASIC 冬にはパリ 2024 パラリンピックに出場した車いすアスリートの受講もあり、いずれコーチになるための学びの機会として十分活用したいとのことだった（写真 4)。



写真 4　DiTS2024 映像基礎講座の様子

また、DiTS でレクチャーした内容を実践の場で応用する支援として、テニスとウエイトリフティングの 2 競技からフォローアップの依頼があり対応した。テニスでは、国別対抗戦（デビスカップ）が行われた有明コロシアムへ出向くなど、ゲーム分析・リアルタイム映像配信アプリのフォローアップ講習会を 3 回（計 9 名）行い、コーチ及び選手の更なる活用の後押しをした（写真 5)。



写真 5　テニス国際大会会場フォローアップの様子

また、ウエイトリフティングではパリ 2024 大会へ向けて代表選手 3 名のモチベーションビデオをコーチ 2 名で作成したいという要望に対し、味の素 NTC 直前合宿が行われる中、わずかな空き時間を有効に使いながら適宜アドバイスを行った（写真 6)。



写真 6　モチベーションビデオ作成支援の様子

DiTS については、2025 年度以降も定期的に開催できるよう引き続き準備を進めるとともに、学んだことを実践の場ですぐに活かせるよう、前述のようなフォローアップについても柔軟に対応するようにしたい。

3. まとめ

近年 DX や AI などデジタル技術の発展は目覚ましいものの、そのままの形で競技現場へ持ち込んですぐに使えるものはまだまだ少ない。また、日々のトレーニングでの利用と大会本番での利用では競技現場ニーズが大きく異なるケースもあり、様々な選択肢を持って柔軟かつシンプルに対応できることも大事となる。我々は約 20 年に渡り競技現場に寄り添い支援してきたが、これからも今までのスタイルやスタンスは変えず活動を継続したい。新しい技術にも目を向けながら、この競技現場ならこう使えるかもと創意工夫しチャレンジする精神を忘れることなく、この「映像 / 情報技術サポート」を継続したい。

（文責　三浦　智和）

（6） 総合型サポート

1. 目的

総合型サポートは、複数分野の研究員と専門スタッフが連携して課題の発見と達成に関わること、JISS が保有する測定、分析、トレーニングのための機器と施設を活用することなど、JISS の強みを生かしたサポートを実施することで、対象競技の競技力向上を支援し、その成果を JISS 特有の成果として公表することを目的として実施した。

2. 事業の進め方

（1）対象の選定

総合型サポートでは、JISS の人的・物的資源を集中して活動するに当たり、サポート対象となる種別を厳選する必要があった。そのため、2022 年度にスポーツ医・科学支援事業部会において以下の 5 つの観点に基づき対象競技を選定した。

①競技力：次のオリンピック競技・パラリンピック競技大会において予想される成績。
②既存の業績：これまで JISS において蓄積されてきた研究と支援の成果が活用できるか。
③新規の業績：サポートを通じて得られた知見が新しい研究テーマを創出するか。また、他競技への支援に活用できるか。
④ JISS の強みが生かせるか：科学的な測定・分析に基づいたパフォーマンスの評価、トレーニング・コンディショニング方法の提案が可能か。
⑤ NF の受け入れ態勢：スポーツ医・科学に関する興味関心があり、JISS の提案や介入の受け入れが可能か。また、論文投稿や学会発表などの成果公表に理解を示していただけるか。

上記 5 つの観点に基づいて選定した 7 種別（パラ陸上、スポーツクライミング、競泳、バドミントン、トランポリン、スノーボードスロープスタイル・ビッグエア、パラアルペン）を支援の対象とした。

（2）サポート体制

サポート対象ごとに主担当と副担当を配置し、各専門領域（フィットネス評価、バイオメカニクス、トレーニング研究、コンディショニング研究、栄養、心理、トレーニング指導、映像・IT）から研究及びサポート実績に基づいてメンバーを招集し、サポートチームを形成した。

（3）サポートの進め方

サポートチーム内での議論により対象競技のパフォーマンスを構成する要素の相互関係をモデル化（パフォーマンス構造モデル）し、NF と共有した。パフォーマンス構造モデルで示された要素のうち、総合型サポートが集中して向上をねらう要素を NF との議論の中で明らかにし、サポート計画を立案した。

3. サポート事例

（1）競泳

東京 2020 大会のレース分析結果から対象 15 選手の課題を明らかにしてスタート及びターン局面の技術トレーニングを提供した。このうち 5 選手にはウエイト / ジャンプトレーニングを追加して提供した。技術トレーニングとウエイト / ジャンプトレーニングに継続的に参加した 5 名のうち 3 名が東京 2020 大会とパリ 2024 大会の国内選考会を比較してタイムを短縮した。



写真 1 スタート技術トレーニングの様子

（2）トランポリン

競技会のパフォーマンス分析結果から滞空時間を評価する指標（T0、Δ T）を開発し、競技会や試技会等でフィードバックした。サポート開始時に当該評価指標が優れていた者は全員維持、劣っていた 8 名のうち 3 名が向上した。

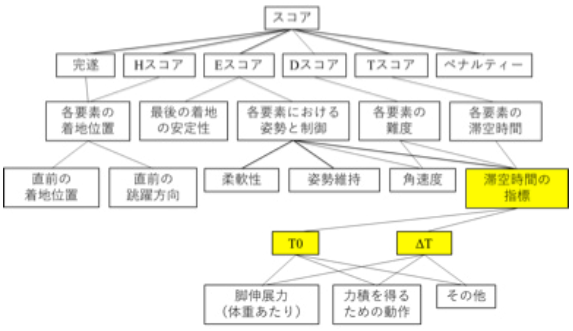


図 1 トランポリンのパフォーマンス構造モデル

（3）パラ陸上

競技会におけるレース分析により、100m から 5000m まで、どの種目においても最高走速

度が重要であることを明らかにし、メダル獲得のために必要となる最高走速度水準を算出してNF及び選手に提示した。選手個々の課題に応じたパワー及び持久力のトレーニングを提供し、対象選手15名のフィットネス測定値（スプリント最大走速度、最大酸素摂取量など）が向上した。

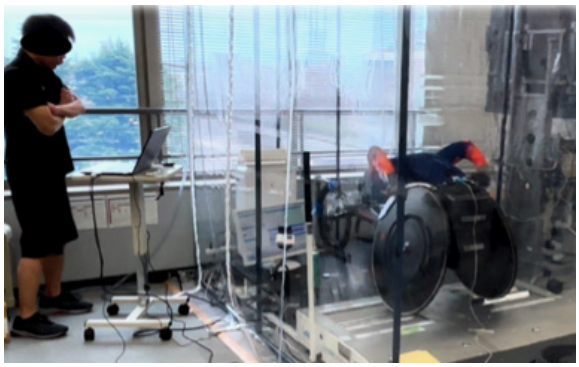


写真２　持久力向上を目的とした低酸素トレーニングの様子

(4) バドミントン

バドミントンに特化した体力の評価基準を作成し、体力課題ごとにトレーニングメニューを提案した。また、シングルスに特化したトラッキングシステムを開発し、AIを用いて取得した試合中の位置情報からヒートマップを作成した。その結果、試合中の移動能力（距離、速度など）を評価できるようになった。

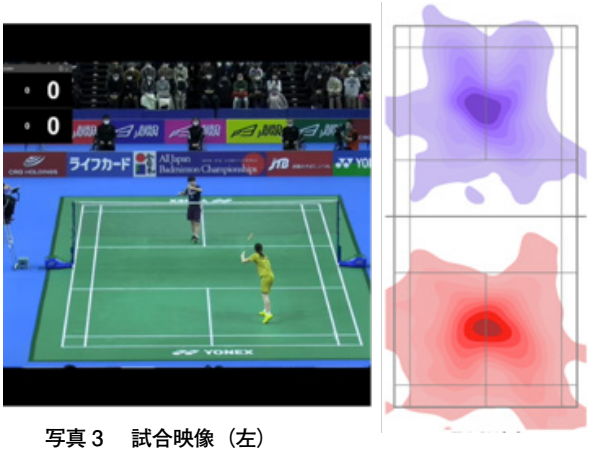


写真３　試合映像（左）
図２　トラッキングデータから描かれたヒートマップの一例（右）

4. まとめ

2024年度は、夏季競技の最重要競技会であるパリ2024大会が開催され、2022年度からスタートした総合型サポートの効果を検証する年となった。

サポート対象となった夏季5種別（スポーツクライミングについては2023年度中に活動が終了していたため本報告では取り上げなかった）において先に述べたとおり当初の課題がおおよそ達成でき、また、競泳、パラ陸上、バドミントンにおいてはサポート対象選手の中からメダリストが生まれたことから、本活動は一応の成功を見たといえよう。

続く2025年度は、冬季競技の最重要競技会であるミラノ・コルティナ2026大会が控えており、総合型サポートの対象であるパラアルペン、スノーボードスロープスタイル・ビッグエアについては引き続きサポート活動を継続することになるが、これと同時にロサンゼルス2028大会に向けたサポート活動のあり方の見直しを並行して進めねばならない。見直しに当たってはJISS内の体制、人材育成、NFとのコミュニケーションのあり方などの評価基準についても改めて検討していく必要がある。

（文責　窪　康之）

（7）ハイパフォーマンス・サポート事業　スポーツ庁委託事業

1. 事業の目的

ハイパフォーマンス・サポート事業は、スポーツ庁からの委託事業である。本事業は、パリ 2024 大会及びミラノ・コルティナ 2026 大会等の大規模な国際競技大会で日本代表選手がメダルを獲得できるよう、スポーツ医・科学、情報の各分野からサポートを提供することを目的として実施された。

支援の対象は、スポーツ庁が定めるターゲットスポーツ又は重点支援競技として選出され、メダル獲得の可能性に応じてサポートスタッフを配置し、サポート活動を行った。

2. アスリート支援

アスリート支援では、表に示す 7 分野についてスタッフを配置してサポート活動を行った。

活動に先立ち、競技団体との合意による年間計画書を作成し、これに基づいたサポートを実施した。年間計画書は、日本代表合宿や選手の所属先などで行われるトレーニングだけでなく、各種競技会がいつ、どこで行われるか、また、それらの強化現場において、どのような分野のサポートが必要かを網羅したものである。年間計画書作成をはじめとする競技団体との連絡・調整は、本事業のマネジメントスタッフが行った。マネジメントスタッフは、随時競技団体と連絡を取って課題を抽出し、サポートスタッフの配置を決め、サポート活動の内容と進捗を管理した。

3. JSC サポート拠点における支援体制

本事業では、パリ 2024 大会、ミラノ・コルティナ 2026 大会等の大規模な国際競技大会において、大会期間中の現地での最終的な強化・調整のためのサポートを実施するための体制づくりを進めており、過去大会で蓄積した経験に基づき、パリ 2024 大会、ミラノ・コルティナ 2026 大会においても充実した最終強化・調整のためのサポートを実施できるよう体制を構築した。

2024 年度はパリ 2024 大会が開催され、パリの選手村近隣に JSC サポート拠点を設置し、日本代表選手団等をスポーツ医・科学、情報面から総合的にサポートした。

また、ミラノ・コルティナ 2026 大会におけるサポートに向けて関係機関・各種専門分野スタッフ等との各種調整やヒアリングを行い、JSC サポート拠点の設置に向けた検討及び準備を進めている。

（文責　窪　康之）

表　サポート分野と主なサポート内容

サポート分野	主なサポート内容
コンディショニング	コンディショニング、リハビリテーションを目的としたエクササイズ、ケアの提供
トレーニング	障害予防、パフォーマンス向上を目的としたエクササイズの提供
映像	トレーニング・競技会における映像の撮影とフィードバック、映像データベースの構築
バイオメカニクス	パフォーマンス・動作分析
生理・生化学	生理学的モニタリング、体組成チェック
栄養	体組成チェック、栄養相談・アドバイス（啓発活動）、栄養調査・分析
心理	メンタルマネジメント技法の提供、心理カウンセリング

7　スポーツ医・科学研究事業

（1）国際競技力向上に資する研究の推進

1．概要

スポーツ医・科学研究事業は、スポーツ医・科学、情報等の各機能が統合したJISSの特長を生かし、必要に応じてNFスタッフや国内外の研究者・研究機関と連携しながら、国際競技力向上のために有用となる知見や方策を生み出す調査・研究・開発を行うことを目的としている。

2024年度より、重点的かつ時限的に取り組む「研究の柱」を中心として研究活動を推進する方針となり、組織として臨時で取り組む「特別プロジェクト研究」、将来的に研究の柱につながる小規模な「萌芽研究」を含む3つの研究の種類で構成されている。

研究の柱は、課題を明確にしてその課題に対して重点的に取り組むこと、並びに外部に対してテーマ自体やその成果を積極的に示すことの2つを目的として設置された。研究の柱のうち、「総合型サポートに直結する研究」については、総合型サポート（スポーツ医・科学支援事業の44ページ参照）充実に向けた新たな理論や新たなトレーニングの構築のための研究と位置づけ、総合型サポートを実施する上で必要性が生じた際に実施する枠組みである。2024年度の特別プロジェクト研究は表に示したとおりである。

その他、JISSでは、外部研究資金である「学術研究助成基金助成金 / 科学研究費補助金」や「民間団体研究助成金」を積極的に獲得するように努めている。

（文責　横澤　俊治）

表　研究の柱及び特別プロジェクト研究

研究の種類	研究テーマ	研究代表者
研究の柱	パフォーマンス構造モデルに基づいた支援プロセスの確立	安藤　良介
	デジタル技術・用具の強化活動への実装	尾崎　宏樹
	競技会開催地に応じた特殊環境対策の実装	中村　真理子
	スポーツ医学に対する疫学的アプローチの強化	福嶋　一剛
	社会的背景を考慮したスポーツ科学・医学・情報支援の推進	久保田　潤
	総合型サポートに直結する研究	
	a) 採点競技における演技の出来栄えの決定要件の究明	横澤　俊治
	b) スノーボードスロープスタイル・ビッグエアにおける外傷・障害予防のための調査とフィットネス評価	稲葉　優希
	c) スノーボードスロープスタイル・ビッグエアにおける選手の心理的特性とコーチのコーチング行動に関する実態調査	尾崎　宏樹
特別プロジェクト研究	世界陸上2025における世界一流および日本代表陸上競技者のパフォーマンスと技術	松林　武生

❶ 研究の柱

1. パフォーマンス構造モデルに基づいた支援プロセスの確立

研究代表者　安藤良介（スポーツ科学研究部門）
メンバー　山下大地、大岩奈青、山岸卓樹、萩原正大、白木駿佑、ヘンダーソンフレデリック、田中喜晃、吉田拓矢、小泉潤、景行崇文、牧野瑞輝（以上、スポーツ科学研究部門）、柄木田健太、妙圓園香苗（以上、スポーツ医学研究部門）

1. 背景・目的

2022 年度からスポーツ医・科学支援事業の総合型サポートではパフォーマンス構造モデルに基づいて支援を提供している。パフォーマンス構造モデルとは、パフォーマンス（記録・勝敗など）を構成する要素間の関係を図式化したものであり、介入の対象とする要素の検討や介入の効果の検証に用いる。しかしながら、我々スポーツ科学者は介入の対象とした要素（とりわけ体力要素）の改善を得意としてきたが、それがどのような道筋でパフォーマンス向上に貢献するのかということについての検証を多くの支援・研究において怠ってきた過去を認めざるを得ない。本研究の柱では、パフォーマンス構造モデル内の特定の上位要素とそれを直下で構成する要素をミクロ的に観察し、構成要素の改善による上位要素の向上のプロセスを明らかにすることを目的としている。2024 年度は「球技・ラケット系種目における間欠的運動能力」と題した中項目（2024 ～ 2027 年度予定）を掲げ、バスケットボールのパフォーマンス構造モデル（後述）における試合中の加減速の反復能力という要素に着目して研究を実施した。

2. 方法

研究に先立ち、バスケットボールのパフォーマンス構造モデルを作成した。バスケットボールの勝利は「得失点がプラスになる」ことであり、それを「得点」と「失点」に分解した。これらの要素を更に分解していくと、移動能力として「全身の加速度」が要素の 1 つとして組み込まれた。バスケットボールの試合中には、全身の急激な加減速を反復する必要があり、この能力は下肢パワーと有酸素性能力で説明できると構造化した。

被験者は大学体育会に所属する男子バスケットボール選手 50 名であった。実験 1 日目に下肢パワーと有酸素性能力を測定した。測定内容は、自転車エルゴメーターを用いた 6 秒全力ペダリングによる最大パワーと漸増負荷試験による最大酸素摂取量であった。実験 2 日目にバスケットボールの試合を実施した。試合は所属チーム内の模擬試合であり、選手交代なし、1 つのクォーターが 8 分、シュートファールに伴うフリースローなし、タイムアウトは各クォーター 1 回などの特別ルールを適用した。試合中、加速度センサー（Kinexon 社）を選手の腰部に装着することにより、Kinexon 社による独自の加速度指標（A.U.）を記録した。加速度指標に基づいて Low（3.6-4.2）、Medium（4.2-4.8）、High（4.8-5.5）、Very High（5.5<）に分け、それぞれの閾値における累積負荷（加速度指標の合計値）を算出した（例 :4.9 と 5.3 の加速度指標が記録された場合、High の累積負荷として 10.2 が算出される）。

3. 結果

各クォーターにおける各閾値での加速度の累積負荷と体力要素との関係について検討した。その結果、加速度の累積負荷の Low と Very High については、体力要素との間に有意な相関関係が見られなかった。一方、全てのクォーターにおいて、加速度の累積負荷の Medium と High は、最大パワーとの間に有意な相関関係が見られなかったが、最大酸素摂取量との間に有意な相関関係が見られた（P < 0.05）（図）。

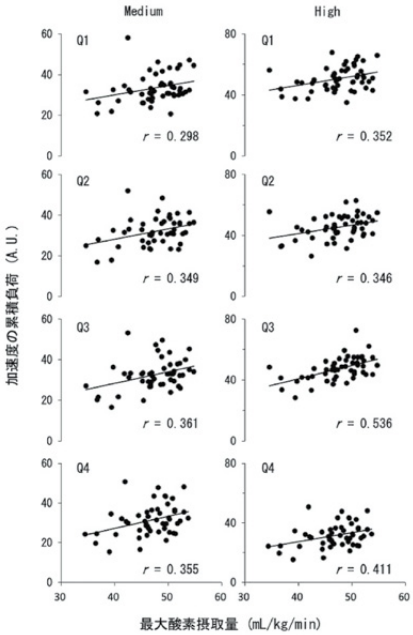


図　試合中の加速度の累積負荷と最大酸素摂取量の関係

4. 今後の予定

2024 年度には試合中の心理評価、脱水評価に加え、ストレスマーカーの測定も実施した。試合中の間欠的運動能力について複合領域的に検討を進めていく予定である。また、2025 年度以降は観察研究及びトレーニング研究を通して構成要素（下肢パワー、最大酸素摂取量）の変化が上位要素（加減速の反復能力）に及ぼす影響について検討する。さらに、ラケット系スポーツについても同様の研究モデルで研究を進める予定である。

（文責　安藤　良介）

2. デジタル技術・用具の強化活動への実装

研究代表者　尾崎宏樹（スポーツ科学研究部門）
メンバー　星川雅子、石毛勇介、山邉芳、相原伸平、稲葉優希、袴田智子、中島大貴、加藤聡志、來海郁（以上、スポーツ科学研究部門）、山本悠介（デジタル推進室）
外部協力者　木村新（法政大学）、鈴木功士（日本大学）、吉岡伸輔（東京大学）、桝井文人（北見工業大学）

1. 背景・目的

ハイパフォーマンススポーツの強化活動において、スポーツに関わる企業や研究者などから、強化現場に対して新しい技術や用具、デバイス等（以下、ツール）の導入を提案されることが多い。それらの中には、競技パフォーマンス向上に資するものがある一方で、強化活動の実態に合わず、ツールの活用が継続されない例も散見される。不適切なツールの導入を検討することは、双方にとって、無駄なコストを費やすことになるだけでなく、導入前の状態に戻すことが困難になるリスクもある。新たなツールをハイパフォーマンススポーツの強化活動に導入するには、メリットとリスクを十分に検討した上で、適切なプロセスにのっとって進める必要がある。そこで「研究の柱」の柱２では、用具、AI、アプリケーションの開発と強化活動への実装を目的とした５つの異なる研究を実施したのち、

・異なるツール開発及び実装へのプロセスにおいて、共通して必要とされる要件
・用具開発、AI 開発、アプリケーション開発の場合にそれぞれ求められる実装のための要件を明らかにすることを目的とした。

2. 実装の定義

各開発ツールが、以下のような状態で強化活動に活用されている状況が確認できたことをもって目標を達成したこととする。

(1) 用具の実装
　開発した用具がオリンピック競技大会・パラリンピック競技大会に向けたトレーニングにおいて継続的に使用され、かつ、オリンピック競技大会・パラリンピック競技大会において選手がいつでも使用可能な状態

(2) AI の実装
　開発した AI が NF コーチやアナリストの分析フローに組み込まれている状態

(3) アプリケーションの実装
　開発したアプリケーションが NF コーチやアナリストの分析・評価フローに組み込まれている状態

3. 各中項目の研究テーマ

柱２では、以下の５つの研究テーマを柱の中項目と位置付けて実施している。各研究テーマの詳細は別に記載する。

(1) 冬季ウエアの空気力学的機能向上のための研究
(2) パラアルペンスキー競技力向上のための用具
(3) 競技特化及び簡易計測を実現するトラッキング
(4) AI を用いた戦術分析や戦術トレーニング支援に関する研究
(5) 映像及び生体情報を活用したリモート支援システムの構築

(5) で開発したアプリケーションのインターフェイスの一例を図に示す。

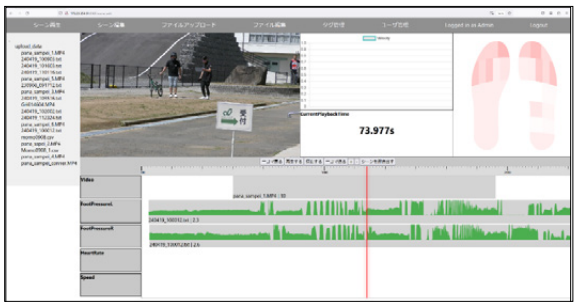


図　リモート支援システム JISSkineSys のインターフェイス

4. 強化現場への実装のための要件案

本研究の目的である、開発するツールに共通して求められる強化現場への実装の要件と、ツールごとに求められる同要件については、５つの研究テーマにおける研究活動が全て終了した時点で取りまとめて検討することとしている。ここでは、これまでに各中項目で実施してきた研究活動を通じて得られた、現時点における共通した開発・実装のための要件案を表に示す。

表　ツール実装のための観点と要件（案）

観点	要件（案）
機能性	ニーズに合った設計
	パフォーマンスの最適化
実用性	ユーザビリティの考慮
	実環境での動作検証
ツールの評価	実装の効果や影響の測定
	理論と実践のギャップの分析
	改善点の特定と反復的な改良
実装環境	競技規則等への適合
	ユーザーへの重要性の啓発

5. 今後の課題

今後は、各中項目完遂後、ユーザー等からのアンケート調査結果も参考に、適切な開発と実装のために重要な要素を明らかにする。

（文責　尾崎　宏樹）

3. 競技会開催地に応じた特殊環境対策の実装

研究代表者　中村真理子（スポーツ科学研究部門）
メンバー　岩田理沙、衣笠泰介、小出所大樹、笹代純平、清水和弘、清水潤、清水怜有、田中喜晃、谷村祐子、玉井伸典、元永恵子、花岡裕吉、星川雅子、門馬怜子（以上、スポーツ科学研究部門）、高橋佐江子、庄子理絵（以上、スポーツ医学研究部門）、山本悠介（デジタル推進室）
外部協力者　内藤貴司（北海学園大学）、竹林由武（福島県立医科大学）、山仲勇二郎（北海道大学）

1. 背景・目的

暑熱、寒冷、高地（低酸素）環境下で開催される国際競技大会に向けては、これらの特殊環境にさらされることによるパフォーマンス低下を最小限に抑えるため、各環境への順化、身体の冷却、保温、リカバリーといった対策が重要である。国外への遠征時には、時差調整や長時間の移動による疲労、さらには感染症対策も重要な要素となる。ロサンゼルス2028大会では、東京2020大会ほどの高温多湿な環境ではないものの、熱波や日内気温変動の影響を受け、断続的な暑熱環境下での開催が予想される。また、ミラノ・コルティナ2026大会では、寒冷及び準高地環境での開催が予定されている。これらの特殊環境に適応するためには、戦略的な環境対策を実施し、競技パフォーマンスを最適化することが求められる。

本研究では、国際大会開催国の特殊環境に対応した実践的な対策方法を確立することを目的とし、(1) 夏季大会に向けた暑熱対策プロトコルの開発、(2) 海外遠征時のコンディショニングに有用なツールの開発、(3) 国際大会開催地に応じたコンディショニング手法の実証、について検討した。

2. 各中項目の研究テーマ

(1) 夏季大会に向けた暑熱対策プロトコルの開発

競技現場で効果的かつ実践的な暑熱対策プロトコルの開発を目的とし、炭酸泉浴を用いた3日間の順化浴が暑熱順化方法として効果があるかを検討した。

運動習慣のある健常男性10名（$\dot{V}O_{2max}$、55.3 ml/min/kg）を対象に、3日間連続の順化浴（炭酸濃度1,000ppm、40℃、10分温浴、5分休憩を3セット）を実施し、温熱指標（深部体温、皮膚温）、心血管系指標（心拍数、皮膚血流量）、局所発汗量、温熱感覚及び温熱不快感を評価した。

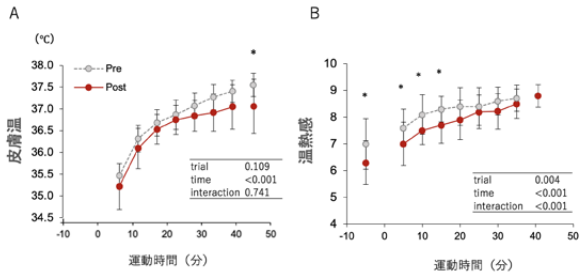


図　順化浴前後における皮膚温（A）及び温熱感（B）の変化

順化浴の前後において、運動継続時間及び深部体温に差は認められなかった。一方、順化浴後は運動終了時の皮膚温が低下しており（図A）、温熱感（図B）及び熱快適感は運動開始前半において低値を示した。現在、順化浴日数の延長条件について追加検討中である。2025年度は温熱刺激を活用した適応・回復プロトコルの開発について検討する予定である。

(2) 海外遠征時のコンディショニングに有用なツールの開発

2024年度は、海外遠征時におけるアスリートのコンディショニング支援ツールの開発に向け、関連知見の収集と仕様の検討を進めた。具体的には、時差調整（光照射、食事、睡眠リズム）、感染症対策、海外遠征中の食事・トレーニング管理といった観点から、国内外の文献や先行事例を幅広く調査し、ナラティブレビューとして発表する予定である。これにより、遠征に伴う体調管理上の課題とその対処法について、科学的根拠に基づく知見の収集・整理を進める。さらに、こうした知見をアスリートが実際に活用できるナビゲーションツールへと展開するために、技術的に実装可能な内容や、ユーザーにとっての使いやすさを考慮した情報設計についても検討を進めており、情報収集を継続しながらツールとしての仕様を段階的に具体化しているところである。2025年度は、ツールの実装に向けプロトタイプの開発や実証に取り組む予定である。

(3) 国際大会開催地の特殊環境に応じたコンディショニング手法の実証

冬季競技を対象に、夏季のトレーニング期から冬季の試合期を通したトレーニング負荷のモニタリング手法の検討を行った。エリートスノーボード選手16名を対象に、2023年に開発したコンディション指標の一元管理ツールを用いて、夏季及び冬季トレーニング時の生理学的応答（深部体温、推定筋温、心拍数）や睡眠変数、起床時心拍数などを日々モニタリングし、コンディションを評価した。2025年度以降は、選手個別のコンディション変動要因の抽出や単一事例における統計的手法の検討を行う予定である。

3. 今後の課題

2025年度以降は、各中項目から得られた知見や先行研究をまとめ、特殊環境に応じた包括的（分野横断的）かつ実践的な対策方法を確立し、支援における活用を目指す。

(1) (2) の研究テーマは、大塚製薬株式会社との共同プロジェクト「JSCハイパフォーマンススポーツセンター Total Conditioning Research Project NEXT」の一環として実施した。

（文責　中村　真理子）

4. スポーツ医学に対する疫学的アプローチの強化

研究代表者　福嶋一剛（スポーツ医学研究部門）
メンバー　中嶋耕平、半谷美夏、西田雄亮、橋本立子、重本理花、蒲原一之、友利杏奈、能瀬さやか、三ツ山晃弘、笹代純平（以上、スポーツ医学研究部門）
外部協力者　中田由夫（筑波大学）、中山晴雄（東邦大学医療センター大橋病院）、大伴茉奈（桐蔭横浜大学）、清原康介（大妻女子大学）、笹井浩行（東京都健康長寿医療センター研究所）、小島佑基（つくばセントラル病院）

1. 背景・目的

アスリートに対しエビデンスに基づいた予防戦略を実施するためにスポーツ外傷・障害及び疾病の実態を明らかにする基礎データは必要不可欠であり、スポーツ疫学の重要性は国際的にも提唱されている。我が国において、特定の外傷・障害調査は行われているが、対象や期間等の限定的な内容となっており、競技種目の枠組みを超えた継続的な調査は行われていない。

JISS スポーツクリニックは開所以来、メディカルチェック（MC）及び外来診療を実施しており、膨大な診療データが蓄積されている。また、JOC や JPSA と医療業務委託契約を結び、各国際総合競技大会の選手団本部医務を担っている。さらに、組織内に災害共済給付事業部を有し国内学校管理下の外傷・障害・疾病データを管理している。

これらのデータを属性・カテゴリーごとに分析することで、アスリートの健康状態に関する多角的なデータベース構築につなげ、将来の分析的調査の基盤とすることを目的とした。

2. 各中項目の研究テーマ

本研究は 3 つの中項目で構成される。

(1) ハイパフォーマンススポーツにおけるメディカルプロブレムの標準化と特徴の抽出

クリニックに蓄積された診療データから、過去に整形外科・婦人科・心療内科領域の各調査が行われたが、こうした単一領域の調査では領域間の関係性について評価が困難であった。複数領域での疫学的アプローチによってアスリートの健康状態に関する総合的特徴を示すことを目的とする。標準化された分類法で集計することにより、競技間、競技レベル間、多国間の比較検討も可能となり、既存の調査で示されていない関係性の評価も可能となる。

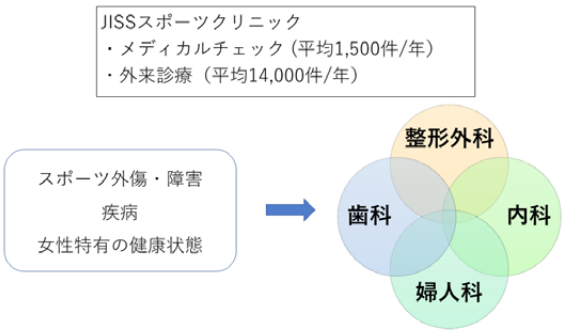


図 1　中項目（1）の調査イメージ

(2) ハイパフォーマンススポーツにおけるメディカルサーベイランスシステムの構築

JOC や JPSA が管轄する国際総合競技大会期間中の外傷・障害・疾病について、これまで選手団本部医務及び各競技団体メディカルスタッフと連携し情報収集及び報告を行っていた。既存の方法を基に聴取内容を整理しオンライン化することで一元的、即時的に情報収集を可能とし情報共有及びデータベース構築を行う。収集されたデータから記述疫学的特徴（人、場所、時間）の分析を行う。

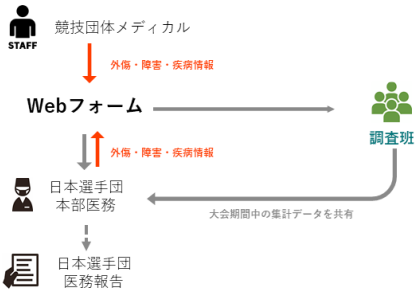


図 2　国際総合競技大会でのサーベイランス

(3) スポーツ活動における脳振盪サーベイランスシステムの構築への取組

2023 年度基盤研究の継続テーマであり、スポーツ医学分野で重点的調査テーマとして上記中項目とは別個に扱っている。パフォーマンスレベルに問わずスポーツ関連脳振盪（SRC）の疫学的特徴を調べるため災害共済給付データを対象に調査を行った。次に、ハイパフォーマンススポーツに従事するアスリートの SRC について調査するためクリニックの MC データや一般診療データを解析し、エリートアスリートの SRC について予防戦略につながる関係性の探求を行う。

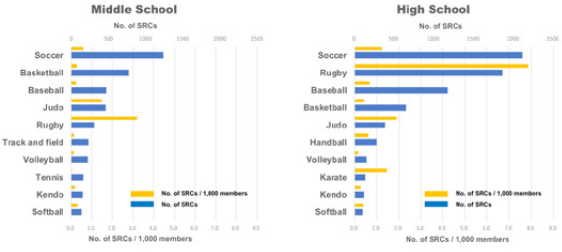


図 3　競技別の脳振盪発生割合（災害共済給付データ）

3. 今後の課題

記述的な調査で得られた所見から実行可能な探索的テーマを設定し研究を進めることで、現場に有効な知見を見出す。

（文責　福嶋　一剛）

5. 社会的背景を考慮したスポーツ科学・医学・情報支援の推進

研究代表者　久保田潤（スポーツ科学研究部門）
メンバー　白井克佳、衣笠泰介、山下修平、中村有紀、中村真理子、萩原正大、岩田理沙、門馬怜子、原村未来（以上、スポーツ科学研究部門）、友利杏奈、西田雄亮、近藤みどり（以上、スポーツ医学研究部門）
外部協力者　相澤勝治（専修大学）、中村大輔（日本サッカー協会）、鈴木なつ未（拓殖大学）、松田知華（日本学術振興会）

1. 背景・目的

持続可能な国際競技力の向上を実現するためには、スポーツ界だけでなく、スポーツを取り巻く国内外の社会構造や社会情勢の変化にも目を向ける必要がある。競技パフォーマンスに影響を及ぼし得る様々な要因が顕在化している現状を無視することはできない。今後の人口減少に伴い競技スポーツ人口の減少が見込まれる中で、地域関係機関との連携強化やアスリート育成パスウェイの構築等を通じて、世界で活躍するトップアスリートを継続的に輩出するための仕組みを充実させることが重要となる。自然科学的な観点や手法を用いたハイパフォーマンススポーツ研究に加え、社会科学的な観点や手法も取り入れた研究活動を通じて、エビデンスに基づく支援策の充実を図る必要がある。2024 年度は「アスリート育成パスウェイの充実に関する研究」を中項目として掲げ、子どもがスポーツに触れてからトップアスリートに至るまでの過程である「アスリート育成パスウェイ」に着目して研究を実施した。

2. 研究課題の設定

本研究では、アスリート育成パスウェイに着目し、以下の 3 つの研究課題を設定した。
課題①　スポーツタレントからエリートアスリートまでの身体及び体力面に関する縦断的な検討
課題②　女性アスリートの多様な課題を考慮した女性アスリート育成パスウェイモデルの構築
課題③　競技別のアスリート育成パスウェイを構築するための多様な実践的な知見の蓄積

課題①では、F 県の地域タレント発掘・育成事業（TID 事業）参加者（スポーツタレント）の体力測定値と、その中から最終的にシニア日本代表レベルまで到達したエリートアスリートの体力測定値を用いて、比較検討を行った。

課題②では、競技引退後の女性アスリートを対象に半構造化インタビューを実施し、ジュニア期からシニア期までの競技生活における女性アスリート特有の事例を収集した。

課題③では、競技別パスウェイモデル構築を目的としたワークショップを実施し、アクションリサーチ法を用いて、各 NF におけるアスリート育成パスウェイを構築する過程を検証した。

3. 結果

課題①について、スポーツタレントにおける中学 3 年生時の体力測定値は、一般の中学 3 年生より高い値を示していたものの、スポーツタレントの中（体力測定値の高いグループ内）で、体力面が必ずしも優れていなくてもエリートアスリートとして活躍した事例が確認された（図）。また、スポーツタレント期である中学 3 年生時の跳躍力、調整力、反応能力及び有酸素性作業能力は、エリートアスリートにおけるそれらの能力を反映している可能性が示唆された。

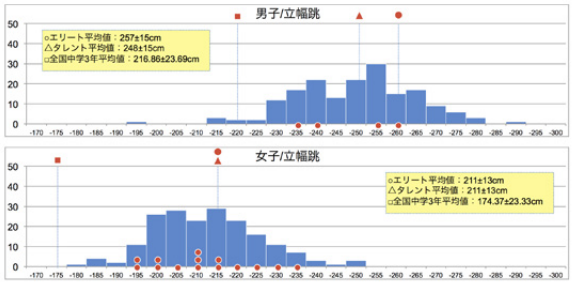


図　F 県スポーツタレント（中 3）立幅跳の結果分布
（※●がエリートアスリートの分布を示す）

課題②について、月経周期がパフォーマンスに及ぼす影響は、定量的な観測が難しいハイパフォーマンスアスリート特有の主観的な感覚が存在すること、女性アスリートのコンディショニングへの理解は指導者とアスリート自身のリテラシーや相互の関係性にも依存することなどが新たに明らかになった。

課題③について、NF 内での変化としては、「これまで取り組んできたことや考えてきたことが可視化され、共通理解を構築し、明確な目標を共有できるようになった」という肯定的な内省報告が得られた。一方で、パスウェイモデルの構築過程における課題として、日本版 FTEM の概念理解の困難さ、組織マネジメント上の困難さ、経験や情報の可視化・言語化の困難さが挙げられた。

4. 今後の課題

今後は、多面的な視点から、地域と NF とが有機的に連携したアスリート育成パスウェイの構築に寄与する学術的な知見を獲得し、我が国の少子化問題等によるスポーツ環境の維持が困難である現代社会において、持続可能な形でアスリートの発掘・育成・強化を円滑につなぐための重要要因を明らかにする。

（文責　山下　修平）

6. 総合型サポートに直結する研究

a) 採点競技における演技の出来栄えの決定要件の究明

研究代表者　横澤俊治（スポーツ科学研究部門）
メンバー　　窪康之、尾崎宏樹、山下大地、鍔木悠里奈（以上、スポーツ科学研究部門）
外部協力者　河野由（大東文化大学）、實宝希祥（九州共立大学）

1. 背景・目的

採点競技は「どのように見えたか」という演技の出来栄えを採点の対象としているため、効果的なパフォーマンス構造モデルを構築するためには演技の出来栄えの採点につながる動きや事象を示す必要があると考えられる。このためには、実際に採点を行う審判員が演技の出来栄えをどのように評価しているかを把握することが有益であると考えられる。これまで採点競技では採点規則をよりどころにパフォーマンス構造を推測してコーチングや科学的サポートに活用するしかなかったが、採点規則の内容を物理量に置換することができれば、審判員が実際に行う採点に沿ったパフォーマンス構造モデルを構築することが可能となる。そこで本研究では、審判員が演技の出来栄えをどのように評価しているかを把握することで、審判員の着眼点に基づいた演技の出来栄えの構成要素を明示することを目的とした。

2. 実施概要

対象競技には、減点型の典型としてトランポリンを、定性相対評価型の典型としてスノーボード・ビッグエアを対象とした。図は、両競技に共通する研究の手順を示したものである。初めに有資格者数名を対象に、競技規則に基づいてどのように採点を行っているのかに関して半構造化面接を用いて調査し、採点の着眼点をリスト化する。次に実際の運動を対象に動作分析用と採点用の撮影を同時に行う。そして、撮影用映像を基に有資格者が採点するとともに、その根拠となる着眼点をリストより選択する。一方、3 次元動作分析によって主要な着眼点に関連する物理量を算出する。最後にそれらの物理量と着眼点ごとの評価との関係を回帰分析によって検討する、という流れである。

2024 年度、トランポリンについては回帰分析まで完了した。表には、その一例として主要な減点理由である「タック姿勢がコンパクトではない」という着眼点について、減点（正の値）を目的変数とした重回帰分析の結果を示した。説明変数の中でタック姿勢を囲う周囲長の最小値の標準偏回帰係数が最も大きかったが、周囲長の平均値の標準偏回帰係数は負の値を示した。このことは、周囲長最小値が小さい割にはその平均値が大きいこと、すなわち伸身姿勢とタック姿勢とのめりはりが効いた演技が減点を抑えるために重要であることを示していると考えられる。

一方、スノーボード・ビッグエアについては、採点調査まで実施した。着眼点として 26 個の項目が抽出された。この競技では審判は要素ごとに採点するのではなく総合点のみを付ける。そこで、採点調査による各着眼点の評価（当てはまる場合に 1、当てはまらない場合に 0）と総合点との関係を重回帰分析によって検討した。その結果、決定係数は 0.65 であった。このことは、定性相対評価型競技では、物理量に置換する以前に、着眼点ごとの評価だけでは十分に得点を推定し切れない可能性があることを示唆している。

（文責　横澤　俊治）

表　トランポリンの減点理由「タック姿勢がコンパクトではない」の重回帰分析結果

物理量	標準偏回帰係数	P値
周囲長の最小値	1.80	<0.01
周囲長の平均値	-1.28	<0.01
宙返りの方向	0.35	<0.05



図　研究の流れ

6. 総合型サポートに直結する研究

b) スノーボードスロープスタイル・ビッグエアにおける外傷・障害予防のための調査とフィットネス評価

研究代表者　稲葉優希（スポーツ科学研究部門）
メンバー　尾崎宏樹、石毛勇介、岩田理沙、ヘンダーソンフレデリック（以上、スポーツ科学研究部門）、
西田雄亮、高橋佐江子、髙橋由衣（以上、スポーツ医学研究部門）、山本悠介（デジタル推進室）
外部協力者　大伴茉奈（桐蔭横浜大学）

1. 背景・目的

スノーボード競技スロープスタイル（SS）種目及びビッグエア（BA）種目（SSBA）は、ジャンプ台や障害物等のセクションにおける技全体の完成度や難易度、新規性等で評価される Overall Impression ポイントで順位を競う種目である。選手は、他の選手より高く飛び、空中でより多くの回転をして高い得点を得る必要があり、大会では失敗による転倒のリスクが大きい、困難な技に挑戦する。実際に多くの選手が競技中の受傷によってシーズン中の大会を欠場している。

これまでの国際スキー連盟（FIS）の調査においても、SSBA においては、滑走 1,000 回当たり 10 件程度の割合で怪我が発生していることが報告されている（FIS Injury Surveillance System 2006-2019）。オリンピック競技大会当日に最大限のパフォーマンスを発揮するためだけでなく、シーズン中の各大会へ継続的に参加するため、あるいはトレーニングを継続的に実施するため、そしてアスリートが競技以外の日常生活を支障なく過ごすためにも、SSBA における怪我の予防は重要な課題である。しかし、SSBA に対象を絞り、詳細に受傷の実態と怪我の発生原因を検討した研究はみられず、受傷の実態と原因が特定できない限りは予防策を立てることも困難である。そこで、本研究では、SSBA に特化して競技中の受傷に関する実態調査と原因調査を行い、その結果を基に怪我の予防策を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の概要

怪我の予防策を提案するためには、Sequence of prevention（van Mechelen et al., 1987）で示された段階を踏む必要がある。まずは対象競技における受傷実態（どのような怪我がどれくらいの重症度、頻度で発生しているか）を理解し、次にその怪我が起きている原因を明らかにする。その上で予防策を講じて、その効果を評価する。このサイクルを繰り返し実施していくことが怪我の予防に向けては必要であると考えられている。そこで、2023 年度、2024 年度は、怪我の予防策提案において必要な最初の 2 つのステップである、怪我の受傷実態及び原因調査を進めた（図）。

実態調査においては、SSBA 日本代表チームのスタッフと協力して、これまでに蓄積された受傷情報の整理と、対象選手を拡大した受傷実態の調査を行った。その結果、他の種目を含めたスノーボード競技全体の受傷傾向と比較すると、SSBA では下肢の受傷は少ないが、上肢、特に肩関節や鎖骨部及び頭部の受傷が多い傾向が確認された。また、男女でも受傷の特徴に差異がみられ、女子選手では選手 1 人当たりの受傷件数は男子選手と比較すると多いが、重症度が低いと分類される場合が多いことが確認された。

次に、怪我の受傷原因を検討した。怪我が起きる原因は複合的であり特定することは容易でないが、原因となり得る要素を抽出し、定量化することによって、危険因子を明らかにできると考えられている（Bahr & Krosshaug, 2005）。

危険因子となり得る要素としては年齢、性別、形態的特徴、健康状態、体力（筋力、パワー、最大酸素摂取量、関節可動域）、技術レベル、心理的要因のようなアスリートの内的要因に加えて、その競技のルールや競技用具、環境（天気や雪の状態、コース設定）などの外的要因が挙げられる。さらに、それらの要因に加えて競技中に実際に怪我を誘発する動き（誘発事象）が起きることにより怪我が発生すると考えられる。そこで、受傷映像の分析とコーチへのヒヤリングを通して、合計 27 件の受傷ケースに関して、内的要因、外的要因及び誘発事象の特定を進めた。多くの受傷事象において、当日の雪質の影響が確認された。また、そのような外的要因によるリスクが高まったとしても、選手のスキルによって回避できると考えられる事象も存在していた。受傷後にその原因を振り返り分析することや、チーム内で共有する機会を持つことも、怪我の予防においては重要である。今後は、受傷の実態や原因を明記し、受傷を予防するための対策を検討し、チームに提案する。

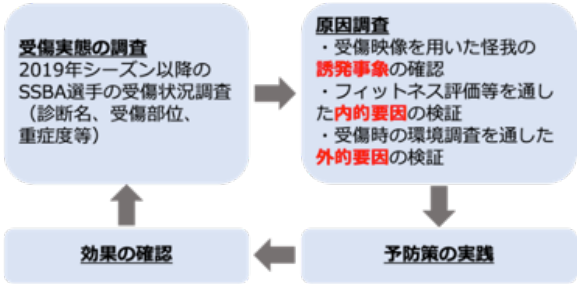


図　怪我の予防のために必要な段階と本研究の取組についての概要

（文責　稲葉　優希）

6. 総合型サポートに直結する研究

c) スノーボードスロープスタイル・ビッグエアにおける選手の心理的特性とコーチのコーチング行動に関する実態調査

研究代表者　尾崎宏樹（スポーツ科学研究部門）
メンバー　　髙橋由衣、柄木田健太、本郷由貴（以上、スポーツ医学研究部門）
外部協力者　岩崎晋（Fort Lewis College）

1. 背景・目的

スノーボードスロープスタイル・ビッグエア（SSBA）のナショナルチームに対する総合型サポートでは、選手が抱える個別の心理的問題に対して、コーチから、どのようにコーチングすべきか助言を求められることが多い。しかし、選手個々の心理的特性の応じたコーチング行動や心理的アプローチの手法にはいまだ不明な点が多い。そこで本研究では、

・SSBA トップ選手の心理的特性の解明
・SSBA コーチのコーチング傾向の調査
・コーチング行動と選手の行動変容による競技パフォーマンスへの影響のモニタリング
・選手の心理的特性を考慮したコーチングプロセスの一般化を行うこと

を目的とした。なお、ここでは「SSBA トップ選手の心理的特性の解明」について報告する。

2. 方法

コーチが適切なコーチングを行う上で参考となる、SSBA 選手の心理的特性について、以下のとおり調査した。

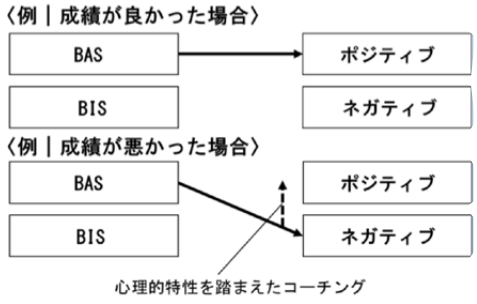


図 1　選手の心理的特性に応じたコーチングのイメージ

質問紙調査

(1) 調査対象者

SSBA の強化指定選手 14 名（男性 7 名、女性 7 名、平均年齢 19.3 ± 2.7 歳）

(2) 調査内容

SSBA 選手個々の心理的特性について調査するため、パフォーマンス発揮に伴う行動傾向 (※ BIS/BAS 尺度日本語版、髙橋ほか, 2007）について調査した。また、2023 年度シーズンの大会を振り返らせ、成績が良かった大会と悪かった大会での心理状況について質問することで、それぞれの場面での感情傾向（日本語版 PANAS、佐藤･安田, 2001）についても調査した（図 1）。

※ BIS：行動を起こす際に恐怖となる要因（ミスや怪我など）に対して反応する動機づけシステム
BAS：行動を起こす際に報酬となる要因（技の成功など）となるものに対して反応する動機づけシステム

3. 結果・考察

(1) SSBA 選手の行動傾向

質問紙調査の結果、BIS 傾向を示す選手が 6 名、BAS 傾向を示す選手が 8 名おり、SSBA 選手としての一定の傾向は認められなかった。一方で、SSBA 選手の行動傾向を他の競技等と比較するため、パワーリフティングなどのストレングススポーツ選手（Cusimano et al., 2023）、日本人一般成人（髙橋ほか, 2007）との比較を行った結果、SSBA 選手は、BIS において他よりも有意に得点が低く、BAS において他よりも有意に得点が高かった（図 2）。

(2) 大会での感情傾向

BIS 傾向にあり、かつ、ネガティブ感情を有していた選手が、パフォーマンスの良し悪しに関わらず有意に多かった（$p<0.05$）。

以上のことから、SSBA 選手は、脅威に対する行動傾向は低く、良いパフォーマンスをすることで高評価を得たいというモチベーションがストレングススポーツや一般成人より高いと考えられる。

一方で、実際の大会では、少しのミスで重大な怪我につながる可能性があるというプレッシャーや不安と常に向き合いながら競技をしている選手が多いと考えられる。適切な心理的状態で大会に臨むには、選手個々の心理的特性に応じた対応が必要であると考えられる。

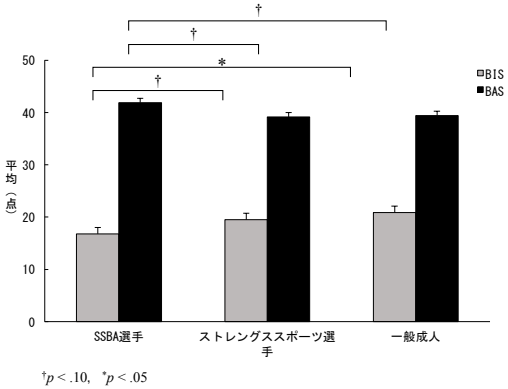


図 2　各属性における BIS・BAS 得点の平均値及び標準偏差

4. 今後の課題

今後は、コーチング行動の特徴を明らかにするためのインタビュー調査、SSBA 選手の心理的特性に応じた適切なコーチング行動の検討を行い、それが競技パフォーマンスに及ぼす影響について検討する。

（文責　尾崎　宏樹）

❷ 特別プロジェクト研究

世界陸上 2025 における世界一流および日本代表陸上競技者のパフォーマンスと技術

研究代表者　松林武生（スポーツ科学研究部門）
メンバー　景行崇文、牧野瑞輝、後藤晴彦、小泉潤（以上、スポーツ科学研究部門）
外部協力者　杉田正明、高松潤二、森丘保典、三浦康二、丹治史弥、髙橋恭平、山中亮、貴嶋孝太、小山宏之、苅山靖、 瀧川寛子（以上、日本陸上競技連盟科学委員会）、大沼勇人（神戸女子大学）、 笠井信一（愛知淑徳大学）、岩崎領（阪南大学）、柴田篤志（新潟医療福祉大学）、杉浦澄美（筑波大学）

1. 背景・目的

2025 年､東京において世界陸上競技選手権大会（世界陸上 2025）が開催される。日本における開催は 1991 年の東京、2007 年の大阪に続いてこれが 3 回目となる。過去 2 回の大会においては、日本陸上競技連盟（JAAF）の科学委員会が中心となってバイオメカニクス研究が実施され、その成果は国内外で高く評価されている。再び東京で開催される世界陸上 2025 は、世界一流陸上競技者のパフォーマンスを改めて研究することができる貴重な機会となる。測定機器や分析方法の進化もあり、過去には叶わなかった内容でのデータ収集が実現し、新たな知見を獲得できることも期待される。

JISS では、世界陸上 2025 に出場する世界一流陸上競技者のパフォーマンスと技術を分析し、陸上競技及び他競技にも応用できる研究知見を創出することを目的として、特別プロジェクト研究を立ち上げることとした。本研究は 2024 年度から 2025 年度までの 2 年間にて行い、JAAF の科学委員会と協働して実施する。世界陸上 2025 において、科学委員会は全ての種目を対象として研究を実施する計画としているが、本研究は特に短距離・リレー、棒高跳、やり投に着目する。

2. 方法

短距離種目に関しては、スプリント走動作についての先行研究がこれまでにも様々になされている。その多くは、走速度が最高となる際の走動作を検討したものであり、具体的には、100m 走においては 50-60m 地点付近が分析対象の範囲とされている。しかしながら、全ての短距離競技者が必ずしもこの地点で最高走速度に到達するとは限らない。つまり、これまでの知見には再検討の余地が残されているといえる。また、走速度が最高となるまでの加速局面や、その後の減速局面、更には 200m 走や 400m 走において曲走路を走る局面など、これまで大きな注目を集めていなかった局面にも検討を行う価値がある。しかしながら、これらの局面を競技者ごとに特定し、局面ごとに分析していくためには、非常に広範囲での動作分析が必要となる。そこで本研究は、レース中の短距離競技者の走動作をスタートからフィニッシュまで測定できる動作分析手法を確立させ、これを活用して世界陸上 2025 における研究を実施する。手法の概要は 2023 年度の競技研究「スプリント走の能力および技術の測定評価方法の確立」において既に検討されており、本研究ではこの実用上の課題を整理して競技会におけるデータ収集・解析方法を確立させる。2024 年度には 3 つの競技会において 100m 走での測定を試行し、カメラ配置等の適切な撮影条件の検討を行うとともに、十分な精度にて競技者の走動作を捉えることができることを確認した。

棒高跳に関しては、踏切後の競技者からポールへの力学的エネルギーの伝達と、競技者の上昇へのエネルギー再利用に着目する。先行研究において､ポールに伝達するエネルギーが大きい競技者ほど跳躍高が大きいことが示されている。これには、助走における走速度、適切な踏切位置、ポールに効果的にエネルギーを伝達するための適切な動作が関与すると推察される。しかしながら、世界一流棒高跳競技者が大きなエネルギー伝達をどのように実現させているのかはこれまでに検討されていない。そこで本研究では、世界陸上 2025 に参加する世界一流棒高跳競技者を対象としてデータを収集し、その技術を明らかにする。2024 年度には競技会において棒高跳の跳躍動作を捉えるための撮影条件を検討し、日本人競技者を対象とした測定を通して適切にデータ収集と解析を行えることを確認した。

やり投に関しては、多くの先行研究においてやり初速度が投擲距離に大きく貢献することが示されている。ただし、競技水準の高い競技者のみに焦点を当てた際には、その他にも投擲距離に貢献する要因が顕在化することも示されている。このことは、やり投擲距離には複数の要因が貢献しており、その要因や関連する投擲動作が競技水準などによって異なっている可能性を示唆している。そこで本研究では、世界陸上 2025 に参加する世界一流やり投競技者を対象としてデータを収集し、やり投擲距離に貢献する要因や投擲技術を明らかにする。2024 年度には競技会においてやり投動作を捉えるための撮影条件を検討し、日本人競技者を対象としたデータ収集を行うとともに、検討すべきパラメータの予備抽出を行った。

3. まとめ

本研究の主要なデータ収集は、世界陸上 2025 において実施される。適切かつ確実な測定実施を実現させるべく、準備を進めていく。

（文責　松林　武生）

❸ 萌芽研究

1. 背景・目的

JISS では、JISS が重点的かつ時限的に取り組む研究テーマとして「研究の柱」を掲げている。そして、将来的に「研究の柱」につながる小規模な萌芽的研究として「萌芽研究」を設けた。原則として、研究期間は 1 年であり、JISS の施設・設備・機器・装置等を活用して実施できる研究である。

2024 年度は、以下の 6 件の研究を実施した。

2. 実施概要

研 究 課 題 名	研 究 代 表 者
スポーツ外傷・障害の疫学・アライメントチェックとの関連性に関する研究	高橋　佐江子（医学研究部門）
ジュニアアスリートからシニアトップアスリートにかけて必要となる体力と筋の発達の検討	松林　武生（科学研究部門）
新体操における出来栄え・芸術性に関連する身体動作の構成要素の探求	鍔木　悠里奈（科学研究部門）
トップアスリートの脊椎分離症の実態解明	半谷　美夏（医学研究部門）
風洞トレーニング中における動作分析併用システムの開発	來海　郁（科学研究部門）
異なる測定機器から得られた測定データを活用する際の注意点の整理：BIA 法に着目して	米津　貴久（科学研究部門）

（文責　事務部事業推進課）

❹ 科学研究費助成事業

1. 背景・目的

JISS では、内部の研究費以外に科学研究費助成事業による学術研究助成基金助成金及び科学研究費補助金を積極的に獲得するよう努めている。

2024 年度は、以下の 46 件（内、新規 8 件、継続 16 件、延長・再延長 6 件、分担 16 件）の研究を実施した。

2. 実施概要

区　分	研　究　課　題　名	研 究 員 名
基盤研究 (B)	唾液中の時計遺伝子由来のタンパクを用いた疲労および概日リズムの新評価法の開発	清水　和弘（科学研究部門） 花岡　裕吉（科学研究部門）※
基盤研究 (C)	トップアスリートの心理的能力を向上する新たなメンタルトレーニングプログラムの開発	立谷　泰久（医学研究部門）
基盤研究 (C)	国際競技大会招致・開催に関する国内外ネットワーク構造研究	久保田　潤（科学研究部門） 和久　貴洋（科学研究部門）※
基盤研究 (C)	日本人メダリストの競技パフォーマンスに関わるレアバリアントの探索	大岩　奈青（科学研究部門）
基盤研究 (C)	競技力向上に効果的なマネジメント機能の解明	山下　修平（科学研究部門）
基盤研究 (C)	車いすアスリートの有酸素性能力を適切に評価するためのテストプロトコルの開発	尾崎　宏樹（科学研究部門） 袴田　智子（科学研究部門）※
基盤研究 (C)	一流長距離走者のランニングエコノミーに下肢筋群の活動パターンと酸素化動態から迫る	安藤　良介（科学研究部門）
基盤研究 (C)	トップアスリートの下肢の力ー速度特性とその評価を基にしたトレーニング効果の検証	山下　大地（科学研究部門）
基盤研究 (C)	プライオメトリクスの効果を引き出すための視覚情報による即時フィードバック法の開発	吉田　拓矢　（科学研究部門） 図子　あまね（科学研究部門）※
基盤研究 (C)	トップアスリートの睡眠のスクリーニングに関する研究および疫学調査	星川　雅子（科学研究部門）
基盤研究 (C)	アスリートの腸内細菌叢と主観的ストレス・リカバリー評価によるコンディションの関係	谷村　祐子（科学研究部門）
基盤研究 (C)	アスリートに対する集団コンパッショネイト・マインド・トレーニングプログラムの開発	本郷　由貴（医学研究部門）
若手研究	動作解析と試合分析を組み合わせたバスケットボールのシュート成功率向上のための研究	稲葉　優希（科学研究部門）
若手研究	拡張視野超音波画像による子どもの大腿部・体幹部・上腕部の骨格筋定量方法の確立	原村　未来（科学研究部門）
若手研究	車いすアスリートの脳振盪による眼球運動障害に対する定量的評価方法の確立	笹代　純平（医学研究部門）
若手研究	汎用性に優れた新たな持久性能力評価法の開発	山岸　卓樹（科学研究部門）
若手研究	エビデンスに基づいたリバウンドジャンプの技術指導を行うためのアセスメント法の開発	図子　あまね（科学研究部門）
若手研究	順動力学的貢献分析の指導現場への応用～サッカーゴールキーパー指導を例にして～	沼津　直樹（科学研究部門）

区 分	研 究 課 題 名	研 究 員 名
若手研究	継続的なパラスポーツ実施による身体機能の変化：脊髄損傷シットスキー選手の事例研究	中島 大貴（科学研究部門）
若手研究	女性ランナーにおける月経周期がコンディション評価指標に及ぼす影響の検討	門馬 怜子（科学研究部門）
若手研究	トップアスリートの誇りの感情経験が長期目標達成行動に与える影響の解明	近藤 みどり（医学研究部門）
若手研究	高強度インターバルトレーニングにおける新強度指標の開発	白木 駿佑（科学研究部門）
若手研究	アイススラリー摂取によるプレクーリングがその後の体温上昇速度に与える要因	岩田 理沙（科学研究部門）
若手研究	アスリートの身体疲労コンディショニングにおける効果的な入浴方法の確立	玉井 伸典（科学研究部門）
研究活動スタート支援	同一体力レベルの男女における運動時熱放散能力の比較－性差と個人差の明確化－	岩田 理沙（科学研究部門）
研究活動スタート支援	間欠的な低酸素および高二酸化炭素の曝露が下腿筋の運動機能へ及ぼす影響	波多野 慶（科学研究部門）
研究活動スタート支援	せん断波イメージングを用いた骨格筋における粘性要素の定量的な画像評価法の確立	小出所 大樹（科学研究部門）
研究活動スタート支援	Effects of various inertial loads on lower leg strength adaptations to flywheel squat training	ヘンダーソン フレデリック（科学研究部門）
研究活動スタート支援	口腔粘膜の時計遺伝子は運動の影響を受けるか？：スポーツ現場への実装を目指して	田中 喜晃（科学研究部門）
研究活動スタート支援	ヒトの遠投能力を規定する下肢運動力学の解明	牧野 瑞輝（科学研究部門）
基盤研究（B）（分担者）	超音波画像における“骨格筋の質”：エコー減衰補正法の開発と筋スティフネスへの影響	安藤 良介（科学研究部門）※
基盤研究（B）（分担者）	暑熱環境下での運動能力低下の要因と身体冷却の中枢性作用機序の解明	中村 真理子（科学研究部門）※
基盤研究（B）（分担者）	若年期ライフステージのエネルギー代謝適応と生殖機能、免疫機能との関連性の解明	清水 和弘（科学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	非侵襲計測機器データを活用した教授スキル改善のための評価基準策定	松林 武生（科学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	Virtual Reality を用いた新たな義足歩行リハビリテーションの開発	笹代 純平（医学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	骨格筋グリコーゲン回復を「見える化」できる代謝指標の探索	元永 恵子（科学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	ウェイトトレーニング手段として用いる片脚クリーンの負荷特性の解明と方法論の構築	吉田 拓矢（科学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	日焼けは運動パフォーマンスを低下させるか？	清水 和弘（科学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	卓球サービスにおける打球後のフェイント動作による回転偽装	稲葉 優希（科学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	審判員のコミュニケーションスキル向上プログラムの開発と効果検証	立谷 泰久（医学研究部門）※
基盤研究（C）（分担者）	長距離走者のパフォーマンスに及ぼすスプリントトレーニングの効果の解明	安藤 良介（科学研究部門）※

区　分	研　究　課　題　名	研 究 員 名
基盤研究 (C) （分担者）	自転車競技短距離選手のギア比選択のための客観的指標の開発と応用	横澤　俊治（科学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	第 18 回オリンピック競技大会出場選手の体力と健康の関係を明らかにする長期追跡研究	中島　耕平（医学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	第 18 回オリンピック競技大会出場選手の体力と健康の関係を明らかにする長期追跡研究	蒲原　一之（医学研究部門）※
基盤研究 (C) （分担者）	ヒトの移動運動における体幹腰背部の役割の解明	安藤　良介（科学研究部門）※
挑戦的研究 （萌芽）	筋・腱弾性を指標としたタレント発掘基準の策定：新規ミオトノメーターの有用性の確立	大岩　奈青（科学研究部門）※

※研究分担者

（文責　事務部事業推進課）

❺ 民間団体研究助成金等

1. 背景・目的

JISS では、内部の研究費や科学研究費助成事業による学術研究助成基金助成金及び科学研究費補助金以外に、民間団体の研究助成金等外部研究資金を積極的に獲得するよう努めている。

2024 年度は、以下のとおり JISS として 1 件、個人として 2 件の研究を実施した。

2. 実施概要

〈JISS〉

研 究 テ ー マ	助 成 団 体 名	担 当 研 究 員 名
球技、ラケット系種目における 間欠的運動能力　※研究の柱の一部として実施	公益財団法人ミズノスポーツ振興財団	安藤　良介（科学研究部門）

〈個人〉

研 究 テ ー マ	助 成 団 体 名	担 当 研 究 員 名
女性サッカー選手の脳振盪調査	公益社団法人日本スポーツ医学財団	福嶋　一剛（医学研究部門）
スピードスケートの高い滑走速度を生み出す関節パワー発揮特性の解明	公益財団法人石本記念デサントスポーツ科学振興財団	木村　裕也（科学研究部門）

（文責　事務部事業推進課）

(2) 先端技術を活用したHPSC基盤強化事業

スポーツ庁委託事業

1. 背景・目的

2016年10月、スポーツ庁において、「競技力強化のための今後の支援方針（鈴木プラン）－2020年以降を見通した強力で持続可能な支援体制の構築－」が策定された。これに基づき、HPSCでは、2017年度より「ハイパフォーマンスセンターの基盤整備」事業を受託し、HPSCの機能強化・充実を図ってきた。2021年度からは「スポーツ支援強靭化のための基盤整備事業」を受託し、ポストコロナを見据えつつ、更なる機能強化や環境整備を実施してきた。このことが、平昌2018大会や東京2020大会、北京2022大会における日本代表選手団の好成績につながった。また、2021年12月には「持続可能な国際競技力向上プラン」がスポーツ庁において策定され、東京2020大会での好成績を一過性のものとしないため、デジタル技術の積極的な活用等を通じてスポーツ医・科学、情報等の知見に基づく質の高いトレーニング環境の整備等を行うなど、我が国の国際競技力の維持・向上のための今後の支援方策が取りまとめられた。

本事業は、上記の新たなプランやミラノ・コルティナ2026大会やロサンゼルス2028大会も踏まえ、最新のスポーツ医・科学、情報支援の知見に基づく包括的なトータルコンディショニングの支援の実効化に向けて、場所や時間を問わずに行うことができる支援基盤の体系化のための調査研究、デジタル・映像技術等を活用した支援の開発と提供方法等の実証研究、また、競技用具等の研究、開発等を通じて、HPSCのスポーツ医・科学、情報支援の基盤を強化し、これらに取り組むことで持続可能な国際競技力の向上を目指すことを目的とする。

2. 概要

(1) 先端技術を活用したコンディショニング基盤実証研究

①有識者会議の設置・開催

諸外国の先端技術やハイパフォーマンススポーツに資する科学・医学・情報分野の支援や研究に関する専門家等との会議を設置した。その中で既存のHPSCの支援手法に関する支援基盤を踏まえ、最新のコンディショニング支援や国際競技力向上のための課題解決策の提供に関する知見や経験則に関する助言を得た。特に、既存の支援基盤を強化するために「ピリオダイゼーション」「トレーニング負荷」「リカバリー」「パフォーマンスヘルス」の概念形成、NFを含めた部署間連携した分野融合（Interdisciplinary）型支援体制のあり方、メダル獲得可能性の高いアスリートへの個別支援のあり方等についての知見を得た。

また、先端技術を用いた現行の取組の見直しを行うとともに、今後のHPSCにおける先端技術を活用したトータルコンディショニングに関する研究や支援の方向性及び計画を明確にし、具体化に向けて既存のHPSC事業等と調整を行った。

②トータルコンディショニングの支援基盤の体系化に向けた取組

HPSCにおけるトータルコンディショニングの支援基盤の体系化のため、次の取組を行った。国内外における国際競技力向上のための先端技術を活用したスポーツ医・科学、情報支援等の事例や知見及び経験則の把握のための調査（パリ2024大会日本選手団に対する大会に向けたコンディショニングに関する実態及びニーズ、ハイパフォーマンススポーツに関わる海外有識者に対する先端技術を活用したコンディショニング等）、様々な競技に応用可能で最適なコンディショニング（ピリオダイゼーション、トレーニング負荷、リカバリー、パフォーマンスヘルス等）に関する概念の定義・考え方の検討、コンディション指標に関する整理・有用性の検討を行った。また、事業で収集した情報を活用したアスリートサポート（コンディション評価・フィードバック、アスリート及びスタッフに向けたセミナーの開催）を実施した。

③トータルコンディショニング支援手法の高度化に向けた取組

先端デジタル技術等を活用することで高度なスポーツ医・科学、情報支援の現状やニーズを把握するため、NF等を対象に調査研究を実施した。これにより、先端デジタル技術等を用いたトータルコンディショニング支援手法の高度化に向けた各種現状が把握され、既存の支援方策の充実・強化が図られた。さらに、2023年度まで実施してきた5G環境のない強化現場とHPSC間で映像を遅延なく伝送する通信システム（リモート支援システム）を活用し、現地トレーナーと連携して遠隔でのトレーニング指導を行った。また、コンディション指標と運動学的情報を同期するアプリケーションの現場へ実装するためのトライアルを、実際の大会期間に実施した。

④DX等を活用した新システムの開発の検討

先端デジタル技術等を用いた高度なスポーツ医・科学、情報支援を場所や時間にとらわれず遠隔でも継続的に提供することを目指すという観点から、スマートフォンやタブレット端末を基盤とした既存の先端技術の活用等を優先的に

検討した。先端技術を活用した新たな支援手法及びツールやパッケージの開発を視野に入れ、スポーツ分野のみならず他分野における先端技術や支援事例を把握するため、国内外のスポーツ関係機関や民間企業等を対象に調査研究を実施した。さらに、本事業の調査研究や諸外国の専門家等から得られた最新の知見や経験則を踏まえ、ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンスにおいて、アスリートやコーチ等を対象にしたHPSCのトータルコンディショニング支援に関する理解促進及びリテラシー向上を支援するための取組を実施した。

(2) デジタル・映像技術を用いた支援方法の研究

①デジタル技術・先端映像技術を用いた支援手法に関する研究

本プロジェクトでは、競技現場で活用できる簡易な計測を可能とするトラッキング技術の開発、また、その技術を用いたトラッキングシステムの構築を目指している。2024年度は、バドミントン、スポーツクライミングを対象に、広く普及しているビデオカメラやスマートフォンなどの映像から人物の位置、高精度に軌跡する技術を開発した。また、スポーツ現場にて簡単にデータを取得できるよう、ソフトウェアやアプリケーションを試作した。選手の移動エリアや運動強度を可視化する機能についても開発し、戦術分析やコンディショニング支援に貢献する可能性を有していると考える。

今後は、トラッキング技術の更なる精度の向上のほか、競技種目の拡充、ライフスポーツへの応用を見据えたアプリケーションの改善を目指す。

②AIを用いた戦術分析や戦術トレーニング支援に関する研究

カーリングを主たる対象競技として、デジタル技術を活用したデータ収集・分析システムの開発と、AIを使った戦術分析・戦術トレーニング支援技術の確立を目指す。2024年度は競技現場で得られる試合・トレーニングデータを簡易かつ高度に収集できるツールを開発し、競技現場での使用を開始した。戦術的意思決定を支援するAIモデルについても構築し、幅広い競技者層向けの支援アプリケーションを試作した。また、シンポジウムの開催を通じて、スポーツデータサイエンス、スポーツAIの推進に取り組んだ。

今後は、上記技術の解析や分析精度を更に向上させ、競技環境や運用に柔軟に対応できるようシステムの最適化を進める。また、ライフスポーツへの応用に向けた環境整備も含め、研究者と実務者への連携を通じてスポーツ分野全体へのデータ活用を推進していく。

③ｅスポーツ及びバーチャルスポーツの動向に関する調査

2024年7月のIOC総会において、「オリンピックＥスポーツゲームズ」の創設が承認され、2025年にサウジアラビアで開催されることが決定された。その後、2025年2月に開催予定が2027年に延期されることが発表されたが、「オリンピックＥスポーツゲームズ」の明確なロードマップが提示され、フィジカルスポーツゲーム（バーチャルスポーツ）、シミュレーションスポーツゲーム、従来のｅスポーツゲームの3つの分類に基づいて、競技フォーマットやタイトル選定、選手の出場資格などの計画が進められている。各国際競技連盟（IF）は、競技力向上だけでなく、若者を惹きつける施策として、種目化やゲームの要素を取り入れるなどの積極的な動きを見せている。

この分野は、急速に変化しており、情報調査やイベント調査を通じて国際競技力向上に資する先進的なｅスポーツ及びバーチャルスポーツの情報収集を進めてきた。2024年度では、独自の国際ネットワークを活用し、海外の専門家を招聘して知見を共有するワークショップを実施した。また、国内外で開催されたイベント視察を通じてトップアスリートのヒアリングを行い、今後のアスリート支援に役立つ情報を収集した。さらに、2025年3月には国内外の有識者が集結し、「バーチャルスポーツフォーラム2025」を開催した（写真1）。フォーラムでは最新のｅスポーツ・バーチャルスポーツに関する動向を共有し、効果的な情報発信を行った。



写真1　バーチャルスポーツフォーラム2025の様子（3/26開催）

(3) 競技用具等の研究

①冬季競技ウエアの空気力学的機能向上のための研究

本プロジェクトは、スキージャンプ及びスピードスケートを対象に、生地と形状を最適化することによって、空気力学的に優れた競技用ウエアを開発することを目的としている。2024年度は、新たにスキージャンプ用のサンプル生地を入手し、表面形状等の物性試験や空力比較

を行った。また、実装に向けて、新ルールに適合したパターン（図）にてプロトタイプのスーツを製造し、フィールドテストを実施した。

スピードスケートウエア用の新規生地では、下生地と重ね生地の組み合わせについて脚模型を用いた風洞実験を行い、空力比較を実施。新規生地を用いた製品を製造した。ウエアの国際的な動向についても注視しながら、引き続き開発を進めていくことが重要である。

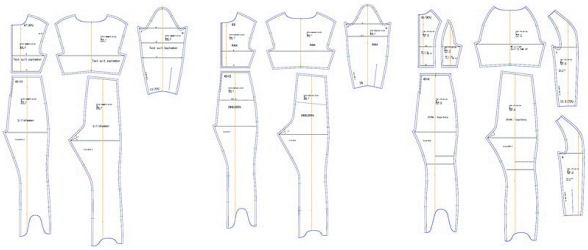


図　3選手の新規パターン

②パラアルペンスキーにおけるパフォーマンス向上のための用具等開発研究（シットスキーの開発）

本プロジェクトの目的は、パラアルペンスキー日本代表チームの課題を踏まえたシットスキーを開発・研究し、雪上でのパフォーマンスを高めることで競技力向上に寄与することである。2024年度は、2023年度に設計・製造したフレームに対して設計変更を行い、新たなプロトタイプ（写真2）を製造し、雪上にてテストを実施した。また、ミラノ・コルティナ2026パラリンピックへの実装に向けて、規定にのっとり、国際スキー・スノーボード連盟への用具登録を行った。



写真2　製造したシットスキーフレーム
（左が高速系、右が技術系）

③パラアルペンスキーにおけるパフォーマンス向上のための用具等開発研究（アウトリガーの開発）

本プロジェクトの目的は、パラアルペンスキー日本代表チームの課題を踏まえたアウトリガーを開発・研究し、雪上でのパフォーマンスを高めることで競技力向上に寄与することである。

2024年度は、2023年度にアウトリガーをリバース・エンジニアリングした結果を基に、シャフト部分をストレートに、また、グリップの角度を変更したプロトタイプを製造し、雪上にてスタート動作の比較テストを実施した。また、グリップの角度が2段階に可変となるモデルについても検証すべく、設計及び製造を実施した。

3. 実施体制

JISSスポーツ科学研究部門を主担当部署とし、各プロジェクトに責任者となる研究員及び担当者を配置し、競技団体、企業等と協力してプロジェクトを推進した。また、ハイパフォーマンス戦略部や国際情報戦略部が調査などで、連携・協働推進部がカンファレンス等の開催や広報などで事業推進に協力している。四半期に一度、JISS所長を含めた推進会議を実施し、事業計画の意思決定及び変更の承認を行った。

（文責　スポーツ科学研究部門）

8 スポーツ診療事業

スポーツ診療事業はスポーツ医学研究部門が担当し、スポーツクリニックによるメディカルチェック（MC）と外来診療及びコンディショニングチームによる分野連携でのコンディショニングサポートとコンディショニングスペースの運営、その他外部連携や研究活動を含む。

1. メディカルチェック

アスリートのコンディションを診察や検査・測定などによって評価し、抽出された課題に対し、適切なアドバイスを提供することを目的として、MC を実施している。国際総合競技大会に派遣されるアスリートは、大会参加前に MC を受診することが義務付けられており、特にオリンピック競技では原則として JISS スポーツクリニックで MC を実施することになっている。2022 年度以降、同一年度内に複数の国際総合競技大会へ出場することになった場合でも、当該競技大会最終日より遡って 1 年以内に実施された MC であれば、派遣前の MC として取り扱うこととするなど、NF もしくはアスリートの自主的、計画的な MC 受診の促進を図っている。

2024 年度は前述の MC 制度の変更に伴う重複実施がなくなったことに加え、パリ 2024 大会の開催もあったため、MC 全体の実施件数は 1,172 件と 2023 年度（1,759 件）よりも大幅に減少した。男女比では、オリンピック競技で 47.5%（2023 年度：48.3%）、パラリンピック競技で 45.5%（2023 年度：40.6%）が女子アスリートであった。オリ・パラ比ではパラアスリートは 0.9%（2023 年度：1.8%）と低値であった。これはオリンピック競技では、主要な国際総合競技大会の派遣前の MC 実施施設が JISS スポーツクリニックのみに指定されているのに対し、パラリンピック競技では MC 実施施設が限定されていないことによると思われる。

表 1　2024 年度メディカルチェック内訳

（単位：件）

区分	夏季競技		冬季競技		合　計	
	全体	女子	全体	女子	全体	女子
オリンピック競技	808	376	353	175	1,161	551
パラリンピック競技	3	2	8	3	11	5
合計	811	378	361	178	1,172	556

2. 外来診療

内科、整形外科、歯科（5 日 / 週）、皮膚科（2 日 / 週）、婦人科（3 日 / 週）、心療内科（3 日 / 月）、脳神経外科（2 日 / 月）、アスレティック・リハビリテーション（5 日 / 週）及び心理カウンセリング（3 日 / 週、うち 1 日は JOC エリートアカデミー枠）を開設し、栄養相談は医師から指示があった場合に随時行っている。原則として全予約制の自由診療であるが、料金は原則として保険診療点数に基づいて算出し、保険診療と同様に 3 割相当額を徴収している。2024 年度の延べ受診件数は 13,385 件（2023 年度：14,874 件）であった。

（1）月別受診件数（延べ件数）

（単位：件）

種別	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
オリ	1,173	1,172	1,199	1,017	562	888	1,004	1,019	984	888	832	931	11,669
パラ	150	161	150	166	161	66	132	103	113	106	136	137	1,581
その他※	3	9	62	8	5	2	7	23	10	4	1	1	135
合計	1,326	1,342	1,411	1,191	728	956	1,143	1,145	1,107	998	969	1,069	13,385

※その他：コーチ・スタッフ等JISSの認めた者。

（2）対象者別受診件数（延べ件数）

（単位：件）

区分	JOC強化指定選手	NF強化指定選手	JPC強化指定選手	その他※	合計
受診者数	7,622	4,047	1,581	135	13,385
割合（%）	56.94%	30.24%	11.81%	1.01%	100.00%

※その他：コーチ・スタッフ等JISSの認めた者。

（3）診療部門別受診件数（延べ件数）

（単位：件）

診療部門	受診件数	診療部門	受診件数
内科	1,552	脳神経外科	55
整形外科	2,954	栄養	57
歯科	878	心療内科	76
婦人科	715	心理	274
皮膚科	305	リハビリ	6,519
		合計	13,385

（4）検査部門の実績

①臨床検査部門月別件数（延べ件数）

（単位：件）

検査	診療	チェック・支援	研究・その他	合計
検体検査※1	961	2,334	183	3,478
生理検査※2	226	2,426	0	2,652

※1 検体検査：血液検査、尿検査等
※2 生理検査：心電図、運動負荷心電図、呼吸機能検査、超音波検査等

②画像検査部門モダリティ別件数（延べ件数）

（単位：件）

モダリティ	診療	チェック・支援	研究・その他	合計
MRI	1,423	455	334	2,212
一般撮影	714	1,458	1	2,173
CT/ 断層	82	0	0	82
骨塩定量	141	55	229	425

③ MRI の部位別件数（診療）

（単位：件）

頭頚部	肩甲帯	上腕・肘関節	前腕・手指	胸・背・腹部	腰仙部
86	128	54	67	39	165
骨盤・股関節	大腿	膝関節	下腿	足関節	足・趾
109	193	243	86	157	96

（5）薬剤部門月別処方件数（延べ件数）

（単位：件）

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
処方数	276	272	262	260	133	165	221	170	182	177	191	193	2,502

（6）アスリートリハビリテーション競技・種目別利用状況（延べ件数）

（単位：件）

競技・種目		種目別合計	競技別合計	競技・種目		種目別合計	競技別合計
スキー	アルペン	179	966	カバディ		71	71
	クロスカントリー	51		パラ-カヌー		56	56
	ノルディック複合	39		ダンススポーツ		55	55
	フリースタイル	555		バレーボール	バレーボール	25	52
	スノーボード	142			ビーチバレー	27	
フェンシング		668	668	近代五種		47	47
レスリング		554	554	セパタクロー		45	45
柔道		528	528	テニス		44	44
陸上競技		309	309	パラ-車いすテニス		38	38
サッカー		298	298	スケートボード		34	34
水泳	競泳	51	227	スケート	フィギュアスケート	4	33
	飛込	176			ショートトラック	29	
ウエイトリフティング		212	212	ボクシング		32	32
パラ-車いすバスケットボール		209	209	射撃		30	30
テコンドー		175	175	セーリング		22	22
ハンドボール		170	170	パラ-ゴールボール		20	20
パラ-バドミントン		149	149	カーリング		19	19
スポーツクライミング		144	144	パラ-クロスカントリースキー		19	19
ラグビーフットボール		137	137	自転車		16	16
体操	新体操	66	136	ローイング		14	14
	トランポリン	70		パラ-卓球		11	11
パラ-陸上競技		102	102	カヌー		9	9
パラ-車いすフェンシング		100	100	アーチェリー		8	8
バドミントン		96	96	トライアスロン		4	4
バスケットボール		91	91	ソフトボール		3	3
パラ-サッカー		90	90	パラ-パワーリフティング		3	3
パラ-トライアスロン		87	87	パラ-アルペンスキー		3	3
パラ-柔道_視覚		78	78	スカッシュ		2	2
ホッケー		77	77	ゴルフ		1	1
卓球		75	75	パラ-夏その他		1	1
太極拳		75	75	合計		6,519	6,519
アイスホッケー		74	74				

※パラアスリートのリハビリテーション：966 件

3. コンディショニンググループにおけるサポート

コンディショニングチームでは、以下の 2 つのサポートプログラムを実施している。

(1) TCSP（Total Conditioning Support Program/ 略称：トーコンサポート）

外傷や障害、あるいは何らかの疾病によってリハビリテーションが必要となったアスリートに対して、トレーニング環境や競技現場に復帰する過程で複数分野（リハビリテーション、栄養、心理、ハイパフォーマンス・ジム、トレーニング体育館）から総合的なスポーツ医・科学支援を実施することで、復帰までの期間短縮のみでなく、復帰後の競技力を受傷前のレベル以上に向上させることを目指す。

(2) CCSP（Combined Conditioning Support Program）

従来 JISS で行っていた各分野によるサポートにおいても、積極的に複合的な連携サポートとして実施していくことで一層のサポート効果を引き出すことを目的とする。

2024 年度は各コンディショニングサポートの具体的な課題抽出を目的として事業を展開した。

(1) TCSP の内訳は 19（男性 5、女性 14）名であり、対象者について毎週症例検討会を実施し、進捗と課題を共有して各分野でのサポートに活かした。

(2) CCSP の内訳は 240（男性 100、女性 140）名であった。

表 2　2024 年度コンディショニングサポート内訳　（単位：名）

サポート種類	男性	女性	合計
TCSP	5	14	19
CCSP	100	140	240

4. コンディションングスペースの運営

コンディショニングチームでは、アスリートやコーチなどの NF スタッフと HPSC におけるコンディショニングに関わる研究や支援を実践している HPSC スタッフとの情報交換や相談及びコンディショニングの実践の場を提供することを目的として、コンディショニングスペースの運営を行っており、2024 年度は 5,805 件（2023 年度：7,094 件）のコンディショニングスペースの利用があった。

また、コンディショニングの研究・支援に携わる専門家からの情報提供を目的として「コンディショニングミニセミナー」を開始し、2024 年度は計 4 回のセミナーを開催した。

また、コンディショニングスペースでは個別相談窓口を開設しており、2024 年度の個別対応件数は合計 11 件（いずれも睡眠に関する相談）であり、うち 5 件は時差調整に関する相談で、パリ 2024 大会出場に関係するアスリートやスタッフからの相談だった。

表 3　2024 年度コンディショニングスペース利用（延べ件数）

カテゴリー	件数
オリンピック競技	4,226
パラリンピック競技	551
その他 (JOC・JPC スタッフなど)	35
HPSC スタッフ	993
合計	5,805

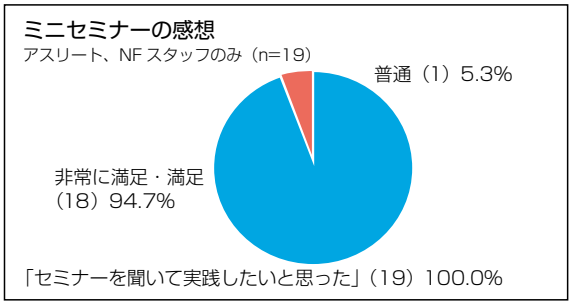


表 4　2024 年度コンディショニングミニセミナー一覧

開催月	テーマ	担当部署	講師
4 月	暑さ対策～パリ大会に向けた暑熱順化について～	コンディショニング研究グループ	岩田
5 月	時差調整	コンディショニング研究グループ	星川
2 月	免疫チェック	コンディショニング研究グループ	清水
3 月	メンタルトレーニング	心理グループ	富永

時間：15 分程度 / 回、人数：10 名程度 / 回

5. スポーツ医学研究部門会

2024 年度は 12 回開催し、スポーツクリニックの各診療部門、コンディショニングチームの各グループにおける情報共有及び共通課題の検討を行った。

スポーツクリニックにおいては、医療機関としてのコンプライアンス、ガバナンスの強化を目的として、クリニック運営会議（2 回 / 月）を実施し、その中の 6 つの委員会：①医療安全委員会、②院内感染防止対策委員会、③医療機器安全管理委員会、④診療委員会、⑤薬機管理委員会、⑥研修 / 外部連携委員会が定期的（1 回 / 月程度）に委員会を開催し、報告の共有や必須研修の実施及び管理を行った。

コンディショニングチームにおいては、毎週月曜日にミーティングを開催し、会議の前半にはトータルコンディショニングプログラムの適用となっている症例の進捗確認や課題共有、方針の検討を行い、後半は事務連絡や活動内容についての共有を行った。

6. 連携事業

連携事業は JOC や JPC などの統括団体及び NF の医事部門や競技現場と連携して、国内外での競技大会等へドクターやトレーナー等を派遣するなど、NF のメディカルスタッフとの連携を図るものである。

(1) 国際総合競技大会における医療業務受託

2023 年度より外部連携として取り組んでいる国際総合競技大会における医務帯同においては、医療関連法規を遵守した安全で適正な医療の提供を目的として、新たに医療業務委託制度を導入した。本制度のメリットとしては、JISS スポーツクリニックにおける医療情報管理が大会期間中においても継続的に実施できること、医薬品や医療機器の管理者や責任者を明確にし、管理を徹底することで、過不足を減らし、効率的な医療資源の活用が期待できる。パリ 2024 オリンピック、パリ 2024 パラリンピック、FISU 冬季ワールドユニバーシティゲームズ（2025/トリノ）、アジア冬季競技大会（2025/ハルビン）の 4 大会で本制度による業務を受託した。

表 5　国際総合競技大会における医療業務委託

大会名	パリ 2024 オリンピック	パリ 2024 パラリンピック	FISU 冬季大会 （2025/ トリノ）	アジア冬季競技大会 （2025/ ハルビン）
大会期間	2024/07/26 ～ 08/11	2024/08/29 ～ 09/08	2025/01/13 ～ 01/23	2025/02/07 ～ 02/14
選手団規模	759 名	330 名	169 名	228 名
メディカル体制	Dr.4、Tr.2 （JISS 常勤 Dr.2、Tr.1）	Dr.3、Nr.3、Tr.3 （JISS 常勤 Dr.1）	Dr.3 （JISS 常勤 Dr.2）	Dr.2 （JISS 常勤 Dr.1）

※メディカル体制のうち医療業務受託の範囲は医師のみ。Dr. 医師　Tr. トレーナー　Nr. 看護師

(2) 国際総合競技大会等の帯同・国際連盟業務

医療業務受託以外の国内外の連携業務として下記の大会に公務派遣を行った。

① 2024 Asian Paracanoe Championships：ICF パラカヌーレベル 5 国際クラス分け委員としての派遣
②パリ 2024 大会オリンピック U-23 男子サッカーチームトレーナー派遣
③パリ 2024 大会オリンピック日本オリンピック委員会 TEAM JAPAN トレーナー派遣
④パリ 2024 大会パラリンピック日本パラリンピック委員会トレーナー派遣
⑤ 2025 Oceania Wrestling Championships 国際レスリング連盟医師派遣

(3) 学会活動

・臨床スポーツ医学会（2024 年 11 月）…21 演題（シンポジウム：4、パネルディスカッション：2、口演：8、ポスター：6、教育研修講演：1）

（文責　中嶋　耕平）

9　女性アスリート研究・支援プロジェクト

1. 背景・目的

第3期スポーツ基本計画（2022年3月25日、スポーツ庁）を踏まえ、女性アスリートが健康にハイパフォーマンススポーツを継続するために必要な研究や支援、環境づくり、情報提供を推進した。HPSC/JISSでは、2023年度までスポーツ庁委託事業を受託、「女性アスリート育成・支援プロジェクト」を実施してきたが、2024年度よりJSC事業「女性アスリート研究・支援プロジェクト」として事業を推進することとなった（図1）。本プロジェクトを推進するチームを「Female Athletes Research & Support Team：FARST」とし、多職種が連携し活動した（図2）。

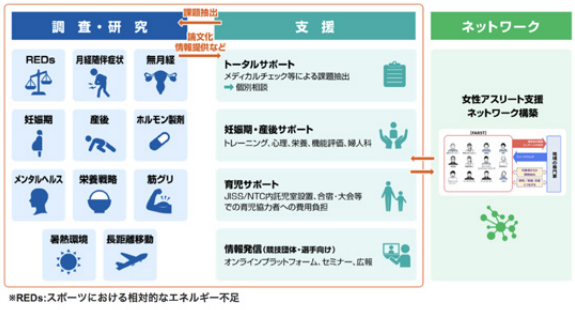


図1　プロジェクト概要

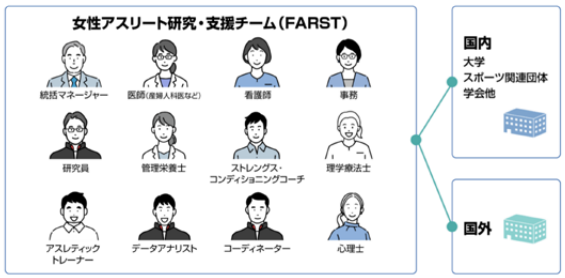


図2　運営体制

2. 活動実績と2025年度計画

2024年度より、下記8つのプログラムを掲げ、統括マネージャー1名の下、各プログラムにプログラムリーダーを配置した。有識者会議を開催し、外部の有識者よりプロジェクトの評価と助言を受け、2025年度の計画に反映した。

以下、各プログラムの概要と2024年度の実施内容、2025年度の計画を示す。

(1) 女性アスリート トータルサポート

メディカルチェック（MC）などでライフステージごとの相談や健康課題を抽出し、各分野の専門家につなぎ課題を解決するプログラムである。2024年度から専属の看護師を配置し、MCの婦人科問診票では抽出が難しい女性特有の課題について個別に問診、課題の抽出を行った。課題の解決につながる情報提供を行うとともに、診察が必要なアスリートにおいては、JISSスポーツクリニックの専門家の診療につなげる体制を整えた。

2024年度MCを実施した女性アスリート554件中361件（65.2%）が課題を抱えており、361件中、看護師による情報提供・指導281件（77.8%）、JISSスポーツクリニック受診80件（22.2%、うち婦人科79件）だった。また、パリ2024大会出場女子選手196名中、84名（42.8%）が課題を抱えており、最も多い相談内容は月経周期調節であり、続いて検診、月経不順、子宮頸がんワクチン、月経前症候群の順であった。 その他、電話98件、来院での相談46件、メール4件に対応した。

2025年度は、アスリートのヘルスリテラシーの変化や競技特性別の課題について検証・評価を行い、提供する情報の見直しを行う。

(2) 妊娠期・産後 トータルサポート

産後競技復帰を目指すアスリートに対し、非妊娠時の身体機能やパフォーマンスの早期回復を目指し、サポートを行うプログラムである。2024年度から、挙児希望のあるアスリートにおいて、非妊娠期からのデータの蓄積を開始した。

2024年度の支援対象選手は8名で、妊娠期からサポートを開始した選手4名、2023年度から継続でサポートを行った選手4名であり、サポート件数は228件だった。

2025年度は、研究プログラムで得られた成果を反映し、より高度なサポートを立案する。

(3) 育児サポート

育児中の女性アスリートや指導者、スタッフが競技に集中できる環境整備を行うことを目的とし、託児室や同伴宿泊についての環境整備や競技活動と育児の両立のための費用を補助するプログラムである。

支援対象者は10名（選手7名、スタッフ3名）で、育児サポート件数は54件だった。

2025年度は、男性アスリート、指導者も利用可能であることを広く周知し、利用対象者の拡大を目指す。

(4) 女性アスリートの健康課題に関する理解促進

ライフステージごとにみられる女性アスリートの医科学的な問題に対する知識やJISSの知見を提供するプログラムである。

2024年度は、アスリート向けセミナーとして3団体の男女選手、指導者等に講習会を実施した。ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンスで本プロジェクトを紹介するとともに、元選手で現在指導者として活躍される三宅宏美氏（ウエイトリフティング）を招き、「女性アスリートのトータルコンディショニング」について

ディスカッションを行った。

2025 年度はアスリート向けセミナーや競技団体向けの情報提供、ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンスを実施し、プロジェクトで得られた知見の還元を目指す。

(5) 女性アスリート支援ネットワーク

各地域の女性アスリート支援や連携体制の構築を図るプログラムである。

2023 年度選定したモデル地域 2 か所（北海道札幌市、新潟県）とのミーティングを実施しプログラムのトライアルに向けた準備を進めた。

2025 年度は、HPSC ネットワーク事業で実施予定であるパッケージ化と連携し、拠点トライアル先の拡大を検討する。

(6) 事業推進に係る調査・研究の推進

診療や支援で得られた課題に対しそれらの解決や提言につなげる研究を実施し、その成果の実装を通し、より高度な支援を目指すプログラムである。

2024 年度は、

①産後競技復帰を目指す女性アスリートのためのトレーニング・サポートプログラムの開発
②相対的エネルギー不足に伴う無月経の女性アスリートに対する糖付加がエネルギー代謝及びホルモン値に及ぼす影響
③内因性及び外因性の女性ホルモンがグリコーゲン代謝に及ぼす影響について
④パリ 2024 大会での本プロジェクト認知度調査

以上、4 つのテーマを設定し研究を開始した。研究①では、2013 年度から 2023 年度に妊娠期・産後のサポートを実施した約 20 名の医科学データを分野ごとに整理し、解析と検証を行った。②、③については、倫理審査委員会の承認手続きを経て、予備実験を実施した。④では、HPSC 託児室利用に関する調査を実施し、アスリートの 79%、スタッフの 60% が HPSC 託児室は女性だけでなく、男性アスリートやスタッフも利用できることを知らないと回答しており、今後の周知が課題である結果となった。

2025 年度は、各研究を推進していくとともに、ミラノ・コルティナ 2026 大会で女性アスリート支援に関連する調査を実施予定である。

(7) オンラインプラットフォームの整備

女性アスリートの支援に関する情報の一元化や、女性アスリートやアスリートを取り巻くコーチやスタッフ、保護者への情報提供による知識獲得、課題解決を図るプログラムである。

2024 年 7 月 1 日「Female Sport ナビ」をリリースし、公式 Instagram を開設した。これらのサイトを通してスポーツ医学・栄養学・心理学等に関する 64 記事を配信した。

2025 年度は、過去に HPSC/JISS で発行した女性アスリート支援に関連する刊行物の見直し、電子ブック化を行う。Female Sport ナビでは特集記事の企画、外部サイト等と連携を進める。

(8) 広報・情報発信

女性アスリート研究・支援プロジェクトの活動内容、成果について情報発信し、本プロジェクトを広く周知するプログラムである。

2024 年度は、日本語及び英語での本プロジェクトの紹介チラシを作成し、パリ 2024 大会 TEAM JAPAN HOUSE 内で紹介した。また、HPSC News Letter、HPSC Female Sport の発行などを通し事業の周知を図った。その他、2024 年 11 月 19 日 ～ 21 日 に INSEP（フランス）において開催された National Seminar and International Conference “Women and Performance” で本プロジェクトの紹介を行った。

2025 年度は、本プロジェクト全体の効率的な周知拡大を目指す。

3. 総括

本事業は 2024 年度より運営費交付金化され JSC 事業となった。スポーツ庁委託事業時代の成果を踏襲しつつ、女性アスリートトータルサポートでは MC 時のスクリーニングをきめ細やかに実施、事業推進に係る調査・研究の推進では 4 つの研究課題を設定した。研究については、2024 年度内に顕著な成果を上げることはできなかったが、MC におけるスクリーニングでは約 6 割以上の女性アスリートが何らかの課題を抱えていることを明らかにするなど、現状の把握と課題抽出といった観点で大きな成果を上げた。2025 年度以降、課題の解決を進めながら事業の更なる高度化を目指す。

（文責　白井　克佳、能瀬　さやか）

10　外部評価

（1）ハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザー

HPSC におけるスポーツ医・科学、情報に関する研究、研究の成果を活用した競技水準の向上のための支援等について、専門的見地からの意見又は助言等を得るため、外部専門家又は外部有識者に対して「ハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザー」を委嘱している。

2024 年度のハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザーは、次のとおりである。

ハイパフォーマンススポーツセンターアドバイザー一覧（敬称略）

氏　　名	所属等（2024 年度現在）
相澤　勝治	専修大学経営学部　教授
赤間　高雄	早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ科学部　教授
秋本　崇之	早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ科学部　教授
有賀　誠司	東海大学健康学部　教授
枝川　　宏	医療法人社団慈眼白山会　えだがわ眼科クリニック　理事長
大田　　健	複十字病院　病院長
笠原　政志	国際武道大学体育学科　教授
片寄　正樹	札幌医科大学　理事・保健医療学部長
河合　純一	公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会　委員長
川原　　貴	一般社団法人大学スポーツ協会　副会長
久保 潤二郎	平成国際大学スポーツ健康学部　教授
河野　一郎	一般社団法人日本スポーツフェアネス推進機構　代表理事
近藤　尚知	愛知学院大学歯学部　教授
杉田　正明	日本体育大学体育学部　教授
杉山　ちなみ	株式会社リボンプロジェクト　代表取締役社長
鈴木　　岳	株式会社 R-body　代表取締役
谷川　　聡	筑波大学体育系　准教授
友添　秀則	環太平洋大学体育学部　教授
中込　四郎	筑波大学　名誉教授
平松　竜司	東京大学大学院農学生命科学研究科　准教授
広瀬　統一	早稲田大学スポーツ科学学術院スポーツ科学部　教授
福井　　烈	公益財団法人日本テニス協会　専務理事
増田　雄一	株式会社リニアート　代表取締役
宮本　直和	順天堂大学スポーツ健康科学部　先任准教授
山下　泰裕	公益財団法人日本オリンピック委員会　会長

（文責　HPSC 運営部運営調整課）

（2）ハイパフォーマンススポーツセンター業績評価委員会

HPSC は、国際競技力向上のための取組に関する評価について審議するため、外部有識者による「ハイパフォーマンススポーツセンター業績評価委員会」を設置している。

2024 年度事業の業績評価委員は次のとおりである。

ハイパフォーマンススポーツセンター業績評価委員一覧（敬称略）

氏　　名	所属等（2024 年度現在）
上村　春樹	公益財団法人講道館　館長
◎尾縣　　貢	日本陸上競技連盟　会長、筑波大学人間総合科学学術院　教授
佐野　慎輔	尚美学園大学スポーツマネジメント学部　教授
柳下　和慶	東京科学大学院　スポーツサイエンス部門長
山本　正嘉	鹿屋体育大学　名誉教授
雪下　岳彦	順天堂大学医学部　病院管理学　医師・医学博士

◎委員長

（文責　HPSC 運営部運営調整課）

（3）国立スポーツ科学センター倫理審査委員会

JISS は、人を対象とするスポーツ医・科学研究が、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」(令和 3 年文部科学省・厚生労働省・経済産業省告示第 1 号。) に則しているかを科学的立場及び倫理的立場から審査するため、外部有識者と JISS 研究員で構成する「国立スポーツ科学センター倫理審査委員会」を設置している。

2024 年度の倫理審査委員は、次のとおりである。

国立スポーツ科学センター倫理審査委員一覧（敬称略）

氏　　名	所属等（2024 年度現在）
飯田　研吾	兼子・岩松法律事務所　弁護士
春日　芳美	大東文化大学　スポーツ・健康科学部　准教授
田邉　陽子	日本大学　法学部　教授
松田　丈志	株式会社 VITA　代表取締役
石毛　勇介	JISS 副所長、スポーツ科学研究部門　主任研究員
◎蒲原　一之	JISS スポーツ医学研究部門副部門長　主任研究員
半谷　美夏	JISS スポーツ医学研究部門主幹　主任研究員
星川　雅子	JISS 副所長、スポーツ科学研究部門長　主任研究員
横澤　俊治	JISS スポーツ科学研究部門副部門長　副主任研究員

◎委員長

（文責　事務部事業推進課）

11 ハイパフォーマンススポーツセンター利用状況

1. 専用練習場

区分				月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
陸上競技		オリ		利用日数(日)	30	31	30	31	31	30	31	30	31	31	27	31	364
				利用人数(人)	463	424	557	618	463	422	344	660	870	1,235	706	544	7,306
		パラ	身体	利用日数(日)	17	17	7	31	26	9	3	14	11	7	8	17	167
				利用人数(人)	64	42	19	131	83	67	3	47	52	29	47	49	633
			知的	利用日数(日)	1	0	3	17	8	1	1	2	8	8	10	6	65
				利用人数(人)	1	0	9	29	27	1	3	2	53	8	18	10	161
			ブラインド	利用日数(日)	3	4	1	1	1	1	3	2	2	3	2	1	24
				利用人数(人)	8	10	2	2	2	4	12	6	4	8	4	2	64
テニス		オリ		利用日数(日)	29	31	30	30	29	30	31	27	31	30	25	27	350
				利用人数(人)	304	299	222	279	235	312	246	183	416	364	383	280	3,523
		パラ		利用日数(日)	15	28	14	3	22	7	16	5	18	8	13	0	149
				利用人数(人)	34	100	32	6	82	14	46	11	51	38	60	0	474
JISS	競泳 / 水球	オリ		利用日数(日)	15	18	30	21	5	2	2	0	24	25	19	12	173
				利用人数(人)	203	188	598	214	77	60	60	0	48	384	676	68	2,576
		パラ	身体	利用日数(日)	0	3	0	0	0	0	0	0	0	11	0	1	15
				利用人数(人)	0	10	0	0	0	0	0	0	0	31	0	2	43
			知的	利用日数(日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
				利用人数(人)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	5
	アーティスティックスイミング			利用日数(日)	20	23	30	29	19	8	4	0	2	23	18	24	200
				利用人数(人)	307	359	541	561	232	362	22	0	65	370	461	350	3,630
	新体操			利用日数(日)	17	20	14	28	25	28	26	28	25	24	21	29	285
				利用人数(人)	253	207	195	409	255	401	520	361	515	399	451	580	4,546
	トランポリン			利用日数(日)	25	25	26	23	19	21	27	29	26	27	21	23	292
				利用人数(人)	107	153	272	130	55	93	170	306	208	192	232	196	2,114
味の素NTC・ウエスト	ボクシング			利用日数(日)	7	5	7	13	7	5	10	7	8	0	0	0	69
				利用人数(人)	12	5	16	156	7	5	57	8	318	0	0	0	584
	バレーボール			利用日数(日)	26	31	23	22	21	19	18	23	21	22	22	23	271
				利用人数(人)	772	630	447	347	29	19	18	533	166	410	1,013	487	4,871
	体操競技			利用日数(日)	18	23	29	26	16	23	27	21	27	23	27	21	281
				利用人数(人)	51	150	501	218	26	450	855	242	1,195	584	831	482	5,585
	バスケットボール			利用日数(日)	25	29	30	29	30	23	27	29	30	24	27	29	332
				利用人数(人)	555	1,220	1,166	754	332	486	777	733	682	348	712	1,059	8,824
	レスリング	オリ		利用日数(日)	29	29	30	31	23	30	30	27	0	0	0	30	259
				利用人数(人)	459	153	411	1,052	488	466	302	283	0	0	0	454	4,068
		デフ		利用日数(日)	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
				利用人数(人)	0	0	0	0	0	0	0	39	0	0	0	0	39
	ウエイトリフティング			利用日数(日)	27	27	25	27	26	28	28	27	24	20	19	25	303
				利用人数(人)	196	246	242	326	197	491	359	320	106	46	43	198	2,770
	ハンドボール	オリ		利用日数(日)	22	27	28	26	29	19	29	27	29	27	22	22	307
				利用人数(人)	279	700	898	554	1,129	71	729	897	465	706	556	346	7,330
		デフ		利用日数(日)	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	4
				利用人数(人)	0	0	0	0	0	0	0	71	102	0	0	0	173
	柔道			利用日数(日)	18	20	22	11	13	17	23	19	21	18	13	22	217
				利用人数(人)	76	1,188	316	49	14	298	209	386	393	31	28	313	3,301
	バドミントン			利用日数(日)	21	21	23	19	21	19	21	15	23	22	21	20	246
				利用人数(人)	489	412	554	511	410	550	573	395	990	475	910	446	6,715
味の素NTC・イースト	競泳	オリ		利用日数(日)	30	31	29	27	27	24	23	10	0	13	27	28	269
				利用人数(人)	221	404	221	126	190	280	64	327	0	60	280	541	2,714
		パラ	身体	利用日数(日)	27	16	27	27	8	0	25	10	0	15	25	27	207
				利用人数(人)	252	124	217	220	106	0	83	41	0	57	187	170	1,457
			知的	利用日数(日)	9	2	6	6	9	0	0	0	0	0	0	12	44
				利用人数(人)	77	28	13	36	33	0	0	0	0	0	0	46	233
	卓球	オリ		利用日数(日)	30	31	30	31	31	29	29	14	0	16	27	30	298
				利用人数(人)	1,072	433	771	1,002	740	847	699	177	0	279	858	647	7,525
		パラ	身体	利用日数(日)	14	11	7	13	18	6	5	2	0	5	17	7	105
				利用人数(人)	70	36	22	47	240	10	18	5	0	36	51	17	552
			知的	利用日数(日)	0	0	3	0	4	3	3	0	0	0	3	0	16
				利用人数(人)	0	0	52	0	45	54	29	0	0	0	15	0	195
	フェンシング	オリ		利用日数(日)	27	26	23	27	21	26	28	11	0	12	22	24	247
				利用人数(人)	1,432	732	873	949	308	1,274	1,616	401	0	355	959	514	9,413
		パラ		利用日数(日)	23	24	26	23	29	20	25	9	0	9	20	20	228
				利用人数(人)	132	116	132	109	150	81	151	27	0	52	109	70	1,129
	射撃	オリ		利用日数(日)	29	28	28	25	25	27	30	12	0	15	22	29	270
				利用人数(人)	281	260	662	243	527	417	194	235	0	104	154	705	3,782
		パラ		利用日数(日)	0	0	9	18	9	1	4	1	0	0	6	1	49
				利用人数(人)	0	0	25	41	23	1	4	1	0	0	48	1	144
	アーチェリー	オリ		利用日数(日)	30	31	30	26	30	30	29	14	0	16	27	31	294
				利用人数(人)	479	403	411	377	259	259	285	113	0	235	348	452	3,621
		パラ		利用日数(日)	0	6	0	13	12	8	8	8	0	7	7	0	69
				利用人数(人)	0	49	0	69	39	18	16	16	0	14	14	0	235

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数総計（日）	475	507	520	502	456	438	475	370	322	390	407	480	5,342
利用人数合計（人）	8,649	9,081	10,397	9,565	6,803	7,813	8,464	6,826	6,699	6,850	10,154	9,034	100,335
内）オリ利用人数（人）	8,011	8,566	9,874	8,875	5,973	7,563	8,099	6,560	6,437	6,577	9,601	8,662	94,798
内）パラ利用人数（人）	638	515	523	690	830	250	365	156	160	273	553	372	5,325
内）デフ利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	110	102	0	0	0	212

※陸上競技：陸上トレーニング場　テニス：屋内テニスコート（ハード及びレッドクレイコート）
※オリ・パラ・デフ各 NF から報告のあった日数のうち、多い方を集計。（ex.10 月にオリ利用 28 日、パラ利用 5 日の場合、その月の利用数は 28 日）
※ 2024 年度は以下の専用練習場は工事等のため利用中止となった。（利用中止期間 JISS：競泳プール 2024.9.16 ～ 12.27、アーティスティックスイミングプール：2024.10.7 ～ 12.27、味の素 NTC・ウエスト：ボクシング 2024.12.16 ～ 2025.3.21、ウエイトリフティング 2024.12.10 ～ 2025.3.10、レスリング 2024.12.1 ～ 2025.2.28、柔道 2025.3.10 ～ 3.21、味の素 NTC・イースト：ライフル射撃、水泳、フェンシング、卓球、アーチェリー 2024.11.14 ～ 2025.1.16）
※専用練習場の利用実績にはテクニカルルームの利用を含む。
※ 2024.11.1 ～デフ競技団体の専用練習場利用開始。

2. 共用コート

(a) 競技別

区分	＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
味の素NTC・ウエスト	バレーボール	利用日数（日）	11	15	11	7	3	0	0	4	0	0	8	0	59
		利用人数（人）	310	150	305	210	360	0	0	160	0	0	360	0	1,855
	新体操	利用日数（日）	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	2	2	8
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	50	0	240	260	0	100	100	750
	バスケットボール	利用日数（日）	9	7	8	3	3	0	0	3	0	0	2	2	37
		利用人数（人）	240	210	210	130	80	0	0	180	0	0	100	60	1,210
	レスリング	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	8	18	13	6	45
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	46	847	866	480	2,239
	卓球	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	2	14	11	2	0	29
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	10	140	110	200	0	460
	フェンシング	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	7	13	3	0	0	23
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	210	390	75	0	0	675
	バドミントン	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	100	0	0	0	100
	ラグビーフットボール	利用日数（日）	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	25	0	0	0	0	0	0	25
	テコンドー	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	3	0	4	0	3	10
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	90	0	120	0	140	350
	アメリカンフットボール	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	80	0	0	0	0	80
	ハンドボール	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	80	0	0	0	80
	パラバドミントン	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	0	0	18
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	260	0	0	260
	パラテコンドー	利用日数（日）	2	4	4	8	8	4	0	4	0	0	0	0	34
		利用人数（人）	28	47	49	98	85	43	0	52	0	0	0	0	402
	パラバレーボール	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	50	0	0	0	50
	デフレスリング	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	45	0	0	45
	デフバレーボール	利用日数（日）	0	0	0	2	0	2	0	2	0	0	0	0	6
		利用人数（人）	0	0	0	46	0	44	0	40	0	0	0	0	130
味の素NTC・イースト	バスケットボール	利用日数（日）	0	4	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	10
		利用人数（人）	0	200	0	120	0	0	0	0	0	0	0	0	320
	卓球	利用日数（日）	0	0	3	2	0	0	0	0	0	2	0	0	7
		利用人数（人）	0	0	60	115	0	0	0	0	0	30	0	0	205
	フェンシング	利用日数（日）	1	1	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	7
		利用人数（人）	20	30	0	0	0	0	100	0	0	0	0	0	150
	テコンドー	利用日数（日）	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	5
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	375	0	0	0	0	0	0	375
	バレーボール	利用日数（日）	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	4
		利用人数（人）	0	30	0	90	0	0	0	0	0	0	0	0	120
	ダンス	利用日数（日）	6	4	14	7	0	5	0	0	0	3	0	0	39
		利用人数（人）	120	80	280	140	0	100	0	0	0	150	0	0	870
	アメリカンフットボール	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	4
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	120	120	240
	ボクシング	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	180	0	180
	パラバドミントン	利用日数（日）	10	15	10	21	7	0	5	10	0	0	20	0	98
		利用人数（人）	105	173	131	218	97	0	162	387	0	0	284	0	1,557
	ボッチャ	利用日数（日）	3	0	7	0	0	0	3	3	0	0	0	0	16
		利用人数（人）	116	0	89	0	0	0	113	88	0	0	0	0	406
	ゴールボール男子	利用日数（日）	18	19	18	12	11	2	4	0	0	0	10	9	103
		利用人数（人）	24	32	25	16	15	13	52	0	0	0	90	94	361
	ゴールボール女子	利用日数（日）	18	13	18	12	11	2	4	0	0	0	10	0	88
		利用人数（人）	23	25	33	27	22	8	57	0	0	0	128	118	441
	パラ・パワーリフティング	利用日数（日）	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4
		利用人数（人）	0	0	0	23	0	0	0	0	0	0	0	0	23
	パラテコンドー	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	3	7
		利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	52	29	81
	パラバレーボール	利用日数（日）	0	4	2	4	2	3	5	5	0	0	0	2	27
		利用人数（人）	0	76	47	86	42	60	99	104	0	0	0	44	558
	車いすバスケットボール男子	利用日数（日）	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	10	15
		利用人数（人）	0	0	125	0	0	0	0	0	0	0	0	271	396
	車いすバスケットボール女子	利用日数（日）	7	13	3	7	7	0	0	0	0	0	0	9	46
		利用人数（人）	174	323	65	230	143	0	0	0	0	0	0	167	1,102

区分		月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
味の素NTC・イースト	車いすラグビー	利用日数(日)	0	7	0	7	5	0	6	0	0	0	0	6	31
		利用人数(人)	0	238	0	215	157	0	185	0	0	0	0	222	1,017
	ろう空手道	利用日数(日)	0	2	2	3	3	5	2	2	0	0	0	0	19
		利用人数(人)	0	60	36	54	75	115	40	50	0	0	0	0	430
	デフバレーボール	利用日数(日)	0	2	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	6
		利用人数(人)	0	40	46	0	40	0	0	0	0	0	0	0	126
	デフバスケットボール	利用日数(日)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
		利用人数(人)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	68	0	68
利用日数総計(日)			85	111	107	108	62	30	34	47	47	62	77	54	824
利用人数総合計(人)			1,160	1,714	1,501	1,818	1,116	833	808	1,691	1,066	1,637	2,548	1,845	17,737
内)オリ利用人数(人)			690	700	855	805	440	550	100	970	1,016	1,332	1,926	900	10,284
内)パラ利用人数(人)			470	914	564	913	561	124	668	631	50	260	554	945	6,654
内)デフ利用人数(人)			0	100	82	100	115	159	40	90	0	45	68	0	799

(b) コート別

区分			月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
味の素NTC・ウエスト	1A	利用日数(日)		2	4	4	9	8	10	0	0	8	18	13	0	76
	1B	利用日数(日)		0	0	0	0	0	3	0	0	0	20	19	6	48
	2大	利用日数(日)		20	19	19	12	6	4	0	17	27	25	15	5	169
	2小	利用日数(日)		10	19	11	7	3	0	0	16	25	15	13	4	123
味の素NTC・イースト	A	利用日数(日)		18	20	20	25	13	7	14	5	0	2	12	11	147
	B	利用日数(日)		9	11	25	12	8	3	3	3	0	3	3	5	85
	C	利用日数(日)		11	19	13	24	10	0	2	12	0	0	23	1	115
	D	利用日数(日)		11	24	12	26	5	5	11	10	0	0	6	21	131
小計	ウエスト利用日数(日)			32	42	34	28	17	17	0	33	60	78	60	15	416
	イースト利用日数(日)			49	74	70	87	36	15	30	30	0	5	44	38	478
利用日数総計(日)				81	116	104	115	53	32	30	63	60	83	104	53	894

※ 2024 年度は工事等のため利用中止となった。(利用中止期間　味の素 NTC・ウエスト：共用コート 1A 2024.10.1 ～ 2025.3.31（一部利用あり）、共用コート 1B 2024.4.1 ～ 2025.3.31（一部利用あり）、味の素 NTC・イースト：共用コート A ～ D 2024.11.14 ～ 2025.1.16)
※共用コートは申請数。(一部報告あり)

3. ハイパフォーマンス・ジム、低酸素トレーニング室、トレーニングジム CORE・WEST・EAST

区分			月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
ハイパフォーマンス・ジム		利用日数(日)		30	31	30	31	31	29	31	30	27	28	27	31	356
		利用人数(人)		819	930	983	818	505	523	730	621	722	703	837	695	8,886
		内)オリ利用人数		758	871	914	744	387	509	659	541	637	583	734	626	7,963
		内)パラ利用人数		59	57	67	72	116	12	70	80	85	119	102	69	908
		内)その他利用人数		2	2	2	2	2	2	1	0	0	1	1	0	15
	うち、低酸素ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ室	利用日数(日)		26	28	23	27	29	17	25	8	20	26	22	26	277
	うち、低酸素ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ室	利用人数(人)		78	118	116	134	138	33	87	18	90	48	57	52	969
トレーニングジム	CORE	利用日数(日)		30	31	30	31	31	30	31	30	30	29	27	31	361
	CORE	利用人数(人)		1,112	1,152	1,367	1,113	570	713	852	1,188	1,653	1,651	1,498	1,339	14,208
	CORE	内)オリ利用人数		957	997	1,206	938	395	688	718	1,006	1,392	1,305	1,329	1,203	12,134
	CORE	内)パラ利用人数		155	155	161	175	175	23	133	182	261	345	168	136	2,069
	CORE	内)その他利用人数		0	0	0	0	0	2	1	0	0	1	1	0	5
	WEST	利用日数(日)		30	31	30	31	31	30	31	30	9	0	0	0	253
	WEST	利用人数(人)		912	1,066	1,023	929	737	543	694	974	257	0	0	0	7,135
	WEST	内)オリ利用人数		887	1,040	997	899	705	535	679	881	50	0	0	0	6,673
	WEST	内)パラ利用人数		25	26	26	30	32	8	15	93	307	0	0	0	562
	WEST	内)その他利用人数		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	EAST	利用日数(日)		30	31	30	31	31	30	31	14	0	16	27	31	302
	EAST	利用人数(人)		939	711	720	870	584	548	680	343	0	206	702	716	7,019
	EAST	内)オリ利用人数		522	267	280	389	281	381	368	167	0	136	312	360	3,463
	EAST	内)パラ利用人数		417	444	440	481	303	164	312	176	0	70	390	356	3,553
	EAST	内)その他利用人数		0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
		利用人数小計(人)		2,963	2,929	3,110	2,912	1,891	1,804	2,226	2,505	1,910	1,857	2,200	2,055	28,362
利用人数総合計(人)				3,782	3,859	4,093	3,730	2,396	2,327	2,956	3,126	2,632	2,560	3,037	2,750	37,248

※ 2024 年度は工事等のため利用中止があった。(利用中止期間：トレーニングジム WEST 2024.12.10 ～ 2025.3.31、トレーニングジム EAST 2024.11.14 ～ 2025.1.16)
※研究利用は除く。

4. JISS 競泳プール（一般利用：水泳教室）

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		10	9	13	9	13	7	0	0	0	7	7	12	87
一般利用人数（人）		485	545	735	435	705	410	0	0	0	330	350	575	4,570

※ 2024 年度は工事等のため利用中止があった。(利用中止期間：2024.9.16 ～ 12.27)

5. その他屋外施設

(1) 味の素フィールド西が丘

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
専用利用（1日）	利用日数（日）	8	5	7	6	4	5	4	9	5	4	3	5	65
	試合数（試合）	10	6	12	9	5	5	5	12	9	7	5	8	93
	総入場者数（人）	8,970	5,237	7,643	6,275	2,167	8,363	5,305	21,887	12,832	4,983	3,700	3,270	90,632
	有料入場者数（人）	7,854	4,510	6,649	2,826	1,796	7,714	3,770	20,523	5,332	0	0	2,192	63,166
専用利用（時間）	利用日数（日）	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	利用時間（時間）	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	利用人数（人）	0	0	80	0	0	0	0	0	0	0	0	0	80
団体利用（時間）	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	利用時間（時間）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利用人数合計（人）		8,970	5,237	7,723	6,275	2,167	8,363	5,305	21,887	12,832	4,983	3,700	3,270	90,712

(2) フットサルコート

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		22	26	24	24	25	23	26	20	20	23	23	16	272
利用時間（時間）		182	235	245	221	194	230	264	182	189	264	233	145	2,584
利用人数（人）	NF	6	9	10	73	13	2	15	24	87	45	62	12	358
	一般	2,005	2,729	2,607	2,353	2,049	2,543	3,051	2,228	2,268	2,423	2,650	1,673	28,579
利用人数合計（人）		2,011	2,738	2,617	2,426	2,062	2,545	3,066	2,252	2,355	2,468	2,712	1,685	28,937

(3) 屋外テニスコート

①年間利用

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		28	29	26	29	28	28	29	28	25	25	26	29	330
利用人数（人）		3,372	3,365	3,319	3,139	3,216	3,305	3,297	3,328	3,236	2,197	2,159	2,051	35,984

②ビジター利用

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		10	11	8	9	11	7	7	6	12	12	13	9	115
利用人数（人）		19	17	8	13	13	9	10	9	16	14	15	17	160

※ 2024 年度は工事等のため利用中止があった。（利用中止期間 7・8 番コート：2024.6.19 ～ 2025.1.19）

6. 戸田艇庫

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	月平均（艇）/合計（人）
艇庫（艇）	エイト	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8.0
	フォア	44	44	44	44	44	44	44	45	45	45	45	45	44.4
	スカル	86	86	86	86	86	86	86	91	91	91	91	91	88.1
	その他	6	6	6	6	6	6	6	2	2	2	2	2	4.3
	合計（艇）	144	144	144	144	144	144	144	146	146	146	146	146	144.8
合宿室（人）	一般	63	30	8	27	4	5	9	15	62	11	21	54	309
	大学生	43	66	48	329	537	1,175	477	46	109	71	297	860	4,058
	高校生	6	18	23	100	112	3	39	56	75	58	75	211	776
	合宿利用人数合計（人）	112	114	79	456	653	1,183	525	117	246	140	393	1,125	5,143

7. 研修室・特別会議室等

(1) JISS

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
研修室A	利用日数（日）	7	4	3	1	2	9	6	5	3	1	2	3	46
	利用人数（人）	160	103	60	20	30	30	127	140	50	25	60	90	895
研修室B	利用日数（日）	4	1	3	1	2	9	2	4	4	0	0	2	32
	利用人数（人）	110	30	60	20	46	46	60	100	35	0	0	60	567
特別会議室	利用日数（日）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	利用人数（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
利用人数合計（人）		270	133	120	40	76	76	187	240	85	25	60	150	1,462

※研修室 A B結合しての利用人数は、研修室 A にカウント。
※本表の数字（データ）は、部外者による有料利用カウントであり、JSC の業務での利用は含まれていない。

(2) 味の素 NTC・イースト

区分	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
会議室A	利用日数（日）	9	7	9	4	9	7	7	2	0	1	12	5	72
	利用人数（人）	298	218	164	95	171	145	136	40	0	5	307	116	1,695
会議室B	利用日数（日）	10	6	5	1	0	2	7	1	0	0	7	2	41
	利用人数（人）	307	197	112	15	0	90	153	30	0	0	186	46	1,136
会議室C	利用日数（日）	11	7	9	8	2	7	6	7	0	2	9	4	72
	利用人数（人）	334	199	175	150	35	96	170	170	0	40	144	36	1,549
ミーティングルーム1	利用日数（日）	4	14	6	9	5	4	8	4	0	2	7	4	67
	利用人数（人）	20	87	38	63	18	41	43	36	0	10	50	30	436
ミーティングルーム2	利用日数（日）	1	1	5	2	3	4	2	5	0	2	3	0	28
	利用人数（人）	10	16	82	10	60	56	10	44	0	10	27	0	325
ミーティングルーム3	利用日数（日）	3	7	9	2	4	5	4	6	0	3	7	2	52
	利用人数（人）	8	58	118	7	63	31	41	61	0	23	75	30	515

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
ミーティングルーム４	利用日数（日）	4	5	2	0	0	0	1	4	0	2	1	1	20
	利用人数（人）	18	67	7	0	0	0	5	39	0	10	30	9	185
ミーティングルーム５	利用日数（日）	6	2	3	2	1	7	2	3	0	4	4	0	34
	利用人数（人）	28	80	12	9	4	26	8	13	0	19	30	0	229
利用人数合計（人）		1,023	922	708	349	351	485	566	433	0	117	849	267	6,070

※本表の数字（データ）は、NF による有料利用カウントであり、JSC の業務での利用は含まれていない。

(3) 味の素 NTC・ウエスト

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
研修室１	利用日数（日）	5	12	16	18	10	8	9	15	12	13	21	13	152
	利用人数（人）	120	250	470	440	505	290	306	397	405	305	650	390	4,528
研修室２	利用日数（日）	5	10	17	14	8	7	10	15	14	15	16	12	143
	利用人数（人）	130	296	330	471	470	124	296	420	494	338	465	360	4,194
研修室３	利用日数（日）	8	12	13	9	4	9	8	13	19	16	20	11	142
	利用人数（人）	196	240	349	180	390	197	206	521	709	450	616	390	4,444
研修室４	利用日数（日）	12	20	16	17	7	17	10	23	20	17	15	14	188
	利用人数（人）	364	344	435	480	532	557	249	832	585	260	487	491	5,616
研修室６	利用日数（日）	0	0	7	6	5	7	4	17	19	7	7	3	82
	利用人数（人）	0	0	144	104	377	146	47	185	190	64	245	80	1,582
利用人数合計（人）		810	1,130	1,728	1,675	2,274	1,314	1,104	2,355	2,383	1,417	2,463	1,711	20,364

※本表の数字（データ）は、NF による有料利用カウントであり、JSC の業務での利用は含まれていない。

8. 託児室

(1) アスリートヴィレッジ

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		2	4	3	2	3	4	3	6	2	5	7	5	46
利用人数（人）	保護者数	2	4	3	2	3	4	3	7	3	6	7	5	49
	託児数	2	4	3	2	3	4	3	7	3	6	7	5	49

(2) 味の素 NTC・イースト

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用日数（日）		4	6	0	4	2	5	2	3	0	0	4	2	32
利用人数（人）	保護者数	4	6	0	4	2	5	2	3	0	0	4	2	32
	託児数	4	6	0	4	2	5	2	3	0	0	4	2	32

9. 宿泊室

(1) JISS

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用可能日数（日）	30	31	30	31	31	30	31	30	31	31	27	31	364
利用日数（日）	30	31	30	31	31	30	31	30	31	31	27	31	364
客室利用数（室）	760	674	1,077	863	383	351	387	468	561	758	854	517	7,653
客室利用人数（人）	760	674	1,077	863	383	353	387	468	561	758	854	517	7,655
内）オリ利用人数（人）	514	517	882	662	102	226	248	305	327	499	711	317	5,310
内）パラ利用人数（人）	120	51	28	39	167	33	37	4	75	169	39	16	778
内）デフ利用人数（人）	0	0	0	24	0	4	0	0	0	0	0	0	28
内）その他研究等（人）	126	106	167	138	114	90	102	159	159	90	104	184	1,539
客室稼働率（%）	35.2%	30.2%	49.9%	38.7%	17.2%	16.3%	17.3%	21.7%	25.1%	34.0%	43.9%	23.2%	29.2%
宿泊人数稼働率（%）	33.8%	29.0%	47.9%	37.1%	16.5%	15.7%	16.6%	20.8%	24.1%	32.6%	42.2%	22.2%	28.0%

※宿泊人数稼働率は、和室に最大３名宿泊できるものとして計算した。

(2) アスリートヴィレッジ

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用可能日数（日）	30	31	30	31	31	30	31	30	31	31	28	31	365
利用日数（日）	30	31	30	31	31	30	31	30	31	31	28	31	365
客室利用数（室）	2,619	3,270	3,145	3,064	1,387	1,846	2,004	3,216	3,586	2,792	3,035	2,756	32,720
客室利用人数（人）	3,655	4,596	4,212	4,296	2,065	3,065	3,489	4,962	5,519	4,550	4,979	4,162	49,550
内）オリ利用人数（人）	3,504	4,403	4,051	3,935	1,704	2,959	3,414	4,784	5,313	4,092	4,832	4,037	47,028
内）パラ利用人数（人）	151	193	161	329	361	78	75	151	206	420	147	125	2,397
内）デフ利用人数（人）	0	0	0	32	0	28	0	27	0	38	0	0	125
内）その他研究等（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
客室稼働率（%）	39.3%	47.5%	47.2%	44.5%	20.2%	27.7%	29.1%	48.3%	52.1%	40.6%	48.8%	40.0%	40.4%
宿泊人数稼働率（%）	27.2%	33.1%	31.3%	30.9%	14.9%	22.8%	25.1%	36.9%	39.7%	32.8%	39.7%	30.0%	30.3%

(3) 味の素 NTC・イースト

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用可能日数（日）	30	31	30	31	31	30	31	13	0	8	27	31	293
利用日数（日）	30	31	30	31	31	30	31	13	0	8	27	31	293
客室利用数（室）	1,032	900	719	1,160	684	368	671	455	0	23	810	835	7,657
客室利用人数（人）	1,315	1,133	850	1,328	844	389	850	594	0	23	958	1,067	9,351
内）オリ利用人数（人）	441	197	175	326	51	209	326	117	0	23	236	297	2,398
内）パラ利用人数（人）	874	894	634	1,002	761	128	514	453	0	0	696	737	6,693
内）デフ利用人数（人）	0	42	41	0	32	52	10	24	0	0	26	33	260
内）その他研究等（人）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
客室稼働率（%）	42.0%	35.4%	29.2%	45.6%	26.9%	15.0%	26.4%	42.7%	0.0%	3.5%	36.6%	32.8%	31.9%
宿泊人数稼働率（%）	30.7%	25.6%	19.8%	30.0%	19.0%	9.1%	19.2%	32.0%	0.0%	2.0%	24.8%	24.1%	22.3%

※ 2024 年度は工事等のため利用中止があった。（利用中止期間　味の素 NTC・イースト：2024.11.14 ～ 2025.1.23）

10. 栄養指導食堂、レストラン　等

(1) JISS（栄養指導食堂レストラン「R³」）

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
朝食（食）	667	611	985	754	338	307	327	356	542	670	838	438	6,833
昼食（食）	1,493	1,523	1,787	1,765	949	1,212	1,346	1,464	1,563	1,824	1,958	1,686	18,570
内）アスリート食（食）	912	936	1,253	1,213	497	726	743	891	1,030	1,176	1,417	1,103	11,897
内）セットメニュー（食）	581	587	534	552	452	486	603	573	533	648	541	583	6,673
夕食（食）	701	689	1,006	808	317	377	305	377	504	645	900	572	7,201
内）アスリート食（食）	644	622	947	755	280	333	260	318	455	589	847	508	6,558
内）セットメニュー（食）	57	67	59	53	37	44	45	59	49	56	53	64	643
合計（食）	2,861	2,823	3,778	3,327	1,604	1,896	1,978	2,197	2,609	3,139	3,696	2,696	32,604

※セットメニューには職員の利用も含む。

(2) JISS（喫茶室「New Spirit」）

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
利用人数（人）	1,747	1,715	1,851	1,878	1,650	1,402	1,748	1,513	1,569	1,503	1,396	1,251	19,223

(3) アスリートヴィレッジ（SAKURA Dining）

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
朝食（食）	3,319	4,293	3,823	3,928	1,857	2,933	3,342	4,659	5,437	4,243	4,769	4,002	46,605
昼食（食）	3,026	3,958	3,803	3,506	1,740	2,224	2,635	3,971	4,700	4,013	4,467	3,420	41,463
夕食（食）	3,313	4,204	3,904	3,723	1,912	2,847	3,279	4,642	4,860	4,637	4,895	3,853	46,069
合計（食）	9,658	12,455	11,530	11,157	5,509	8,004	9,256	13,272	14,997	12,893	14,131	11,275	134,137

(4) 味の素 NTC・イースト

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
朝食（食）	1,190	1,082	807	1,224	761	337	734	583	0	12	911	962	8,603
昼食（食）	1,934	1,723	1,612	1,856	1,050	580	1,027	691	0	78	1,249	1,312	13,112
夕食（食）	1,640	1,271	1,058	1,572	874	375	816	605	0	20	1,042	1,046	10,319
合計（食）	4,764	4,076	3,477	4,652	2,685	1,292	2,577	1,879	0	110	3,202	3,320	32,034

※ 2024 年度は工事等のため利用中止があった。（利用中止期間　味の素 NTC・イースト：2024.11.14 ～ 2025.1.23）

11. イースト見学

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開催回数（回）	40	48	35	52	59	38	35	25	0	7	26	37	402
参加者数（人）	187	405	279	341	573	267	470	328	0	17	165	232	3,264

※ 2024 年度は工事等のため利用中止があった。（利用中止期間：2024.11.14 ～ 2025.1.18）

12. スポーツクリニック

(1) メディカルチェック

区分＼月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
オリンピック競技	実施日数（日）	15	16	14	7	4	6	7	10	9	8	8	8	112
	実施件数（件）	203	229	177	23	21	40	67	127	63	85	87	39	1,161
パラリンピック競技	実施日数（日）	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	0	4
	実施件数（件）	0	0	0	0	0	0	8	1	0	2	0	0	11
内）夏季競技種目実施件数（件）		187	229	155	14	0	0	0	21	9	86	87	23	811
内）冬季競技種目実施件数（件）		16	0	22	9	21	40	75	107	54	1	0	16	361
実施件数合計（件）		203	229	177	23	21	40	75	128	63	87	87	39	1,172

(2) 診療・リハビリテーション

区分＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
診療日数（日）	22	25	25	27	27	19	22	20	20	19	18	20	264
内科（件）	128	168	221	114	61	82	150	195	123	96	112	102	1,552
心療内科（件）	6	8	5	10	4	8	7	5	8	3	6	6	76
整形外科（件）	296	308	301	293	172	218	251	218	207	202	219	269	2,954
歯科（件）	101	95	101	96	51	60	67	52	81	58	63	53	878
婦人科（件）	83	76	75	72	41	58	61	42	55	53	46	53	715
皮膚科（件）	38	32	32	29	13	18	30	21	25	30	21	16	305
脳神経外科（件）	0	4	4	1	1	6	8	7	5	6	6	7	55
小計（件）	652	691	739	615	343	450	574	540	504	448	473	506	6,535
内）オリ利用件数	599	634	633	542	276	421	504	483	445	406	420	449	5,812
内）パラ利用件数	50	48	44	65	62	27	63	34	49	38	52	56	588
内）その他利用件数	3	9	62	8	5	2	7	23	10	4	1	1	135
栄養（件）	7	3	4	4	3	5	2	4	8	3	4	10	57
内）オリ利用件数	7	3	4	3	3	5	2	4	7	2	3	10	53
内）パラ利用件数	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	1	0	4
心理カウンセリング（件）	25	25	24	25	22	24	27	25	18	18	20	21	274
内）オリ利用件数	22	23	22	22	21	23	24	22	16	17	20	19	251
内）パラ利用件数	3	2	2	3	1	1	3	3	2	1	0	2	23
内）その他利用件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
リハビリ（件）	642	623	644	547	360	477	540	576	577	529	472	532	6,519
内）オリ利用件数	545	512	540	450	262	439	474	510	516	463	389	453	5,553
内）パラ利用件数	97	111	104	97	98	38	66	66	61	66	83	79	966
クライオセラピー（件）	5	2	1	3	0	0	4	0	0	0	1	2	18
内）オリ利用件数	5	2	1	3	0	0	4	0	0	0	1	2	18
内）パラ利用件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計（件）	1,331	1,344	1,412	1,194	728	956	1,147	1,145	1,107	998	970	1,071	13,403

※クリニックで 1 人が 1 日 2 科受診した場合は 2 件でカウントしている。

表中は全て、小数点以下第二位を四捨五入

12　その他事業

（1）普及啓発活動等

1. 背景・目的

HPSC はスポーツ医・科学研究事業及びスポーツ医・科学支援事業をはじめとする各事業の成果を広く国民に還元することによって、スポーツの振興に寄与することを目的に、様々な機会において HPSC が取り組むスポーツ医・科学、情報による研究・支援の成果を発信している。

また、HPSC/JISS スタッフがスポーツ庁の設置する委員会委員に就任するなどして、スポーツ庁の施策や事業に関し、HPSC の取組や成果に関する情報提供、助言等を行うことにより、HPSC の知見の還元を図った。

2. 実施概要

(1) 展示会での広報活動

HPSC が推進するハイパフォーマンススポーツ研究と親和性の高い展示会である「Japan Sports Week」にて、JSC/HPSC が発行した書籍やガイドライン、パンフレットを展示するブースを出展した。



写真　Japan Sports Week 出展ブース

(2) SNS を活用した情報発信

ウェブサイト更新情報をはじめ、イベント開催告知や HPSC 刊行物の発行情報等の発信を HPSC の X アカウントにて 112 回行った。

(3) JISS における遺伝子ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関するポジションステートメントの策定

JISS は、ハイパフォーマンススポーツ分野におけるスポーツ医・科学の効果的・効率的な支援とその基盤となる研究を担う中核機関として、スポーツ医・科学分野におけるヒトゲノム・遺伝子解析研究の現状認識をとりまとめるとともに、JISS が実施又は関与するヒトゲノム・遺伝子解析研究において、あるべき研究の目的、活用方法及び実施手続に関する提言、並びにヒトゲノム・遺伝子解析研究に従事する研究者その他の関係者が特に留意すべき事項を明確にするために、立場表明を行う必要があると考え、2022 年度から策定に向けた検討を開始した。そして、海外機関が策定している声明等の調査や、外部有識者を交えた検討会等を行い、2024 年 5 月 31 日に、「JISS におけるヒトゲノム・遺伝子解析研究に関するポジションステートメント（ポジションステートメント）」を策定、公表した。(https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/business/ourwork/tabid/1888/Default.aspx)

その後、ポジションステートメントに定める研究目的に沿って、文献調査や外部有識者との意見交換を行うなど、JISS におけるヒトゲノム・遺伝子解析研究の内容について検討した。また、ヒトゲノム・遺伝子リテラシー向上に努めるため、ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関連する適切かつ合理的な情報を、分かりやすく発信していくこととしている。

(4) JISS プラン 2034 の策定

HPSC では、HPSC/JISS スタッフ全員でディスカッションを重ね、JISS でしかできない支援と研究を持続的に推進する「JISS プラン 2034」を策定、公表した。(https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/about/tabid/1896/Default.aspx)

JISS がスポーツ医・科学、情報による支援と研究を一体的に捉えてアスリートの国際競技力向上に努めると同時に、ハイパフォーマンス領域で得た知見を社会へ還元していくことは使命であり、存在意義、いわゆるパーパスでもある。そのパーパスを常に意識し、HPSC が掲げる「ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ」を具現化し広く社会への還元に取り組むこととしている。

3. スポーツ庁の事業への協力

「持続可能な国際競技力向上のための施策に関する評価検討会」、「スポーツ審議会スポーツ基本計画部会」をはじめ、スポーツ庁が設置する委員会等に HPSC/JISS スタッフが委員として参画又は調査研究へ協力すること等により、スポーツ庁が推進する施策や事業に対し、情報提供、助言等を行い、ハイパフォーマンス領域のみならずライフパフォーマンス領域においても HPSC の知見の還元を図った。

委員会等	被委嘱者・協力部署
持続可能な国際競技力向上のための施策に関する評価検討会	久木留 毅（HPSC センター長、JISS 所長）
スポーツ審議会スポーツ基本計画部会（第３期）	久木留 毅（HPSC センター長、JISS 所長）、能瀬 さやか（JISS スポーツ医学研究部門）
2024 年度 Sport in Life 推進プロジェクト：ライフパフォーマンス向上に向けた目的を持った運動･スポーツの推進に係る調査研究検討委員会	久木留 毅（HPSC センター長、JISS 所長）、山下 大地（JISS スポーツ科学研究部門）
2024 年度 Sport in Life 推進プロジェクト：ライフパフォーマンス向上に向けた目的を持った運動･スポーツの推進に係る調査研究研究実行委員会実務担当者	高橋 佐江子（JISS スポーツ医学研究部門）
2024 年度 Sport in Life 推進プロジェクト：ライフパフォーマンス向上に向けた目的を持った運動･スポーツの推進に係る調査研究への協力（スポーツ庁から受託を受けた公益財団法人日本理学療法士協会からの依頼）	スポーツ医学研究部門、スポーツ科学研究部門、JSC デジタル推進室
第２期スポーツ未来開拓会議「する」スポーツ分科会	久木留 毅（HPSC センター長、JISS 所長）
バーチャルスポーツとまちづくり研究会	久木留 毅（HPSC センター長、JISS 所長）
「スポーツ庁地域スポーツ課技術審査委員会」技術審査専門員	中村 宏美（連携・協働推進部）
2024 年度スポーツ庁委託事業「幼児期からの運動習慣形成プロジェクト」事業推進委員	中村 宏美（連携・協働推進部）

（文責　連携・協働推進部）

（2）パラリンピック競技関連の活動

1. JISS におけるパラリンピック支援の動向

2014 年度にパラスポーツが厚生労働省から文部科学省の所管となり、パラリンピックに対する支援や研究も JISS の役割となってから 10 年が経過した。この間、JISS で実施されたパラアスリート等を対象とした研究とそれに基づく成果発表の動向、そして味の素 NTC・イーストに設置された JPC クラス分けセンタースタッフとの連携について以下に報告する。

2. JISS で実施されたパラリンピック研究の動向

JISS では様々な研究が行われているが、これらは運営費交付金が原資となっている研究事業予算で行われた研究（特別プロジェクト研究、競技研究など）と外部資金（科学研究費、民間研究助成金等）に大別される。

これまでの推移は図 1 に示したとおり、2019 年度から科学研究費により行われる研究の件数が増加した。東京 2020 大会が開催された 2021 年度と 2022 年度まで研究数は多かったが、2023 年は減少した。

具体的な研究テーマでは、心理、栄養、バイオメカニクス、コンディショニング等多岐に渡って行われている。

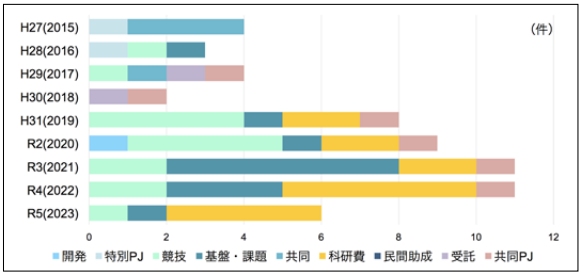


図 1　JISS で実施された研究テーマ件数（年報より）

3. パラリンピック関連の成果発表

原著論文や書籍、学会発表や講習会等の成果発表について図 2 に示した。

JISS のジャーナルである JHPS では、2020 年に「国立スポーツ科学センターにおけるパラリンピックアスリートへの医・科学支援および研究の取り組み」と題した特集が組まれた。さらに 2022 年にも「東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会サポート特集」が組まれ、多くの支援の実践活動が報告された。

COVID-19 により支援活動が減少した影響もあり 2020 年度は成果数が減少したが、2022 年度には、2021 年に開催された東京 2020 大会での支援をまとめた報告や支援につなげるために実施されてきた研究の成果が数多く発表されたものと考えられる。

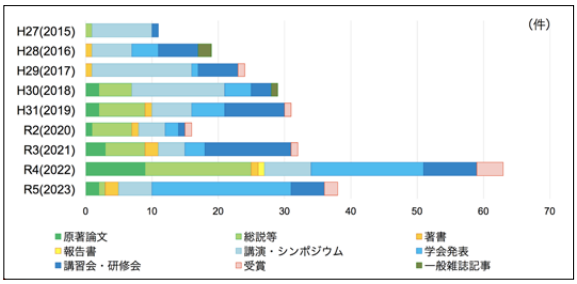


図 2　パラリンピック関連の成果発表（年報より）

なお 2019 年度以降、何らかの成果発表により毎年受賞者がいる状況である。

4. JPC クラス分け情報・研究拠点（クラス分けハブ）スタッフとの連携

2024 年 4 月に、味の素 NTC・イースト内に JPC クラス分け情報・研究拠点が開設された。ここでクラス分けに関する教育・研修、国際情報の収集・共有などが行われ、味の素 NTC・イーストでトレーニングや合宿を行うパラリンピック競技団体のアクセスも容易となっている。

この拠点に配置されたクラス分けマネージャーや JPC スタッフと 2024 年度下半期に月 1 回の勉強会を開催した。そこではクラス分けマネージャーから現在のクラス分けの動向や今後の見通しについて説明してもらったり、JISS でこれまで実施されてきた研究や支援の情報について紹介したりする機会を設定した。この取組は 2025 年度も継続する予定である。



写真　JPC との勉強会の様子

5. まとめ

10 年間で JISS 研究員や職員が行ってきた研究や支援の成果をまとめることが、次の 10 年の支援や研究の発展につながると考えられる。今後も引き続き、パラアスリートの競技力向上に寄与できるよう努めていく。

（文責　袴田　智子、元永　恵子）

(3)「スポーツの日」中央記念行事 / スポーツ祭り 2024

1. 概要

1964 年に開催された東京オリンピックの輝かしい成果と感動を記念し、国民がスポーツに親しみ健康な心身を培う日として制定された「スポーツの日」に、日常生活の中で主体的に運動・スポーツに親しむことの重要性を広く啓発することを目的として、中央記念行事を毎年開催している。

2024 年度の行事では、自分に合ったスポーツとの出会い、初めて触れ合うトップアスリート、普段入ることのできない特別な場所などの意味を込めて「meet your “new”」をテーマに開催した。

2. 実施内容

開催日：2024 年 10 月 14 日（月）

主　催：スポーツ庁、JSC、JSPO、JOC、公益財団法人日本レクリエーション協会、JPSA

プログラムは、開会行事と併せて行われた室伏スポーツ庁長官考案の「セルフチェックと改善エクササイズ」のほか、オリ・パラ連携を含む 10 競技（柔道、ハンドボール、レスリング、陸上、ウエイトリフティング、ボクシング、バレーボール、バドミントン、フェンシング、テニス）のスポーツ教室、子どもが発達段階に応じた動きを習得する「アクティブ・チャイルド・プログラム」、様々なレクリエーション競技が体験できる「レッツ・チャレンジ！おもしろスポーツ」、安全な登山のための知識を得る「安全登山体験」、「J-STAR プロジェクト」の展示等を実施した。

また、新たな試みとなる JSC と Sport Singapore との MOU を活用した「スクエアステッピングエクササイズ」では、オンラインを通じて、HPSC 会場、国内 3 会場（茨城県つくば市、鹿児島県鹿屋市、石川県七尾市）及び中央記念行事では初の海外となるシンガポール会場と連携し、スポーツ栄養を学ぶ「勝ち飯教室」では、JSN のネットワークを通じて国内 2 会場（福岡県、三重県志摩市）と連携し実施した。

さらに、新たな試みとなる JSC とワールドローイングとの MOU を活用した「バーチャルスポーツプログラム」では、ローイングの動作体験や仮想空間による競争を実施した。

参加対象者となる親子への訴求のため、スペシャルゲストとして参加いただいた「第 12 代体操のお兄さん福尾誠さん」には、広報や多くのプログラムの体験を通して、スポーツの楽しさを会場の内外で伝えていただいた。

合計 18 プログラムを実施し、HPSC 会場では小・中学生の親子延べ 700 組 1,400 名、国内 5 会場では合計 118 名、シンガポール会場では 1,050 名が参加した。



写真　バーチャルスポーツプログラム

3. 効果検証

本行事では、参加者のアウトカム（行事参加によるスポーツに関する意識・行動の変容）を重視している。そのため、行事参加者のスポーツに関する行動変容に着目して調査を実施した。調査はスポーツの行動変容ステージ（無関心期、関心期、準備期、実行期・維持期）についてのアンケート調査を、行事前・行事直後・行事 3 か月後の合計 3 回実施した。なお、行事直後は行事の満足度も調査した。その結果、参加者 387 名中 371 名（95.7 %）が行事に満足していることがわかった。一方で、行事参加前の行動変容ステージ（無関心期、関心期、準備期、実行期・維持期）は行事後、行事 3 か月後に変化はみられなかった。そのため、行動変容ステージと参加プログラムの組合せによるクラスター分析を行い、7 つのグループに分類し、それらの組合せと行動変容ステージの変化を分析した。その結果、無関心期・関心期・準備期で特定のプログラムに参加した場合に行動変容ステージが行事前と比べて行事 3 か月後に高まることが示された。以上のことから、本行事は参加者にとって満足度の高いイベントではあるが、スポーツによる行動変容がみられた参加者は限られていた。そのため、申込時の行動変容ステージと参加プログラムの組合せによっては、スポーツの行動変容ステージが向上した組合せがみられたことから、本行事は参加者の行動変容ステージを考慮したイベントを提供することにより、参加者のスポーツに関する行動変容ステージがさらに高まる可能性が示唆された。

これらの検証結果を、2025 年度以降の本行事の実施内容や運営の改善に活かすとともに、本行事の趣旨の実現に努めていきたい。

（文責　総合企画部）

Ⅵ 論文掲載・学会発表

1. 論文（査読有り）

1) Aihara Shimpei, Chen Guanyu, Hara Riku, Nakagawa Minori, Ogasawara Ayumi, Yanagi Hitoshi, Takegawa Yoshinari, Ito Takeshi, Masui Fumito. Development of a simple tracking system to monitor curling stone dynamics. Proceedings of the 12th International Conference on Sport Sciences Research and Technology Support, 22-33, 2024.
2) Ando Ryosuke. Association of the rate of torque development and joint angle with passive muscle stiffness. European Journal of Applied Physiology, 124(9): 2665-2673, 2024.
3) Ando Ryosuke, Hoshikawa Yoshihiro, Iizuka Taro, Suita Masashi, Kameda Mai, Nakashima Hirotaka, Ozaki Hiroki. Difference in badminton-specific endurance evaluated by a newly developed on-court test between competitive levels: A pilot study of female players. Physiological Reports, 12(10): e16058, 2024.
4) Ando Ryosuke, Kojima Chihiro, Okamoto Saya, Kasai Nobukazu, Sumi Daichi, Takao Kenji, Goto Kazushige, Suzuki Yasuhiro. Effect of 6-week sprint training on long-distance running performance in highly trained runners. International Journal of Sports Physiology and Performance, 19(7): 645-650, 2024.
5) Ashikaga Kohei, Manabe Tomohiro, Tomori Anna, Endo Naoya, Kamahara Kazuyuki. Differences in athlete's left ventricular morphology by sex and sports discipline categories in elite Japanese athletes. The Physician and Sportsmedicine, Online Published, 2025.
6) Ashikaga Kohei, Yoneyama Kihei, Hirayama Kuniaki, Monobe Yoshiro, Nose-Ogura Sayaka, Nakase Junsuke, Kobatake Naoyuki, Takemata Toshiro, Nakajima Kohei. Effects of the COVID-19 pandemic on Japanese young elite weightlifting competitive athletes. The Journal of Sports Medicine and Physical Fitness, 65(1): 160-162, 2025.
7) Chiba Yoshihiro, Sato Kentaro, Yoshimoto Takaya, Ohnuma Hayato, Yamanaka Ryo, Takahashi Kyohei, Kobayashi Kai, Matsubayashi Takeo, Takai Yohei. Revamping pace distribution: A case study on elevating the men's 400 m track and field Japanese national record after 32 years. Journal of Strength and Conditioning Research, 39(4): e610-e615, 2024.
8) Frederick J Henderson, Shimokochi Yohei. Inertial one-leg squat training and drop jump biomechanics in athletes with anterior cruciate ligament reconstruction after return to sport. Journal of Strength and Conditioning Research, 39(2): 156-164, 2024.
9) Fujiyama Kotaro, Yamashita Daichi, Yumoto Kenichi, Matsumoto Shingo, Ito Masamitsu. Bridging the gap: Awareness, needs, and impact of technical reports in Japanese women's wrestling – Insights from olympic gold medalists and national coaches. Ido Movement for Culture Journal of Martial Arts Anthropology, 25(1): 47-58, 2025.
10) Fukuda Naoko, Hangai Mika, Hashimoto Ritsuko, Nishida Yusuke, Mizutani Yuri, Okuwaki Toru, Nakajima Kohei. Injury characteristics among Japanese international athletes: Report on the pre-competition medical check-up data of the Japanese Olympic Committee. Cureus, 16(11): e72869, 2024.
11) Goto Haruhiko, Kamikubo Toshinao, Yamamoto Ryota, Tsutsui Toshiharu, Torii Suguru. Agreement between 2D visual- and 3D motion capture-based assessment of foot strike pattern. International Journal of Sports Physical Therapy, 19(11): 1386-1396, 2024.
12) Goto Haruhiko, Torii Suguru. Epidemiology of adolescent runners: non-rearfoot strike is associated with the Achilles tendon and lower leg injury. BMC Sports Science, Medicine and Rehabilitation, 17(27): 1-9, 2025.
13) Guanyu Chen, Mori Haruna, Takegawa Yoshinari, Aihara Shimpei, Masui Fumito. Design and implementation of a stone rotation measurement system with IMU sensor and stone behavior presentation system. Proceedings of the 12th International Conference on Sport Sciences Research and Technology Support, 140-147, 2024.
14) Hayashida Takumi, Kawamura Akihiro, Kurazume Ryo, Aihara Shimpei. Bolt type force sensor with improved wiring for force measurement in sport climbing. 2024 IEEE SENSORS 2024, 1-4, 2024.
15) Hoshikawa Atsuto, Nakajima Kohei, Okuwaki Toru, Hangai Mika, Aono Hiroshi, Ishizuka Soya, Morioka Yasunori, Itou Shizuo, Kawahara Takashi. Former Olympians had remained on high bone mineral density for a long period: Consecutive checkup of the 1964 Tokyo Olympic Japanese contestants for over 50 years. Bone, 187: 117203, 2024.
16) Ichinose Hoshizora, Tanaka Fumiko, Yamagishi Takaki, Sado Natsuki, Shiotani Hiroto, Evangelidis E. Pavlos,

Naito Munekazu, Shibata Shigenobu, Kawakami Yasuo. Age- and sex-dependence of muscle quality : Influence of intramuscular non-contractile tissues. Experimental Gerontology, 196 : 112574, 2024.

17) Isoyama Yosuke, Nose-Ogura Sayaka, Ijitsu J Mariko, João Gabriel Segato Kruse, Nagai Narumi, Kayaba Momoko, Ogata Hitomi, Mangalam Madhur, Kiyono Ken. Age- and height-dependent bias of underweight and overweight assessment standards for children and adolescents. Frontiers in Public Health, 12 : 1379897, 2024.

18) Ito Reita, Uchino Takamasa, Uchida Masataka, Fujie Shumpei, Iemitsu Keiko, Kojima Chihiro, Nakamura Mariko, Shimizu Kazuhiro, Tanimura Yuko, Shinohara Yasushi, Hashimoto Takeshi, Isaka Tadao, Iemitsu Motoyuki. Acute salivary antimicrobial peptide secretion response to different exercise intensities and durations. American Journal of Physiology. Regulatory, Integrative and Comparative Physiology, 327(6) : R616-R626, 2024.

19) Iwasaki Tomoya, Noguchi Wataru, Tamura Yasumasa, Aihara Shimpei, Yamamoto Masahito. Creation of training data and training for prediction model of curling scores using real game data. Proceedings of the 12th International Conference on Sport Sciences Research and Technology Support, 168-179, 2024.

20) Kanai Mina, Shinagawa Akiho, Ota Masako, Virgona Nantiga, Yano Tomohiro. Resveratrol can differentiate human melanoma stem-like cells from spheroids treated sith all-trans retinoic acid. Anticancer Research 44(12) : 5283-5292, 2024.

21) Kasahara Jun, Ozaki Hiroki, Matsubayashi Takeo, Takahashi Hideyuki, Nakayama Ryohei. Semantic segmentation for individual thigh skeletal muscles of athletes on magnetic resonance images. Radiological Physics and Technology, Online Published, 2025.

22) Kayaba Momoko, Yajima Katsuhiko, Nogami Mao, Nose-Ogura Sayaka, Ogata Hitomi. Sleep characteristics in underweight young females across their menstrual cycles: A sleep-monitoring survey study with preliminary results. Journal of Sleep Research, 34(1) : e14254, 2024.

23) Khatun Suraiya, Ogawa Miori, Uchizawa Akiko, Hoshi Daisuke, Tamai Shinsuke, Momma Reiko, Kondo Emi, Watanabe Koichi, Sagayama Hiroyuki. Glycated hemoglobin (HbA1c) is independently associated with the bioelectrical impedance phase angle in junior sumo wrestlers: A pilot study. Physiological Reports, 12(9) : e16045, 2024.

24) Kimachi Kaoru, Koido Masaaki, Hong Sungchan, Shimonagata Shuji, Nakayama Masao, Asai Takeshi. Features of ball impact in straight, curve and knuckle kicks in soccer. Proceedings of the Institution of Mechanical Engineers, Part P: Journal of Sports Engineering and Technology , 2024.

25) Kimura Yuya, Yokozawa Toshiharu. Skating techniques of ladies' world-class long-distance speed skaters to shorten curved-section time during the official 3,000 m race. Frontiers in Sports and Active Living, 6 : 1396219, 2024.

26) Kitahara Akari, Tamai Shinsuke, Sagayama Hiroyuki, Nomura Shoko, Kagawa Rina, Suzuki Hideo, Tsurushima Hideo, Watanabe Koichi. Exercise intensity at RPE13 in female Kendo practitioners. Sports Psychiatry, 3(2) : 57-61, 2024.

27) Kodesho Taiki, Yamagata Kazuma, Nakao Gakuto, Katayose Masaki, Taniguchi Keigo. Effect of tasks onintramuscular regional differences in rectus femoris elasticity during isometric contraction: An ultrasound shear wave elastography study. Journal of Electromyography and Kinesiology, 80 : 102967, 2025.

28) Komine Shoichi, Miura Ikuru, Hu Teng, Ogata Akihiro, Tamai Shinsuke, Tokinoya Katsuyuki, Oh Sechang Wada Shota, Takekoshi Kazuhiro, Ito Go, Isobe Tomonori, Matsui Takashi, Ohmori Hajime. Effect of electroacupuncture on delayed-onset muscle soreness induced by eccentric exercise in young untrained men: Randomized controlled trial. American Journal of Physical Medicine & Rehabilitation, Online Published, 2025.

29) Makino Mizuki, Nakahara Takanori, Nagakubo Kentaro, Ando Yuka, Tauchi Kenji. Relationship between volleyball spike jump height and lower limb kinetics is stronger for orientation leg than rear leg. Sports Biomechanics, Online Published, 2025.

30) Makino Mizuki, Nakayama Koichi, Ando Yuka, Tauchi Kenji. Characteristics of throwing arm movement for an elongated implement: A comparison of the javelin and baseball throwing. The Journal of Sports Medicine and Physical Fitness, 64(6) : 532-538, 2024.

31) Makino Mizuki, Nakayama Koichi, Ando Yuka, Tauchi Kenji. Differences in throwing kinematics due to changes in run-up speed in javelin throwing. The Journal of Sports Medicine and Physical Fitness, Online Published, 2024.

32) Mangalam Madhur, Isoyama Yosuke, Ogata Hitomi, Nose-Ogura Sayaka, Kayaba Momoko, Nagai Narumi, Kiyono Ken. Multi-scaling allometry in human development, mammalian morphology, and tree growth. Scientific Reports, 14(1) : 19957-19957, 2024.

33) Miyamoto Naokazu, Yamazaki Kazuhiko, Iwasaki Takafumi, Mujika Iñigo, Yamashita Daichi, Hirata Kosuke. Biceps femoris long head stiffens after 2 weeks of training cessation in highly trained sprinters. European

Journal of Applied Physiology, 124 (11) : 3317-3323, 2024.
34) Nakamura Hayato, Yamashita Daichi, Nishiumi Daichi, Nakaichi Naoto, Hirose Norikazu. Acute effect of technique modification training on 180° change of direction performance and kinematics in adolescent male soccer players. Frontiers in Sports and Active living, 7: 1453859, 2025.
35) Nakao Gakuto, Kodesho Taiki, Yamagata Kazuma, Watanabe Kota, Ohsaki Yuki, Katayose Masaki, Taniguchi Keigo. Stress–strain relationship of individual hamstring muscles: A human cadaver study. Journal of the Mechanical Behavior of Biomedical Materials, 153: 106473, 2024.
36) Nakao Gakuto, Kodesho Taiki, Yamagata Kazuma, Watanabe Kota, Ohsaki Yuki, Katayose Masaki, Taniguchi Keigo. Validity of elastic imaging evaluation of hamstring muscles with knee contracture using ultrasound shear wave elastography. Cureus, 16 (8) : e68343, 2024.
37) Nakashima Hirotaka, Horiuchi Gen, Kimura Arata, Sakurai Shinji. Acceptable range of timing error at bat-ball impact in baseball depends on the bat swing path. Frontiers in Sports and Active Living, 7, 2025.
38) Nakazato Kosuke, Takahashi Saeko, Sasadai Jumpei, Ishige Yusuke. Effect of alpine ski boots on lower limb movement during jumping. International Society of Biomechanics in Sports, 42 (1) : 680-683, 2024.
39) Nose-Ogura Sayaka, Yoshino Osamu, Nakamura-Kamoto Hiroe, Kanatani Mayuko, Harada Miyuki, Hiraike Osamu, Saito Shigeru, ffFujii Tomoyuki, Osuga Yutaka. Medical issues for female athletes returning to competition after childbirth. The Physician and sportsmedicine, 52 (2) : 147-153, 2024.
40) Numazu Naoki, Hirashima Yusuke, Matsukura Keita. Analysis of soccer goalkeeper performance and shot scenarios in the 2022 World Cup. Journal of Physical Education and Sport, 24 (12) : 2115-2125, 2024.
41) Ogata Hitomi, Isoyama Yosuke, Nose-Ogura Sayaka, Nagai Narumi, Kayaba Momoko, Gabriel João, Kruse Segato, Seleznov Ivan, Kaneko Miki, Shigematsu Taiki, Kiyono Ken. Allometric multi-scaling of weight-for-height relation in children and adolescents: Revisiting the theoretical basis of body mass index of thinness and obesity assessment. PloS one, 19 (7) : e0307238, 2024.
42) Ogawa Mariko, Komura Hiroko, Ono Yoko, Nose-Ogura Sayaka, Kawai Keisuke, Terauchi Masakazu. Attitude and experience of obstetricians and gynecologists toward eating disorders assessment and management in Japan: A nationwide survey. The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research, 50 (9) : 1470-1478, 2024.
43) Ogawa Miori, Uchizawa Akiko, Tamai Shinsuke, Momma Reiko, Hoshi Daisuke, Kondo Emi, Sagayama Hiroyuki, Watanabe Koichi. Evaluation of energy balance estimated from total energy expenditure and body composition changes in junior sumo wrestlers: An observational study over six months. Cureus, 16 (5) : e61158, 2024.
44) Okamoto Shogo, Shimada Yui, Inoue Natsuka, Frederick J Henderson, Yamashita Daichi. Asymmetry of the trunk and lower extremity joint frontal plane kinematics during single-leg standing and squat in paralympic athletes with upper limb deficiency compared with intact athletes. JOSPT Open, Online Published, 2025.
45) Ota Kazuki, Yoshida Takuya, Furuhashi Yuki, Muratomi Kotaro, Maemura Hirohiko, Tanigawa Satoru. A longitudinal study of three-dimensional pelvic behavior in maximal sprint running. Scientific Journal of Sport and Performance, 3 (3) : 370-382, 2024.
46) Ota Kazuki, Yoshida Takuya, Maemura Hirohiko, Tanigawa Satoru. Gender differences in three-dimensional pelvic behavior during sprint running. The Journal of Sports Medicine and Physical Fitness, Online Published, 2025.
47) Sato Takahiro, Waku Takahiro, McKay Cathy, Nakamura Isamu, Yamaguchi Taku, Nagata Shinichi, Tomura Takafumi, Furuta Yu. Japanese adult learners' experiences in an online social justice and diversity recurrent education program in sport and physical activity. International Journal of Lifelong Education, 43 (2-3) : 182-199, 2024.
48) Serizawa Naho, Ninomiya Yusuke, Shinagawa Akiho, Minematsu Ayako, Miyakoshi Yuichi, Yano Tomohiro, Ota Masako. Short-term intake of delta-tocotrienol on lipid profiles in healthy subjects. Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition, 76 (1) : 3-7, 2025.
49) Shimizu Kazuhiro, Hattori Satoshi, Matsumoto Megumi, Hiraoka Hiroaki, Tanabe Yoko, Hanaoka Yukichi, Ono Takashi, Kimura Fuminori, Hamada Koichiro, Watanabe Koichi, Kukidome Takeshi. Effects of Lactiplantibacillus pentosus ONRICb0240-containing food on reducing immunosuppression in judo athletes during rapid weight loss. The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, Online Published, 2025.
50) Shinchi Kotaro, Yamashita Daichi, Yamagishi Takaki, Aoki Kazuhiro, Miyamoto Naokazu. Relationship between jump height and lower limb joint kinetics and kinematics during countermovement jump in elite male athletes. Sports Biomechanics, 23 (12) : 3454-3465, 2024.
51) Shiwaku Kousuke, Otsubo Hidenori, Suzuki Daisuke, Pirri Calmero, Kodesho Taiki, Kamiya Tomoaki, Taniguchi Keigo, Ohnishi Hirofumi, Teramoto Atsushi, Stecco Carla. Biomechanical effects of fascial hydrorelease: a cadaveric study. BMC Musculoskeletal Disorders, 26 (1) : 306, 2025.

52) Sone Ryota, Yamamoto Kenji, Tamai Shinsuke, Goji Honoka, Ohishi Kenji. Monitoring of salivary secretory immunoglobulin a quantified two methods during high-altitude volleyball training camp. Physiologia, 5(1): 8, 2025.
53) Suzuki Kanami, Yamaguchi Tatsuya, Tachiya Yasuhisa, Eda Kaori, Asano Tomoyuki, Senzaki Yoko, Nakajima Kohei. Development and validation of the COVID-19 Anxiety Scale for Japanese elite athletes. Sports Psychiatry, 3(2): 63-69, 2024.
54) Tachiya Yasuhisa. Psychological support for elite athletes in Japan −Perspective from sports psychology in Japan−. Sports Psychiatry, 3(2): 81-82, 2024.
55) Tamai Shinsuke, Shimizu Kazuhiro, Sone Ryota, Hoshi Daisuke, Kitahara Akari, Sugasawa Takehito, Takekoshi Kazuhiro, Watanabe Koichi. Variabilities of salivary human herpesvirus 6, 7, and secretory immunoglobulin A levels from pre- to post-competition periods in baseball players. The Journal of Sports Medicine and Physical Fitness, 65(3): 438-447, 2025.
56) Tamai Shinsuke, Sone Ryota, Watanabe Koichi, Shimizu Kazuhiro. Evaluation of saliva collection and DNA extraction methods for practical application of salivary human herpesvirus 6 and 7 assays. Viruses, 17(3): 411, 2025.
57) Tanabe Yoko, Kondo Emi, Sagayama Hiroyuki, Shimizu Kazuhiro, Yasumatsu Mikinobu, Nakamura Daisuke, Fujii Naoto, Takahashi Hideyuki. Impact of curcumin supplementation on exercise performance and muscle damage after a soccer match: a double-blind placebo-controlled cross-over study. European Journal of Applied Physiology, 124(7): 2161-2170, 2024.
58) Tanji Fumiya, Ohnuma Hayato, Ando Ryosuke, Yamanaka Ryo, Ikeda Tatsuaki, Suzuki Yasuhiro. Longer ground contact time is related to a superior running economy in highly trained distance runners. Journal of Strength and Conditioning Research, 38(5): 985-990, 2024.
59) Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Hong Jing-Chen, Tanaka Shotaro, Iwata Hiroyasu. Development of a platform for the identification and analysis of simultaneous localization of static, dynamic, and instructional sound sources in blind soccer. In 2024 IEEE International Conference on Advanced Intelligent Mechatronics, 1500-1505, 2024.
60) Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Tanaka Shotaro, Iwata Hiroyasu. Enhancing sound source localization in blind soccer: analyzing head movement strategies and localization abilities for static and dynamic auditory cues via a virtual spatial acoustic system. 2024 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics, 3763-3768, 2024.
61) Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Tanaka Shotaro, Iwata Hiroyasu. Identification of localization ability and head motion strategy for static and dynamic sound sources in blind soccer players using a virtual spatial acoustic system. IMEKO 2024 XXIV World Congress, 1-5, 2024.
62) Uchino Takamasa, Uchida Masataka, Ito Reita, Fujie Shumpei, Iemitsu Keiko, Kojima Chihiro, Nakamura Mariko, Shimizu Kazuhiro, Tanimura Yuko, Shinohara Yasushi, Hashimoto Takeshi, Isaka Tadao, Iemitsu Motoyuki. Effects of different exercise intensities or durations on salivary IgA secretion. European Journal of Applied Physiology, Online Published, 2024.
63) Uchizawa Akiko, Osumi Haruka, Zhang Simeng, Yajima Katsuhiko, Funayama Airi, Kondo Emi, Suzuki Yoko, Tanaka Yoshiaki, Park Insung, Enomoto Yasushi, Omi Naomi, Tokuyama Kumpei, Sagayama Hiroyuki. Energy expenditure and slow-wave sleep in runners: Focusing on reproductive function, chronic training, and sex. iScience, 28(2): 111717, 2025.
64) Yanaka Takuya, Imawaka Taro, Kojima Chihiro, Otomo Mana, Ohnishi Takahiro, Hoshikawa Masako. Evaluation of trunk oblique muscle activities in baseball batters using T2-weighted magnetic resonance imaging. Journal of Strength and Conditioning Research, 39(1): 48-53, 2024.
65) Yoshida Takuya, Zushi Amane, Zushi Kodayu, Hayashi Ryohei, Maemura Hirohiko, Tanigawa Satoru. Kinetic variables of the lower-limb joint that affect the drop jump index at different drop heights. Frontiers in Sports and Active Living, 6: 1458722, 2024.

1) 赤澤 暢彦, 中村 真理子, 谷村 祐子, 小島 千尋, 元永 恵子, 袴田 智子, 清水 和弘. パラスポーツにおける座位競技選手と立位競技選手の腸内細菌特性. Journal of High Performance Sport, 12: 64-77, 2024.
2) 石毛 勇介, 吉岡 伸輔, 袴田 智子, 稲葉 優希. オフシーズンの股関節伸展トレーニングが片脚切断パラリンピックアルペンスキー選手の雪上スキーパフォーマンスに及ぼす影響. トレーニング科学, 36(2): 155-165, 2024.
3) 植山 剛裕, 筒井 俊春, 上久保 利直, 後藤 晴彦, 原 由希菜, 山口 龍星, 鳥居 俊. 男性長距離走選手の厚底シューズ着用がランニング動作に及ぼす影響の検討. 日本臨床スポーツ医学会誌, 33(1): 77-84, 2025.
4) 岡部 文武, 河合 季信, 横澤 俊治, 湯田 淳, 赤澤 暢彦, 藤田 善也. ショートトラックスピードスケート競技の最大努力滑走におけるカーブ区間の滑走軌跡と滑走スピードの変化. 体育学研究, 70: 55-63, 2025.

5） 岡部 文武, 木村 裕也, 熊川 大介, 藤田 善也. スピードスケート競技男子 500m 種目のストレート滑走動作における世界一流選手の両腕振り動作のキネマティクス的特徴. スポーツ科学研究, 21: 1-14, 2024.
6） 景行 崇文, 木越 清信, 横澤 俊治. 棒高跳におけるポール湾曲中の肩キネティクス：肩関節等速性筋力との関係に着目して. 体育学研究, 早期公開, 2025.
7） 久保田 潤, 和久 貴洋. 世界選手権大会開催国分析を通じた国際競技大会招致・開催推進方策に関する検討. 体育学研究, 70: 175-194, 2025.
8） 佐々木 陽一朗, 吉田 拓矢, 小野 響也, 有田 祐二, 鍋山 隆弘, 谷川 聡. 大学剣道選手の跳躍能力と面打ちにおける打突時間との関係性について. コーチング学研究, 38(1): 51-60, 2024.
9） 佐藤 尚子, 富田 麻莉, 恒任 直美, 高戸 良之, 吉野 昌恵, 元永 恵子, 亀井 明子. 東京 2020 大会時の競技者栄養評価システムのデータ活用－オリンピック選手のレストランでの食事摂取状況－. 日本スポーツ栄養研究誌, 早期公開, 2025.
10） 實宝 希祥, 榎本 恭介, 阿部 成雄, 立谷 泰久. 東京 2020（+1）大会代表・代表候補選手の心理的競技力：東京 2020 大会延期前後、メダル獲得の有無、オリンピック過去大会との比較. 体育学研究, 69: 317-327, 2024.
11） 品川 明穂, 妙圓園 香苗, 高井 恵理, 元永 恵子, 蒲原 一之, 中嶋 耕平, 亀井 明子. 男子アーチェリー選手における骨密度および骨代謝に関連する血液指標の実態調査. 日本スポーツ栄養研究誌, 早期公開, 2025.
12） 品川 明穂, 元永 恵子, 渡口 槙子, 常住 汐里, 亀井 明子. ハイパフォーマンススポーツセンター内栄養評価システムにおける日本食品標準成分表 2020 年版（八訂）の導入および限界. 日本スポーツ栄養研究誌, 18: 150-158, 2025.
13） 白井 克佳, 花岡 裕吉, 原 将史, 中村 有紀, 清水 和弘, 久木留 毅, 赤間 高雄. 第32回オリンピック競技大会（2020/東京）メダル獲得上位国の事前合宿におけるコンディショニング戦略と競技成績の関係. 日本アスレティックトレーニング学会誌, 9(2): 113-122, 2024.
14） 白木 駿佑, 木越 清信. 間欠的スプリントトレーニングの新たな強度設定方法. 体育学研究, 70: 65-75, 2025.
15） 高橋 佐江子, 笹代 純平, 中里 浩介, 石毛 勇介, 中嶋 耕平. スキーブーツ着用の有無が大学アルペンスキー選手関節運動に及ぼす影響. 日本アスレティックトレーニング学会誌, 9(2): 123-128, 2024.
16） 辰村 正紀, 半谷 美夏, 金岡 恒治, 塚越 祐太, 清水 顕, 元島 清香. スポーツ関連の腰痛（種目特性とピットフォール）水泳選手の腰部障害. 日本臨床スポーツ医学会誌, 33(1): 151-159, 2025.
17） 田中 彩乃, 中嶋 耕平, 高橋 佐江子, 奥脇 透, 鈴木 章. 重症ハムストリング近位付着部損傷後に保存療法にて競技復帰したトップアスリートの一例. 日本臨床スポーツ医学会誌, 33(1): 140-146, 2025.
18） 辻 歩, 相原 伸平, 洪 境晨, 劉 超涵, 岩田 浩康. VR 音響システムの開発とブラインドサッカー選手の複数静止音源に対する定位能力の可視化と評価. 日本機械学会論文集, 91(942): 24-00147, 2025.
19） 筒井 俊春, 初雁 晶子, 飯塚 哲司, 坂槙 航, 本間 勇伎, 前道 俊宏, 鳥居 俊. 発育段階にある野球選手における上肢分節ごとの骨長、骨量、骨密度の特徴 －投球側と非投球側の違いに着目して－. 日本成長学会雑誌, 30(1): 21-26, 2024.
20） 豊島 由佳子, 岩崎 圭祐, 上野 俊明, 近藤 尚知, 髙垣 智博, 友利 杏奈, 中嶋 耕平. トップアスリートの口腔内状況の変化 －国立スポーツ科学センターにおける 20 年間のメディカルチェック結果について―. 日本臨床スポーツ医学会誌, 33(1): 33-41, 2025.
21） 中島 大貴, 吉岡 伸輔, 原田 将寛, 袴田 智子, 稲葉 優希, 村山 英晶, 木村 新, 石毛 勇介. Fiber Bragg Grating 法を用いたスキー板のたわみ計測. Journal of High Performance Sport, 12: 1-11, 2024.
22） 中原 貴典, 牧野 瑞輝, 長久保 健太郎, 田内 健二. 女子バレーボールにおけるセッターの体力特性 ー競技レベルと関連付けてー. バレーボール研究, 26(1): 38-43, 2024.
23） 野村 勇輝, 戸田 創, 才崎 和哉, 浅野 柊, 山下 泰功, 飯田 尚哉, 小出所 大樹, 渡部 峻, 吉田 昌弘, 吉田 真, 山本 敬三, 片寄 正樹. 最大等尺性肩屈曲運動時と投球動作時における肩甲骨位置の関連性. スポーツ理学療法学, 3(1): 1-6, 2024.
24） 萩原 正大, 衣笠 泰介, 白井 克佳, 山下 修平. ジュニア年代のアスリートに対する講義型のスポーツ科学教育プログラムが行動変容に与える効果とプログラムの重要性：自己評価に基づく検討. Journal of High Performance Sport, 12: 12-21, 2024.
25） 萩原 正大, 藤原 昌, 衣笠 泰介. 我が国における地域タレント発掘・育成事業参加者と日本人トップアスリートとのスポーツ経験の差：スポーツに関する主な経験年齢とトレーニング量の観点から. Journal of High Performance Sport, 12: 78-101, 2024.
26） 花岡 裕吉, 中村 有紀, 清水 和弘, 衣笠 泰介, 白井 克佳, 久木留 毅. 東京 2020 大会・北京 2022 大会に向けて実践したコンディショニングに関する調査 ―中央競技団体強化委員を対象として―. Journal of High Performance Sport, 12: 48-63, 2024.
27） 林 陵平, 吉田 拓矢, 苅山 靖. 外的負荷とステップ距離がステップクリーンエクササイズ中の下肢の負荷特性に与える影響. 陸上競技学会誌, 早期公開, 2024.
28） 樋川 幸平, 高橋 佐江子, 清水 怜有, 中嶋 耕平. わが国のエリート野球投手における Carrying angle の特徴. 日本臨床スポーツ医学会誌, 33(1): 20-25, 2025.
29） 古川 由佳, 黒澤 駒里, 吉野 昌恵, 元永 恵子, 亀井 明子. 東京 2020 大会時の競技者栄養評価システムのデータ活

用－オリンピック・パラリンピック選手の期分けおよび競技区分による食品群別摂取量－. 日本スポーツ栄養研究誌, 18: 138-141, 2025.
30) 松林 武生, 小林 海, 髙橋 恭平, 山中 亮, 綿谷 貴志, 大沼 勇人. 陸上競技 4 × 100m リレー日本代表チームの競技力分析：走力および利得時間からの検討. Journal of High Performance Sport, 12: 102-113, 2024.
31) 妙圓園 香苗, 安田 純, 高井 恵理, 元永 恵子, 亀井 明子. 大学生男子競技選手における血清 25（OH）D 濃度の屋内競技と屋外競技の比較検討 ～季節変動に着目して～. 日本スポーツ栄養研究誌, 18: 81-92, 2025.
32) 横澤 俊治, 河野 由, 今若 太郎. 滞空時間に着目したトランポリン競技のスコア分析. Journal of High Performance Sport, 12(9): 34-47, 2024.
33) 吉野 昌恵, 吉﨑 貴大, 近藤 衣美, 石橋 彩, 元永 恵子, 上東 悦子, 蒲原 一之, 亀井 明子. 平昌 2018 オリンピック冬季競技大会日本代表および候補選手のサプリメント使用状況. Journal of High Performance Sport, 12: 22-33, 2024.

2. 依頼原稿

1) 岩田 理沙. 暑熱環境に対するトータルコンディショニング―特集 トータルコンディショニング. トレーニング科学, 36(3): 193-198, 2024.
2) 衣笠 泰介. アスリート育成パスウェイを踏まえたアスリートライフスタイル支援のあり方. 体育の科学, 74(9): 562-566, 2024.
3) 久木留 毅. 段階的かつ包括的なアスリートの支援のあり方. 体育の科学, 74(9): 556-561, 2024.
4) 笹代 純平. 総合的なパフォーマンスの向上に有用な機器：ケーブルマシン. 臨床スポーツ医学, 41(10): 1084-1087, 2024.
5) 笹代 純平, 牛尾 会. スポーツ関連脳振盪：アムステルダム声明 (第 10 回) パラスポーツにおけるスポーツ関連脳振盪 (SRC). 臨床スポーツ医学, 41(10): 1092-1094, 2024.
6) 清水 和弘. 特集【トータルコンディショニング】特集によせて. トレーニング科学, 36(3): 167-169, 2024.
7) 清水 和弘. ハイパフォーマンスとライフパフォーマンスの循環. Sport Japan, 78: 80-81, 2025.
8) 清水 怜有, 高橋 佐江子, 深見 和矢, 庄子 理絵, 笹代 純平, 中村 真理子, 岩田 理沙, 玉井 伸典, 小出所 大樹, 中嶋 耕平. 国際総合競技大会期間中の高濃度人工炭酸泉を用いた 交代浴入浴方法に関する調査 ～オリンピックおよびパラリンピック競技アスリートを対象に～. 人工炭酸泉研究会雑誌, 8(1): 78-83, 2024.
9) 白井 克佳. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンターが推進する地域拠点との連携事業. 臨床スポーツ医学, 42(3): 348-353, 2025.
10) 高嶋 直美. エビデンスも活用した足関節靭帯損傷患者に対する理学療法ケーススタディ. 理学療法, 41(9): 825-838, 2024.
11) 髙橋 恭平, 松林 武生, 山中 亮, 小林 海, 大沼 勇人. ナッソー世界リレーおよびパリオリンピックにおける 4 × 100m リレー日本代表チームのレース分析. 陸上競技研究紀要, 20: 62-65, 2025.
12) 高橋 佐江子, 中村 真理子, 岩田 理沙, 玉井 伸典, 笹代 純平, 清水 怜有, 深見 和矢, 庄子 理絵, 筒井 俊春, 中嶋 耕平. トップアスリートにおける高濃度人工炭酸泉の活用. 人工炭酸泉研究会雑誌, 8(1): 21-23, 2024.
13) 立谷 泰久. トップアスリートのメンタルサポート～日体大で学んだことを活かして～. オリンピックスポーツ文化, 9: 23-41, 2024.
14) 谷村 祐子. 身体機能を活性化させる腸内細菌の働き (3) 運動で変わる腸内環境：腸内細菌の構成と機能, 代謝産物の視点から. 体育の科学, 74(5): 327-331, 2024.
15) 玉井 伸典. 特集【トータルコンディショニング】疲労に対するトータルコンディショニング. トレーニング科学, 36(3): 179-191, 2024.
16) 中嶋 耕平. 慢性期の肉ばなれに対するリハビリテーション ハムストリング付着部－レスリング. 臨床スポーツ医学, 42(2): 178-183, 2025.
17) 中村 寛江, 能瀬 さやか.【臨床力をグッと UP させる「貧血」の知識 - 鉄代謝の基礎から管理・治療の具体策まで】婦人科領域の貧血 女性アスリートの貧血の診かた. 臨床婦人科産科, 78(7): 632-636, 2024.
18) 中村 寛江, 能瀬 さやか.【スポーツと内分泌疾患 - 想像を超える？旬の間柄に瞠目 !-】《臨床現場におけるスポーツとホルモン》女性アスリートにおけるスポーツと性ホルモン. 糖尿病・内分泌プラクティス Web, 2(3): 38, 2024.
19) 西田 雄亮.【肉ばなれ - 今，求められているもの -】肉ばなれの診断 超音波（エコー）. 臨床スポーツ医学, 42(2): 136-140, 2025.
20) 西田 雄亮.【アスリートのコンディショニングへの取り組み】運動器の外傷・障害からのコンディショニング. 体育の科学, 74(10): 667-674, 2024.
21) 能瀬 さやか. シン・産婦人科領域のスポーツ医学 (第 9 回) 女性アスリートの新たな医学的課題 女子アスリートに多い膝前十字靱帯損傷とリラキシンの関連性. 臨床スポーツ医学, 41(9): 990-994, 2024.
22) 能瀬 さやか.【スポーツと時間栄養学・時間運動学 - いつ食べて, いつ運動するか -】応用編 性周期を考慮した女性アスリートのサポートの実際. 臨床スポーツ医学, 41(6): 614-618, 2024.
23) 能瀬さやか. 女性アスリートへの対応 ～競技特性を考慮した治療を目指して～. 臨床スポーツ医学, 42(1): 80-84,

2024.

24）半谷 美夏 . エリートアスリートへの対応 －競技種目・アスリートの特性を知る . 臨床スポーツ医学 , 42(1): 70-73, 2025.

25）半谷 美夏 .【スポーツ医学における画像診断 - 小児の被曝低減を目指す取り組み -】総論 CT-like MRI のトップアスリート診断への応用 . 臨床スポーツ医学 , 41(8): 812-817, 2024.

26）細井 美帆 , 泉 玄太郎 , 能瀬 さやか , 浦田 陽子 , 原田 美由紀 , 廣田 泰 , 平池 修 , 大須賀 穣 . 経口 GnRH antagonist 製剤 relugolix の子宮筋腫への術前投与の検討 . 産婦人科の実際 , 73(5): 491-498, 2024.

27）牧野 瑞輝 , 山本 大輔 , 前田 奎 , 瀧川 寛子 . 男子やり投げにおける同一試合内での記録に差が生じた要因 . 陸上競技研究紀要 , 19: 137-141, 2024.

28）松林 武生 , 笠井 信一 , 後藤 晴彦 , 小泉 潤 , 庄司 一眞 , 眞鍋 芳明 . 2024 年シーズンにおける七種競技選手のパフォーマンス分析 . 陸上競技研究紀要 , 20: 177-181, 2025.

29）松林 武生 , 笠井 信一 , 後藤 晴彦 , 小泉 潤 , 庄司 一眞 , 眞鍋 芳明 . 2024 年シーズンにおける十種競技選手のパフォーマンス分析 . 陸上競技研究紀要 , 20: 169-176, 2025.

30）三浦 康二 , 松林 武生 , 景行 崇文 , 後藤 晴彦 , 杉田 正明 , 佐藤 高嶺 , 高橋 直己 , 川向 哲弥 , 今村 文男 , 谷井 孝行 . 日本人男子競歩選手におけるランニング中の地面反力のフォースプラットフォームによる計測値と重心加速度・全身角運動量による推定値との比較 . 陸上競技研究紀要 , 20: 182-189, 2025.

31）門馬 怜子 . 特集【トータルコンディショニング】女性アスリートにおけるトータルコンディショニング . トレーニング科学 , 36(3): 207-212, 2024.

32）山下 大地 . 方向転換能力と地面反力―特集 スポーツにおける反力利用のスキル . 体育の科学 , 74(12): 803-808, 2024.

33）山中 亮 , 松林 武生 , 髙橋 恭平 , 小林 海 , 大沼 勇人 . 2023 年度および 2024 年度における男子 4 × 400m リレー日本代表チームのレース分析 . 陸上競技研究紀要 , 20: 66-69, 2025.

34）吉田 拓矢 . 特集【トータルコンディショニング】競技パフォーマンスの維持・向上のためのトータルコンディショニング―下肢 SSC 能力のアセスメントと運動準備に着目したプライオメトリクス技術習得を例にして―. トレーニング科学 , 36(10): 171-178, 2024.

3. 書籍等出版物

1） Enatsu Naoko, Seino Jun, Tsuji Taishi, Ogata Mitsugi. Effectiveness of sports nutrition education based on self-determination theory for male university rowing athletes: A randomized controlled trial. Luis R Silva(Ed.), Prime archives in nutrition: 2nd edition, Vide Leaf, 2024. 5.

1） 石毛勇介 . 公益財団法人全日本スキー連盟（著）, 日本スキー教程 , 芸文社 , 2024. 10.

2） 上東 悦子 . Ⅲ章 フィギュアスケート競技指導論 . 公認コーチ 3 専門科目教本（フィギュアスケート）: アンチ・ドーピング規則の理解 , 公益財団法人日本スケート連盟指導者教育委員会 , 180-189, 2024. 5.

3） 衣笠 泰介 . FILE03 スポーツ振興センター INTERVIEW 日本スポーツ振興センターで働くプロフェッショナル 衣笠泰介さん . 水島 淳（編）, 池井 大貴（編）, スポーツの仕事大全：45 人のスポーツプロフェッショナルたち , みらい , 34-35, 2024. 11.

4） 能瀬さやか . 呼吸器領域 . 日本癌治療学会（編）, 小児・AYA 世代がん患者等の妊孕性温存に関する診療ガイドライン 2024 年 12 月改訂 第 2 版 , 金原出版 , 472-475, 484-487, 2024. 12.

4. 報告書

1） 大坪 香菜子 , 柄木田 健太 , 近藤 みどり , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 髙橋 由衣 , 冨永 哲志 , 本郷 由貴 . アスリートのためのメンタルトレーニング（応用編）トピック⑪「チームワークを高めるために」. HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野 , 2025.

2） 大坪 香菜子 , 柄木田 健太 , 近藤 みどり , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 髙橋 由衣 , 冨永 哲志 , 本郷 由貴 . アスリートのためのメンタルトレーニング（応用編）トピック⑩「スランプと向き合うために」. HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野 , 2025.

3） 大坪 香菜子 , 柄木田 健太 , 近藤 みどり , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 髙橋 由衣 , 冨永 哲志 , 本郷 由貴 . アスリートのためのメンタルトレーニング（応用編）トピック⑨「ケガと向き合うために」. HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野 , 2024.

4） 大坪 香菜子 , 柄木田 健太 , 近藤 みどり , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 髙橋 由衣 , 冨永 哲志 , 本郷 由貴 . アスリートのためのメンタルトレーニング（応用編）トピック⑧「いつもと違う環境で実力発揮するために」. HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野 , 2024.

5） 大坪 香菜子 , 柄木田 健太 , 近藤 みどり , 齊藤 千波 , 立谷 泰久 , 髙橋 由衣 , 冨永 哲志 , 本郷 由貴 . アスリートのためのメンタルトレーニング（応用編）トピック⑦「プレッシャーに打ち勝つために」. HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野 , 2024.

6）大坪 香菜子, 柄木田 健太, 近藤 みどり, 齊藤 千波, 立谷 泰久, 髙橋 由衣, 冨永 哲志, 本郷 由貴. アスリートのためのメンタルトレーニング（応用編）トピック⑥「モチベーションの質を高めるために」. HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野, 2024.
7）大坪 香菜子, 柄木田 健太, 近藤 みどり, 齊藤 千波, 立谷 泰久, 髙橋 由衣, 冨永 哲志, 本郷 由貴. アスリートのためのメンタルトレーニング（応用編）トピック⑤「本番に近づけた練習をするために」. HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野, 2024.
8）大坪 香菜子, 柄木田 健太, 近藤 みどり, 齊藤 千波, 立谷 泰久, 髙橋 由衣, 冨永 哲志, 本郷 由貴. アスリートのためのメンタルトレーニング（応用編）トピック④「パフォーマンス発揮に向けて集中力を研ぎ澄ます」. HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ 心理分野, 2024.
9）木村 裕也. 科学・情報部門 共通：成果発表. 令和 5 年度 スピードスケート科学・情報事業報告書, 5: 39, 2024.
10）木村 裕也. 世界一流女子長距離選手の 3,000m レースにおける カーブ区間所要時間短縮のためのカーブ滑走技術. 令和 5 年度 スピードスケート科学・情報事業報告書, 5: 57-61, 2024.
11）久木留 毅. 大規模国際競技大会の招致と開催について考える －スポーツにおける国際情報の収集と活用－. 日本スポーツ法学会年報 2024, (31): 40-51, 2024.
12）近藤 みどり. 演者報告「アスリートの誇りはどのような感情なのか：自分らしさと誇らしさ」. 体育心理学専門領域会報, (64): 5-5, 2024.
13）中村 宏美. 第 4 章「専門的な視点からの幼児期からの運動習慣について」子どもにスポーツをさせていない保護者についてのインサイト. スポーツ庁委託事業令和 6 年度「幼児期からの運動習慣形成プロジェクト事業報告書」, 81-89, 2025.
14）堀田 泰史. U-22 日本代表 2023 年アスレティックトレーナー帯同報告. 公益財団法人日本サッカー協会 医学委員会 年報 2023 年 1 月～ 12 月版, 47-51, 2024.
15）松田 侑未子, 近藤 知佳, 海崎 彩, 江夏 直子, 元永 恵子, 亀井 明子. アスリートのための試合期の食事. HPSC ネットワークの構築事業 HPSC パッケージ, 2024.

5. 講演・特別講演・シンポジウム等

1）Kinugasa Taisuke. A Japanese perspective on athlete development pathways. ASPC XII International Forum on Elite Sport, 2024. 12.
2）Kukidome Takeshi. Innovation of Japan high performance sport centre for system development lessons from olympic and paralympic games - Japan's high performance sports strategy -. Association of Sport Performance Centres XII International Forum on Elite Sport, 2024. 12.
3）Momma Reiko. Research and support on condition changes with menstrual cycle in Japanese female athletes. International Conference Women and Performance, 2024. 11.
4）Nakamura Mariko. Female athletes research and support project in JHPSC. National Seminar and International Conference Women and Performance, 2024. 11.
5）Namma-Motonaga Keiko. Estimation of the energy requirements for Paralympic athletes. International Sports Nutrition Conference - Energy needs of athletes -, 2025. 2.
6）Tachiya Yasuhisa. Basic motor learning knowledge for performance enhancement. The 2024 Asian-South Pacific Association of Sport Psychotogy mentor-mentee program in Myanmar, 2024. 11.
7）Tachiya Yasuhisa. The psychological support for Japanese elite athletes at JISS. The 2024 Asian-South Pacific Association of Sport Psychotogy mentor-mentee program in Myanmar, 2024. 11.
8）Waku Takahiro. Overcoming challenges in the development of high-performance training centres in Asia. Association of Sport Performance Centres XII International Forum on Elite Sport, 2024. 12.
9）Yamada Etsuko. Sports and city diplomacy. Beyond the Game, A Sports Diplomacy Webinar Series, 2024. 8.
10）Yamada Etsuko. Panel discussion on sports diplomacy. Workshop on Sports Diplomacy, 2024. 11.

1）相原 伸平. スポーツテック：パフォーマンスの最大限化を支える情報科学. 第 34 回日本 MRS 年次大会, 2024. 12.
2）相原 伸平. 冬季スポーツにおける数理・データサイエンス・AI 活用の現場 – カーリング. 北海道大学 数理・データサイエンス教育研究センター講演会, 2024. 11.
3）相原 伸平. スポーツテック：パフォーマンスの最大限化を支える、情報科学のチカラ. データサイエンティスト協会 11th シンポジウム, 2024. 11.
4）相原 伸平, 河村 晃宏. スポーツクライミングの競技支援を目的とした工学的アプローチによる実証型研究. 第 25 回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会, 2024. 12.
5）安藤 良介. 世界トップを目指すアスリートを支える研究員になるために. 第 32 回日本運動生理学会大会, 2024. 8.
6）安藤 良介. パフォーマンスを構成する要素に潜む個別性. 第 78 回日本体力医学会大会, 2024. 9.
7）石毛 勇介. 国立スポーツ科学センターにおけるパラアスリートを対象とした支援と研究. 日本スポーツ整形外科学会 2024, 2024. 9.

8）尾崎 宏樹 . ハイパフォーマンススポーツにおける科学的サポート . 日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会 , 2024. 8.
9）尾崎 宏樹 , 相原 伸平 , 山田 耕司 , 仲谷 政剛 . パフォーマンス最大化のためのスポーツテクノロジー . ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024, 2024. 12.
10）尾崎 宏樹 , 松本 恵 , 松岡 慧 , 中谷 英樹 . 最新スポーツ科学が スポーツ現場で採用されるためには ～指導者・サポートスタッフからの示唆～ . 日本アプライドスポーツ科学会第 4 回大会 , 2025. 1.
11）蒲原 一之 . トップアスリートと喘息診療 . 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2024. 11.
12）蒲原 一之 , 友利 杏奈 , 福嶋 一剛 , 熊井 康こ . トップアスリートにおける喘息診療 . 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2024. 11.
13）上東 悦子 . 日本臨床スポーツ医学会・日本アンチ・ドーピング機構合同シンポジウム「アンチ・ドーピングと医療」 アスリートに対する服薬指導 . 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2024. 11.
14）亀井 明子 . スポーツ栄養におけるエビデンスとその活用、アスリートの貧血と栄養 . 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2024. 11.
15）衣笠 泰介 , 平松 竜司 . データから考えるパラアスリート育成パスウェイ . JPC Gathering 2025, 2025. 2.
16）衣笠 泰介 , Paul Wylleman, Iñigo Mujika, Shona Halson, David Martin. 将来を見据えたトータルコンディショニング支援のあり方を考えよう「10 年先のトータルコンディショニング支援とは？」. ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024, 2024. 12.
17）久木留 毅 . HPSC におけるスポーツ医学・科学、情報による 今後のサポートについて ―国立スポーツ科学センターの新たな挑戦―. 日本体育大学ハイパフォーマンスセンターシンポジウム 2025, 2025. 3.
18）久木留 毅 . 国立スポーツ科学センター（JISS）におけるトップアスリート支援について . スポーツ庁と国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構 (JAXA) の連携協定調印式 , 2025. 2.
19）久木留 毅 . ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ – 国立スポーツ科学センターの新たな挑戦 –. 第 11 回日本スポーツ理学療法学会学術大会 , 2025. 1.
20）久木留 毅 . ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ . 日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会 , 2024. 8.
21）久木留 毅 . スポーツ基本法改正への期待 - スポーツウエルネスと地域活性の視点から -. 筑波大学スマートウエルネスシティ政策開発研究センター 第 4 回シンポジウム , 2024. 6.
22）久木留 毅 . ハイパフォーマンススポーツにおける情報学の可能性 － ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ －. スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会）, 2024. 6.
23）久木留 毅 , 勝田 隆 , トニー ジローナ , 栗山 雅倫 . ハイパフォーマンスのこれからの役割 ～ハンドボールの次のステージを見据えて～ . 日本ハンドボール学会第 13 回大会 , 2025. 3.
24）久木留 毅 , 室伏 広治 , 伊藤 数子 , 宇山 賢 , 津下 一代 . ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ ―国民のスポーツを通じたライフパフォーマンスの向上に向けて―. 生涯スポーツ・体力つくり全国会議 2025, 2025. 2.
25）久木留 毅 , 清水 和弘 , 中村 真理子 , 家光 素行 , 岡田 志麻 , 伊坂 忠夫 . 分野融合によるハイパフォーマンスアスリート支援の新たなアプローチ ―パリ 2024 大会にみるパフォーマンス発揮のためのトータルコンディショニング―. 第 32 回日本運動生理学会大会 , 2024. 8.
26）窪 康之 , 横澤 俊治 , 松林 武生 . パリオリンピック・パラリンピックへ向けた総合型サポート . ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024, 2024. 12.
27）近藤 慶太 , 高岡 沙知 , 福嶋 一剛 , 丸岩 侑史 , 萩原 怜奈 , 佐藤 真樹 , 松浦 由生子 , 江波戸 智希 , 小倉 彩音 , 熊崎 晶 , 吉田 哲朗 , 濱井 彩乃 . Young Member's Meeting. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2024. 11.
28）近藤 みどり . 妊娠・産後期アスリートのスポーツ医科学サポート：心理サポートの見地から . 日本スポーツ栄養学会第 10 回大会 , 2024. 9.
29）近藤 みどり . アスリートの誇りの構造と達成行動 . 日本感情心理学会 第 32 回大会 , 2024. 6.
30）笹代 純平 .「膝 ACL 損傷のスポーツ理学療法～多様性を考慮したアプローチ」―パラアスリートに対して―. 第 43 回東京都理学療法学術大会 , 2024. 9.
31）笹代 純平 , 大石 益代 , 亀井 明子 , 半谷 静香 . パラリンピック柔道選手のトータルコンディショニングサポート～ ACL 再建術後からパリ大会銀メダル獲得までの 2 年間～ . ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024, 2024. 12.
32）清水 和弘 . アスリートの免疫機能の可視化 . 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2024. 11.
33）清水 和弘 . ハイパフォーマンススポーツにおける研究成果の実装と国民の生活への応用 . 第 32 回日本運動生理学会大会 , 2024. 8.
34）清水 和弘 , 谷村 祐子 , 椎葉 大輔 , 枝 伸彦 , 吉田 拓矢 . トレーニング科学領域に役立つ運動免疫学 . 第 37 回日本トレーニング科学会大会 , 2024. 11.
35）清水 和弘 , 花岡 裕吉 . ハイパフォーマンスアスリートの感染予防のためのトータルコンディショニング . 第 32 回日本運動生理学会大会 , 2024. 8.
36）清水 和弘 , 吉田 拓矢 , 小出所 大樹 . HPSC が推進するアスリートのためのトータルコンディショニング . 第 37 回日本トレーニング科学会大会 , 2024. 11.

37）白井 克佳．日本における情報戦略と他部門連携の成果と課題．第 4 回日本パラスポーツトレーナー学会学術集会，2024. 11.
38）白井 克佳，能瀬 さやか，柏木 由美子，添島 予理，三宅 宏実．Female Athletes Research & Support Team（FARST）の新たな取り組み～女性アスリート研究・支援の現場から～．ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024, 2024. 12.
39）高井 恵理．妊娠・産後期アスリートのスポーツ医科学サポート～公認スポーツ栄養士がかかわるサポートについて～．日本スポーツ栄養学会第 10 回大会，2024. 9.
40）高橋 佐江子．スポーツにおける女性メディカルスタッフの活動支援 支援部会の取り組み．第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会，2024. 11.
41）髙橋 由衣．大学生アスリートの認知的方略の特徴（大会準備委員会企画シンポジウム）．日本パーソナリティ心理学会第 33 回大会，2024. 10.
42）谷口 圭吾，中尾 学人，小出所 大樹，加藤 拓也，飯田 尚哉，片寄 正樹．超音波研究が切り拓く力学ストレス評価の可能性．第 35 回日本整形外科超音波学会，2024. 11.
43）中村 宏美．子どもにスポーツをさせていない保護者についてのインサイト ～ JSC 子どものフィジカルリテラシー習得に関する家庭環境調査～．令和 6 年度「幼児期からの運動習慣形成プロジェクト」シンポジウム，2025. 2.
44）中村 真理子．アスリートにおける 実践的な暑熱対策とパフォーマンスの関係．第 130 回日本解剖学会・第 102 回日本生理学会・第 98 回日本薬理学会 合同大会，2025. 3.
45）中村 真理子．女性アスリートにおけるリカバリー戦略．第 11 回日本スポーツ理学療法学会学術大会，2025. 1.
46）中村 真理子．アスリートにおける競技現場での身体冷却を用いたリカバリー戦略．第 32 回日本運動生理学会大会，2024. 8.
47）中村 真理子，清水 潤．ハイパフォーマンスアスリートのピリオダイゼーションを考慮したトータルコンディショニング．第 32 回日本運動生理学会大会，2024. 8.
48）中村 有紀．女性アスリートの育成パスウェイ．2024 年度女性スポーツ医学研究会学術集会 シンポジウム I, 2025. 3.
49）中村 有紀．HPSC における連携・協働の取組．日本体育大学ハイパフォーマンスセンターシンポジウム 2025, 2025. 3.
50）西田 雄亮．シンポジウム「難治性疾患に挑む ジャンパー膝の病態と治療」画像所見から考えるジャンパー膝の病態と治療．第 2 回日本膝関節学会，2024. 12.
51）能瀬 さやか．JISS メディカルチェックの統計結果～婦人科問診票より～．女性スポーツ医学研究会学術集会，2025. 3.
52）能瀬 さやか．女性スポーツ．JOC いしかわ女性スポーツシンポジウム，2025. 3.
53）能瀬 さやか．女性アスリートの健康問題．男女共同参画セミナー横浜，2025. 1.
54）能瀬 さやか．女性アスリートが抱える医学的問題とその対策．第 5 回横浜スポーツメディスン研究会，2024. 12.
55）能瀬 さやか．女性アスリートの疲労骨折ー産婦人科医の立場からー．第 49 回日本足の外科学会学術集会，2024. 11.
56）能瀬 さやか．女性アスリートのコンディショニング～性ホルモンとスポーツ外傷・障害の関連に着目して～．第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会，2024. 11.
57）能瀬 さやか．若年女性の成長と骨．第 45 回日本肥満学会・第 42 回日本肥満症治療学会学術集会，2024. 10.
58）能瀬 さやか．アスリートの背景に基づく診療のポイント：女性アスリートの診療のポイント．日本整形外科学会，2024. 9.
59）能瀬 さやか．リラキシンと ACL 損傷．日本スポーツ整形外科学会 2024, 2024. 9.
60）能瀬 さやか．諸外国における妊娠・産後アスリートの支援と研究の現状．日本スポーツ栄養学会第 10 回大会，2024. 9.
61）能瀬 さやか．女性アスリートの骨粗鬆症の現状と対策．第 46 回熊本骨粗鬆症研究会，2024. 9.
62）能瀬 さやか．妊娠期・産後のトータルサポート．第 1 回 PPN シンポジウム「産前産後の多職種連携～健康と運動を考える～」，2024. 9.
63）能瀬 さやか．女性アスリートにおける無月経．第 52 回日本女性心身医学会学術集会，2024. 8.
64）能瀬 さやか．女性アスリートの内分泌・栄養・代謝．第 48 回日本女性栄養・代謝学会学術集会，2024. 8.
65）能瀬 さやか．女性 Wellness 研究の最前線．第 32 回日本運動生理学会大会，2024. 8.
66）能瀬 さやか．女性アスリートにおける診療のポイント．山梨県産婦人科医会・山梨産科婦人科学会夏季合同学術集会，2024. 8.
67）能瀬 さやか．Bone Health 女性アスリート．第 97 回日本内分泌学会学術総会，2024. 6.
68）能瀬 さやか．ジュニアアスリートで注意すべき婦人科疾患．第 35 回長野県小児保健研究会，2024. 6.
69）能瀬 さやか．スポーツに参加する女性が抱える婦人科の健康問題．第 1 回 Women's Sports Performance Summit, 2024. 6.
70）能瀬 さやか．女性アスリートの婦人科診療における留意点～月経困難症から無月経の対応まで～．第 155 回東北連合産科婦人科学会総会・学術講演会，2024. 5.

71）能瀬 さやか . 女性アスリートのヘルスケア . 第 76 回日本産科婦人科学会学術講演会 , 2024. 4.
72）能瀬 さやか . 女性アスリートの診療における留意点 . 第 24 回長崎産科婦人科臨床懇話会 , 2024. 4.
73）半谷 美夏 . 腰椎分離症 up to date ～診断、治療、スポーツ復帰～ ハイレベルアスリートの腰椎分離症 . 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会 , 2024. 11.
74）半谷 美夏 . トップアスリートの腰痛 . 第 32 回日本腰痛学会 , 2024. 10.
75）半谷 美夏 . アスリートの仙腸関節障害の画像診断 . 第 15 回日本仙腸関節研究会 , 2024. 10.
76）半谷 美夏 . トップアスリートの脊柱コンディショニング . 日本スポーツ整形外科学会 2024, 2024. 9.
77）星川 雅子 . ハイパフォーマンスアスリートの睡眠と時差調整 . NOB シフトワーク研究会 , 2024. 9.
78）星川 雅子 . ハイパフォーマンスアスリートの睡眠と時差調整 . 日本睡眠学会第 48 回定期学術集会 , 2024. 7.
79）星川 雅子 . 日本スポーツパフォーマンス学会の今後に期待すること . 第 10 回日本スポーツパフォーマンス学会大会 , 2024. 7.
80）松原 仁 , 北原 格 , 木村 聡貴 , 相原 伸平 . スポーツ情報学の役割 . スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会）, 2024. 6.
81）元永 恵子 . 栄養サポートと地域における多職種連携 . 日本スポーツ栄養学会第 10 回大会 , 2024. 9.
82）山下 修平 , 青木 雄介 , 野元 伸一郎 . アスリート育成・強化戦略の最適化 . ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024, 2024. 12.
83）山下 大地 . フィジカルパフォーマンス向上のための測定と評価 - 様々な左右差の評価方法 . 第 53 回千葉スポーツ医学研究会 , 2025. 1.
84）山下 大地 . 競技パフォーマンス向上のためのトレーニング研究について考える―トレーニングジムで得られたデータをどのようにトレーニング研究に活かすか . 第 78 回日本体力医学会大会 , 2024. 9.
85）山田 悦子 . 新時代のオリンピック・パラリンピック ～ パリ 2024 大会の取り組みから見えるもの～ . Volunteer’s Summit 2025, 2025. 3.
86）山田 悦子 . Paris 2024 のレガシーの設定と評価 . 日本体育･スポーツ政策学会第 34 回大会会員企画セッション（ミニシンポジウム）, 2024. 12.
87）山辺 芳 . HPSC 支援／研究アワード 2023 受賞講演 . ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス 2024, 2024. 12.
88）米津 貴久 . 運動介入後の筋の変化～超音波画像を中心に～ . 第 23 回国際エクササイズサイエンス学会 第 141 回理学療法科学学会 合同学術大会 , 2024. 6.
89）和久 貴洋 . タレント発掘事業にみるイノベーション . 令和 6 年度第 2 回地域スポーツイノベーションカレッジ , 2024. 9.

6. 学会発表

1）Aihara Shimpei, Chen Guanyu, Hara Riku, Nakagawa Minori, Ogasawara Ayumi, Yanagi Hitoshi, Takegawa Yoshinari, Ito Takeshi, Masui Fumito. Development of a simple tracking system to monitor curling stone dynamics. 12th International Conference on Sport Sciences Research and Technology Support, 2024. 11.
2）Akazawa Nobuhiko, Nakamura Mariko, Tanimura Yuko, Kojima Chihiro, Namma-Motonaga Keiko, Hakamada Noriko, Shimizu Kazuhiro. The impact of competitive category on characteristics of gut microbiome in Japanese elite para-athletes. The 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2024. 7.
3）Ando Ryosuke, Ohnuma Hayato, Tanji Fumiya, Ikeda Tatsuaki, Yamanaka Ryo, Suzuki Yasuhiro. Association between vertical and leg stiffness during running and thigh muscle size in national-level distance runners. The 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2024. 7.
4）Chen Guanyu, Mori Haruna, Aihara Shimpei, Masui Fumito, Takegawa Yoshinari. IMU sensor-based rotation angle computation system for curling stone. スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会）, 2024. 6.
5）Fukushima Kazutaka, Tomori Anna, Kamahara Kazuyuki, Nakata Yoshio. COVID-19 Infection and the time to return-to-play among elite competitive athletes in Japan, 2022-2023. 18th Asian Federation of Sports Medicine Congress, 8th ISN International Sports Medicine & Sports Science Conference, 2024. 4.
6）Furuhashi Yuki, Muratomi Kotaro, Yoshida Takuya, Tanigawa Satoru, Maemura Hirohiko. The effect of attentional focus strategy on motor learning of drop jump. The 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2024. 7.
7）Goto Haruhiko, Iizuka Satoshi, Kameda Mai, Hakamada Noriko, Matsubayashi Takeo. Body composition measurement in para-athletes using Bioelectrical Impedance Analysis. International Symposium of Asian Society for Adapted Physical Education and Exercise 2024, 2024. 8.
8）Guanyu Chen, Mori Haruna, Takegawa Yoshinari, Aihara Shimpei, Masui Fumito. Design and implementation of a stone rotation measurement system with IMU sensor and stone behavior presentation system. 12th International Conference on Sport Sciences Research and Technology Support, 2024. 11.

9) Hayashida Takumi, Kawamura Akihiro, Kurazume Ryo, Aihara Shimpei. Bolt type force sensor with improved wiring for force measurement in sport climbing. IEEE SENSORS 2024, 2024. 10.
10) Ishige Yusuke. The influence of trunk impairment level on trunk movement during para-alpine sit-skiing. 10th International Congress on Science and Skiing, 2025. 2.
11) Ito Reita, Uchino Takamasa, Uchida Masataka, Fujie Shumpei, Iemitsu Keiko, Kojima Chihiro, Nakamura Mariko, Shimizu Kazuhiro, Tanimura Yuko, Shinohara Yasushi, Hashimoto Takeshi, Isaka Tadao, Iemitsu Motoyuki. Acute effects of different exercise intensities and durations on salivary LL-37 secretion. The 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2024. 7.
12) Iwasaki Tomoya, Noguchi Wataru, Tamura Yasumasa, Aihara Shimpei, Yamamoto Masahito. Creation of training data and training for prediction model of curling scores using real game data. 12th International Conference on Sport Sciences Research and Technology Support, 2024. 11.
13) Iwata Risa, Namamura Mariko, Takahashi Saeko, Tamai Shinsuke, Sasadai Jumpei, Shimizu Reia, Fukami Kazuya, Shoji Rie, Nakajima Kohei. Effects of high-concentration CO2-water immersion on core body temperature and sleep condition. The 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2024. 7.
14) Iwata Risa, Yamamoto Yusuke, Nakamura Mariko, Takai Eri, Takahashi Yui, Ozaki Hiroki. Physiological responses to heat stress during summer jump training in snowboarders. 10th International Congress on Science and Skiing, 2025. 1.
15) Kayaba Momoko, Ogata Hitomi, Yukina Yumen, Kiyono Ken, Nose-Ogura Sayaka, Nagai Narumi. The association between underweight and sleep problems in females aged 12–49 years:Insights from an online survey in Japan. The Asian Society of Sleep Medicine Interim Meeting 2024, 2024. 10.
16) Kodesho Taiki, Yamagata Kazuma, Nakao Gakuto, Katayose Masaki, Taniguchi Keigo. Effect of task on intramuscular regional differences in rectus femoris elasticity during isometric contraction: an ultrasound shear wave elastography study. International Society of Electrophysiology and Kinesiology 2024, 2024. 6.
17) Momma Reiko, Tanimura Yuko, Goto Haruhiko, Kageyuki Takafumi, Yamagishi Takaki, Hakamada Noriko, Matsubayashi Takeo. A case study of HR measurement in wheelchair racing athletes. The 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2024. 7.
18) Nakao Gakuto, Kodesho Taiki, Yamagata Kazuma, Watanabe Kota, Ohsaki Yuki, Katayose Masaki, Taniguchi Keigo. Site-specific assessment of the mechanical properties of each hamstring muscle in human cadavers using shear wave elastography. International Society of Electrophysiology and Kinesiology 2024, 2024. 6.
19) Onishi Takeru, Iwasaki Susumu, Tachiya Yasuhisa. The relationship between psychological abilities and mental health among elite athletes in Japan. The 2024 European Congress of Sport and Exercise Psychology, 2024. 7.
20) Ozaki Hiroki, Inaba Yuki, Kimura Arata, Yamamoto Yusuke. Development of the performance structure model in snowboard slopestyle and bigair. 10th International Congress on Science and Skiing, 2025. 1.
21) Takahashi Yui, Iwasaki Susumu, Onishi Takeru, Tachiya Yasuhisa. Survey on Japan Institute of Sports Sciences psychological support practice: A reflection from the perspective of first visits among elite athletes. Association of Applied Sport Psychology 39th Annual Conference, 2024. 10.
22) Tanimura Yuko, Akazawa Nobuhiko, Nakamura Mariko, Eda Nobuhiko, Murakami Haruka, Nakagata Takashi, Nanri Hinako, Kawashiama Hitoshi, Park Jonguk, Hosomi Koji, Mizuguchi Kenji, Kunisawa Jun, Miyachi Motohiko, Hoshikawa Masako. The influence of sleep duration on gut microbiota composition and functionality in Japanese elite athletes. The 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2024. 7.
23) Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Hong Jing-Chen, Tanaka Shotaro, Iwata Hiroyasu. Development of a platform for the identification and analysis of simultaneous localization of static, dynamic, and instructional sound sources in blind soccer. IEEE International Conference on Advanced Intelligent Mechatronics 2024, 2024. 7.
24) Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Tanaka Shotaro, Iwata Hiroyasu. Identification of localization ability and head motion strategy for static and dynamic sound sources in blind soccer players using a virtual spatial acoustic system. IMEKO 2024 XXIV World Congress, 2024. 8.
25) Tsuji Ayumu, Aihara Shimpei, Tanaka Shotaro, Iwata Hiroyasu. Enhancing sound source localization in blind soccer: analyzing head movement strategies and localization abilities for static and dynamic auditory cues via a virtual spatial acoustic system. IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics 2024, 2024. 10.
26) Yamagishi Takaki, Hagiwara Masahiro, Ando Ryosuke, Shiraki Shunsuke, Henderson Fredrick, Yamashita Daichi. Dose-response relationship between the number of sprint repetitions and physiological and performance adaptations in team-sport athletes. The 29th Annual Congress of the European College of

Sport Science, 2024. 7.

27）Yuda Jun, Yokozawa Toshiharu, Kimura Yuya, Kumagawa Daisuke. Relationship between stroke parameters during the curve phase and performance in 500-m speed skating race of elementary school children. The 29th Annual Congress of the European College of Sport Science, 2024. 7.

1）相原 伸平, 塩野谷 明. Wheel Vision: AIを活用した車いすスポーツのトラッキング技術. 第24回複雑系マイクロシンポジウム, 2025. 2.
2）相原 伸平, 中川 みのり, 小笠原 歩, 柳 等, 桝井 文人. カーリングストーンの挙動を可視化するトラッキングシステムの開発. 可視化情報シンポジウム2024, 2024. 7.
3）足立 梨紗, 小出所 大樹, 中尾 学人, 山形 一真, 谷口 圭吾. 大腿四頭筋の安静時弾性と急速な力発揮を伴う運動パフォーマンスの関係. 第78回日本体力医学会大会, 2024. 9.
4）岩﨑 智也, 野口 渉, 田村 康将, 相原 伸平, 山本 雅人. カーリング得点分布予測モデルの精度向上のための学習手法. カーリング科学シンポジウム2025, 2025. 3.
5）岩﨑 智也, 野口 渉, 田村 康将, 相原 伸平, 山本 雅人. カーリングAIの局面評価関数におけるTransformerの活用. 第5回冬季スポーツ科学シンポジウム, 2024. 11.
6）岩﨑 智也, 野口 渉, 田村 康将, 相原 伸平, 山本 雅人. 現実の試合データによるカーリング得点予測モデル用学習データの作成. スポーツ情報学シンポジウム（第1回スポーツ情報学研究発表会）, 2024. 6.
7）内田 卓郎, 塚越 祐太, 辰村 正紀, 半谷 美夏, 金岡 恒治, 元島 清香. 世界水泳選手権2023福岡大会にて国内初開催されたハイダイビング競技の救護体制及び発生した外傷・障害について. 第35回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.
8）大西 壮流, 竹中 優子, 田中 良, 平川 武仁, 土屋 裕睦. 大学トップレベルのハンドボール選手が捉える試合中の「流れ」. 日本体育・スポーツ・健康学会第74回大会, 2024. 8.
9）大山 貴裕, 田中 彩乃, 樋川 幸平, 小田 桂吾, 大石 徹, 石原 資士, 梶尾 安正, 川道 幸司, 田中 哲平, 中嶋 耕平. レスリング競技大会中における構えによる傷害の特徴（第5報）. 第35回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.
10）緒形 ひとみ, 野上 真央, 吉田 なつめ, 能瀬 さやか, 飯田 忠行. 若年女性の骨密度と運動・月経との関連. 第78回日本栄養・食糧学会大会, 2024. 5.
11）緒方 博紀, 山下 大地, 横澤 俊治, 星川 雅子. エリート女子バスケットボール選手の下肢の力・パワー発揮特性と方向転換能力との関係. 第13回日本トレーニング指導学会大会, 2024. 11.
12）岡元 翔吾, 三浦 佳祐, 佐々部 孝紀, 山﨑 和也, 石田 優子, 池田 克也, 宮本 直和, 古川 信清, 山下 大地. エリートフェンシングチームに対するシーズンを通したノルディックハムストリングエクササイズの実践 －競技活動の離脱を伴う外傷発生が減少した例－. 第13回日本アスレティックトレーニング学会学術大会, 2024. 9.
13）小田 桂吾, 大山 貴裕, 田中 彩乃, 樋川 幸平, 大石 徹, 梶尾 安正, 石原 資士, 田中 哲平, 中嶋 耕平. レスリング競技大会中における傷害発生と減量の関連性についての検討（第3報）男子階級別の検討（第3報）. 第35回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.
14）景行 崇文, 木越 清信, 横澤 俊治. 棒高跳の踏切における踏切脚側下肢三関節のトルク発揮パターン. 日本陸上競技学会第23回大会, 2025. 2.
15）景行 崇文, 後藤 晴彦, 松林 武生. 車いすローラーエルゴメーターを用いた無酸素性パワーテスト中の初期加速局面における速度増加に伴う上肢動作の変容. 第33回日本パラスポーツ学会, 2025. 1.
16）柏木 由美子. ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）における女性アスリートトータルサポートの実施状況. 第35回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.
17）片桐 諒祐, 曽根 忠瑛, 相原 伸平, 河村 隆. デジタルカーリングの今後の構想. 第5回冬季スポーツ科学シンポジウム, 2024. 11.
18）加藤 聡志, 相原 伸平. 機械学習を用いたカーリングストーン衝突後の挙動予測. カーリング科学シンポジウム2025, 2025. 3.
19）鎌田 晃太郎, 山下 大地, 広瀬 統一. 成熟度の異なるアスリートのCounter movement jumpの違いの検討. NSCA ジャパン S&C カンファレンス2024, 2024. 12.
20）鎌田 涼介, 片桐 諒祐, 曽根 忠瑛, 相原 伸平, 河村 隆. UWBを用いた耐オクルージョン性が高いカーリングストーンの位置計測に関する研究. 第25回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会, 2024. 11.
21）鎌田 涼介, 片桐 諒祐, 曽根 忠瑛, 相原 伸平, 河村 隆. UWBとIMUを組み合わせた競技時に測定可能なストーンの位置推定システムの提案. 第2回スポーツ情報学研究発表会, 2024. 11.
22）亀井 明子, 元永 恵子, 中嶋 浩平. パリオリ・パラ大会における村外拠点でのコンディショニングサポート―栄養サポート―. 第35回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.
23）柄木田 健太, 冨永 哲志, 髙橋 由衣, 近藤 みどり, 實宝 希祥, 立谷 泰久. トップアスリートの実力発揮時における認知的評価プロセスの検討. 日本スポーツ心理学会第51回大会, 2024. 9.
24）河邉 裕也, 桝井 文人, 柳 等, 相原 伸平, プタシンスキ ミハウ. 実対戦データを用いたカーリングAIの類似局面検索精度向上と ショット精度改善. カーリング科学シンポジウム2025, 2025. 3.

25）河村 晃宏, 仲道 智郎, 相原 伸平, 倉爪 亮. スポーツクライミングの動作・力情報可視化システム ClimbViS の開発. 第 25 回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会, 2024. 12.
26）倉田 樹, 伊藤 毅志, 相原 伸平. 深層学習を用いたデジタルカーリング AI の開発. スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会）, 2024. 6.
27）栗林 千聡, 井上 和哉, 野口 順子, 衣笠 泰介, Carolina Lundqvist, Paul Wylleman, 久木留 毅. 東京 2020 オリンピック・パラリンピック後のハイパフォーマンスアスリートのウェルビーイング、パフォーマンス、メンタルヘルスの実態 ―保護要因とリスク要因の特定―. 日本心理学会第 88 回大会, 2024. 9.
28）黒田 哲史, 伊藤 毅志, 相原 伸平. 第 3 世代デジタルカーリングシステムの現状と展望. スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会）, 2024. 6.
29）小泉 潤, 後藤 晴彦, 波多野 慶, 松林 武生. 陸上長距離選手の漸増負荷試験時の筋酸素動態. 第 78 回日本体力医学会大会, 2024. 9.
30）小泉 潤, 波多野 慶, 中村 真理子, 松林 武生. ローイング選手の酸素摂取動態の縦断的変化. 第 37 回日本トレーニング科学会大会, 2024. 11.
31）小泉 潤, 山下 湧人, 池島 俊季, 笠原 薫, 黒川 遼太, 長谷 晃希, 刑部 純平, 松本 孝明. 運動時の人の耳介部皮膚温度（サーモカメラ）から直腸温を推定する試み. 第 63 回日本生気象学会大会, 2024. 11.
32）小出所 大樹, 谷口 圭吾, 中尾 学人, 山形 一真, 渡邉 耕太, 片寄 正樹, 寺本 篤史. せん断波イメージングを用いた筋の粘弾性評価 - 静的ストレッチングの効果検証と関節可動性との関係 -. 第 97 回日本整形外科学会学術総会, 2024. 5.
33）小出所 大樹, 中尾 学人, 山形 一真, 足立 梨沙, 石山 輝希, 小澤 和祥, 谷口 圭吾. 超音波せん断波イメージングで得られる筋粘弾性と他動運動時の力－角速度関係との関連. 第 29 回日本基礎理学療法学会学術大会, 2024. 10.
34）小出所 大樹, 中村 真理子, 高橋 佐江子, 岩田 理沙, 玉井 伸典, 笹代 純平, 清水 怜有, 庄子 理絵, 深見 和矢, 中嶋 耕平. 高濃度人工炭酸泉浴が骨格筋の粘弾性に及ぼす影響：超音波せん断波エラストグラフィによる検討. 第 78 回日本体力医学会大会, 2024. 9.
35）後藤 晴彦, 景行 崇文, 門馬 怜子, 山岸 卓樹, 袴田 智子, 松林 武生. パラ陸上競技車いす選手の上肢除脂肪量・筋力・筋パワーと車いすエルゴメータにおけるスプリント能力の関係. 第 37 回日本トレーニング科学会大会, 2024. 11.
36）今野 雄太, 野口 渉, 田村 康将, 相原 伸平, 山本 雅人. カーリングにおける局面重要度定量化のための Leverage Index の導入. カーリング科学シンポジウム 2025, 2025. 3.
37）笹代 純平, 清水 怜有, 深見 和矢, 小宮 諒, 篠原 博, 前田 慶明, 浦辺 幸夫, 中嶋 耕平. 車いすバスケットボール選手に対する VR を用いた眼球運動評価. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.
38）重本 理花, 中嶋 耕平, 西田 雄亮, 橋本 立子, 半谷 美夏. アスリートにおける大腿骨滑車部軟骨損傷症例の検討. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.
39）品川 明穂, 妙圓園 香苗, 高井 恵理, 元永 恵子, 亀井 明子. 男子アーチェリー選手における骨密度および血中骨関連指標の現状. 日本スポーツ栄養学会第 10 回大会, 2024. 9.
40）清水 潤. サイクリング時における OURA ring と Apple Watch を用いた心拍数の測定精度検証. スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会）, 2024. 6.
41）清水 潤, 中村 真理子. ウェアラブルデバイスとソフトウェア・アプリケーションを用いたコンディションモニタリングツールの開発. 日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会, 2024. 8.
42）清水 潤, 山本 悠介, 三浦 友和. LINE を用いたアスリートのコンディション情報管理ツールの開発. 第 2 回スポーツ情報学研究発表会, 2024. 11.
43）清水 怜有, 笹代 純平, 鈴木 章, 中嶋 耕平, 田村 佑樹, 浦辺 幸夫, 前田 慶明, 田城 翼, 有馬 知志, 鈴木 雄太, 堤 省吾. 超音波画像診断装置を用いた車いすバスケットボール選手の肩関節周囲の腱厚や関節裂隙距離の調査. 第 33 回日本パラスポーツ学会, 2025. 1.
44）清水 怜有, 鈴木 章, 高橋 佐江子, 笹代 純平, 深見 和矢, 坂光 徹彦, 鳥居 昭久, 和田 弘, 赤岩 龍士, 玉置 龍也, 渡瀬 由葉, 小倉 小百合. パリ 2024 パラリンピック競技大会に おける村外サポート拠点での活動報告. 第 4 回日本パラスポーツトレーナー学会学術大会, 2024. 11.
45）白井 克佳, 萩原 正大, 原村 未来, 中尾 武平, 手島 和人, 山下 修平. 福岡タレント発掘事業からエリートアスリートに到達した選手における修了時の体格及び体力指標の競技別特性. 日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会, 2024. 8.
46）白木 駿佑, 下山 好充, 窪 康之. 競泳エリートスプリンターの自転車トレーニング－パリ五輪までの事例－. 日本コーチング学会第 36 回学会大会, 2025. 3.
47）塩泡 孝介, 大坪 英則, 鈴木 大輔, 神谷 智昭, 寺本 篤史, 小出所 大樹, 谷口 圭吾, Stecco Carla. ハイドロリリースにより筋膜間の滑走抵抗は低下する～未固定凍結遺体を用いた生体力学試験～. 第 143 回北海道整形災害外科学会, 2024. 6.
48）新谷 拓海, 河村 晃宏, 相原 伸平, 倉爪 亮. スピードクライミングにおける力覚センサ内蔵型ホールド負荷計測システム. 第 25 回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会, 2024. 12.
49）添島 予理, 横田 涼, 田中 彩乃, 石田 優子, 井上 夏香, 高井 恵理, 袴田 智子, 中村 真理子, 宮本 由記, 友利 杏

奈, 半谷 美夏, 白井 克佳, 中嶋 耕平. 産後競技復帰を目指す女性アスリートのトータルサポートの一例. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.

50) 曽根 忠瑛, 古川 萌乃, 相原 伸平, 桝井 文人, 河村 隆. カーリングのスイープ動作とブラシパッドの評価に関する研究 第一報：ブラシパッド用摩擦試験機の製作と摩擦係数の測定. カーリング科学シンポジウム 2025, 2025. 3.

51) 曽根 忠瑛, 古川 萌乃, 相原 伸平, 桝井 文人, 河村 隆. カーリングブラシパッドの動摩擦係数計測を目的とした試験機の開発. 第 5 回冬季スポーツ科学シンポジウム, 2024. 11.

52) 高橋 佐江子, 鈴木 章, 高嶋 直美, 堀田 泰史, 笹代 純平, 久々知 修平, 深見 和矢, 清水 怜有, 田中 彩乃, 庄子 理絵, 樋川 幸平, 坂光 徹彦, 中嶋 耕平. パリオリ・パラ大会における村外拠点でのコンディショニングサポート - ケア・ハイドロセラピー -. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.

53) 高橋 佐江子, 西田 雄亮, 松林 武生, 飯塚 哲司, 今若 太郎, 田中 彩乃, 堀田 泰史, 中嶋 耕平. 膝前十字靭帯再建術後アスリートの大腿四頭筋横断面積の変化. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.

54) 瀧 優太, 青木 尊之, 渡辺 勢也, Tan Hong Guan, 木村 裕也, 山辺 芳. AMR-LBM 法によるスピードスケート・パシュート隊列の空力解析. 第 38 回数値流体力学シンポジウム, 2024. 12.

55) 瀧 優太, 青木 尊之, 渡辺 勢也, Tan Hong Guan, 木村 裕也, 山辺 芳. スピードスケートのダイナミックな空力解析 ―パシュート のプッシュ姿勢―. 日本流体力学会年会 2024, 2024. 9.

56) 立谷 泰久, 阿部 成雄. ハンドボール男子日本代表チームのメンタルサポート ～東京 2020 大会に向けて行った「講習会サポート」～. 日本スポーツ心理学会第 51 回大会, 2024. 9.

57) 辰村 正紀, 内田 卓郎, 塚越 祐太, 半谷 美夏, 金岡 恒治, 元島 清香. 世界水泳選手権 2023 福岡大会・世界マスターズ水泳選手権 2023 九州大会における医事運営. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.

58) 田所 優一, 桝井 文人, 相原 伸平, 柳 等, プタシンスキ ミハウ. カーリングにおける振り返りミーティング支援を目的としたデジタルスコアブックの機能拡張. カーリング科学シンポジウム 2025, 2025. 3.

59) 田所 優一, 桝井 文人, 山本 雅人, 相原 伸平. カーリングミックスダブルスにおける戦術分析 - 先攻一投目の位置が得点に与える影響 -. カーリング科学シンポジウム 2025, 2025. 3.

60) 田中 彩乃, 大山 貴裕, 樋川 幸平, 小田 桂吾, 大石 徹, 石原 資士, 梶尾 安正, 田中 哲平, 中嶋 耕平. レスリング競技大会中における女子選手の外傷・障害発生の特徴（第 2 報）. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.

61) 田中 聡子, 成田 崇矢, 佐藤 圭, 大塚 ひとみ, 池津 真大, 合阪 幸三, 能瀬 さやか. 腹直筋離開を有する妊婦の腹筋運動が腹直筋間距離に与える影響. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.

62) 田中 聡子, 成田 崇矢, 佐藤 圭, 大塚 ひとみ, 池津 真大, 石塚 怜王, 合阪 幸三, 能瀬 さやか. 妊娠後期から産後 6 か月までの尿失禁および腰部骨盤体痛の経時的変化. 第 10 回ウイメンズヘルス・メンズヘルス理学療法研究会学術大会, 2024. 10.

63) 田中 聡子, 成田 崇矢, 佐藤 圭, 大塚 ひとみ, 池津 真大, 吉原 潔, 石塚 怜王, 合阪 幸三, 能瀬 さやか. 腹直筋離開を有する妊婦の腹直筋間距離と腰部骨盤帯痛との関係. 第 32 回日本腰痛学会, 2024. 10.

64) 田中 哲平, 石井 桂輔, 小田 桂吾, 樋川 幸平, 田中 彩乃, 大山 貴裕, 中嶋 耕平. レスリング競技大会中における外傷・障害に対する大規模調査. 第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2024. 11.

65) 谷村 祐子, 清水 和弘, 玉井 伸典, 下山 寛之, 川端 雅人, 木下 訓光. 通常練習期のアスリートにおける腸内細菌叢への影響要因の検討. 第 78 回日本体力医学会大会, 2024. 9.

66) 谷村 祐子, 中野 匡隆. トレーニングに伴う最高酸素摂取量の変化に対する腸内細菌叢の影響. 第 32 回日本運動生理学会大会, 2024. 8.

67) 千葉 麟太郎, 野口 渉, 田村 康将, 相原 伸平, 山本 雅人. デジタルカーリングにおける戦略の獲得に向けた 自己対戦型強化学習. カーリング科学シンポジウム 2025, 2025. 3.

68) 千葉 麟太郎, 野口 渉, 田村 康将, 相原 伸平, 山本 雅人. 新戦術発見のための強化学習によるカーリング戦術 AI の開発. 第 5 回冬季スポーツ科学シンポジウム, 2024. 11.

69) 陳 冠宇, 相原 伸平, 竹川 佳成. Integrating multi-dimensional features and extendable models for curling trajectory prediction. カーリング科学シンポジウム 2025, 2025. 3.

70) 辻 歩, 相原 伸平, 洪 境晨, 劉 超涵, 岩田 浩康. VR 音響システムの構築とブラインドサッカー競技者特有の静止音源定位能力の同定. スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会）, 2024. 6.

71) 辻 歩, 相原 伸平, 田中 翔太郎, 岩田 浩康. VR 音響システムを用いたブラインドサッカー選手の複数種類音源の同時定位能力の解明. LIFE2024, 2024. 9.

72) 辻 歩, 相原 伸平, 田中 翔太郎, 岩田 浩康. ブラインドサッカー選手特有の音源定位能力と頭部動作の可視化と解明. 可視化情報シンポジウム 2024, 2024. 7.

73) 豊島 由佳子, 岩崎 圭祐, 髙垣 智博. CAMBRA を用いたジュニアアスリートのカリエス評価について. 第 161 回日本歯科保存学会 2024 年度秋季学術集会, 2024. 11.

74) 中尾 学人, 小出所 大樹, 山形 一真, 渡邉 耕太, 大崎 雄樹, 片寄 正樹, 谷口 圭吾. ハムストリングス各筋の応力 - 歪み関係：ヒト献体を用いた検討. 第 78 回日本体力医学会大会, 2024. 9.

75) 中尾 学人, 谷口 圭吾, 小出所 大樹, 山形 一真, 渡辺 耕太, 片寄 正樹, 寺本 篤史. 大腿二頭筋長頭の粘弾性に及ぼす膝関節角速度の影響. 第 97 回日本整形外科学会学術総会, 2024. 5.

76）中尾 学人，山形 一真，足立 梨紗，石山 輝希，小澤 和祥，小出所 大樹，渡邉 耕太，大﨑 雄樹，片寄 正樹，谷口 圭吾．大腿二頭筋長頭の力学的特性 ―弾性部位差と伸長速度間の応力差―．第 26 回日本体力医学会北海道地方会大会，2024. 4.

77）中尾 学人，山形 一真，足立 梨沙，石山 輝希，小澤 和祥，奈良 銀二，関口 慶大，小出所 大樹，渡邉 耕太，大﨑 雄樹，片寄 正樹，谷口 圭吾．破断強度からみたハムストリングス各筋の力学的特性評価．第 11 回日本スポーツ理学療法学会学術大会，2025. 1.

78）中尾 学人，山形 一真，足立 梨沙，石山 輝希，小澤 和祥，奈良 銀仁，関口 慶太，小出所 大樹，渡邉 耕太，大﨑 雄樹，片寄 正樹，谷口 圭吾．ハムストリングス各筋の応力は筋の伸長速度に依存する．第 75 回北海道理学療法士学術大会，2024. 11.

79）中尾 武平，萩原 正大，原村 未来，手島 和人，山下 修平，白井 克佳．福岡県タレント発掘事業参加者の追跡データからみた相対年齢効果の縦断的検討．日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会，2024. 8.

80）永尾 雄一．ハイパフォーマンス・スポーツにおける映像システム継続利用規定要因の探索的研究 ―継続例と非継続例の比較からの検討―．日本スポーツ心理学会第 51 回大会，2024. 9.

81）中川 みのり，相原 伸平，山下 大地，神舘 盛充，水村 信二，安井 博志．単眼カメラ映像を用いたスポーツクライミング競技スピード種目の登攀軌跡の可視化．可視化情報シンポジウム 2024, 2024. 7.

82）中川 みのり，相原 伸平，山下 大地，神舘 盛充，水村 信二，安井 博志．単一カメラによるスポーツクライミング競技スピード種目の高精度位置トラッキングシステムの提案と活用．スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会），2024. 6.

83）中島 大貴，堀内 元，木村 新，桜井 伸二．投球とスイングの軌道から見たインパクトで許容されるタイミング誤差．第 30 回日本バイオメカニクス学会大会，2024. 12.

84）中島 大貴，堀内 元，木村 新，桜井 伸二．投球軌道にバットを入れるスイングの優位性．日本野球学会第 2 回大会，2024. 12.

85）中村 寛江，能瀬 さやか，木下 紗林子，小清水 孝子，平池 修．無月経アスリートに対する経皮エストロゲン製剤投与後の骨密度の変化．第 15 回東京大学生殖内分泌研究会，2025. 2.

86）中村 有紀，中村 真理子，岩田 理沙，門馬 怜子，松田 知華，相澤 勝治，鈴木 なつ未．女性アスリート育成パスウェイにおいて考慮すべきコンディショニングの課題の検討．日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会，2024. 8.

87）中山 滉一，小泉 潤，牧野 瑞輝，榎 将太，眞鍋 芳明．スプリントの最大速度・加速能力と下肢の伸展屈曲筋力との関係．日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会，2024. 8.

88）西田 雄亮，高橋 佐江子，鈴木 章，田村 尚之，亀井 明子，立谷 泰久，花岡 裕吉，松林 武生，中嶋 耕平．リハビリテーション期の多職種連携サポートにおける評価指標の検討．第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会，2024. 11.

89）西田 雄亮，西野 衆文，鈴 智美，田中 健太，大西 信三，金森 章浩．ジャンパー膝の発症予測因子 ～超音波と MRI を用いたジャンパー膝検診と前向き調査～．日本スポーツ整形外科学会 2024, 2024. 9.

90）能瀬 さやか．東京・パリパラリンピック候補選手における婦人科受診率の比較 ～ＪＰＣ女性スポーツ委員会の取り組みより～．第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会，2024. 11.

91）萩原 正大，原村 未来，中尾 武平，手島 和人，山下 修平，白井 克佳．エリートアスリートに到達した福岡県タレント発掘事業修了者の中学生期及びシニア期における体格及び体力の特徴．日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会，2024. 8.

92）波多野 慶，後藤 晴彦，小泉 潤，松林 武生．乳酸カーブテストにおける酸素摂取動態の評価．第 37 回日本トレーニング科学会大会，2024. 11.

93）原 流空，相原 伸平，伊藤 毅志．カーリング戦略の高度化を図る単眼カメラを用いたスウィープ解析システム．カーリング科学シンポジウム 2025, 2025. 3.

94）原 流空，相原 伸平，伊藤 毅志．簡易トラッキングシステムを用いたカーリングストーン特性の可視化．スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会），2024. 6.

95）原村 未来，萩原 正大，中尾 武平，手島 和人，山下 修平，白井 克佳．福岡県タレント発掘事業開始時から修了時までの体格及び体力の特性．日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会，2024. 8.

96）樋川 幸平，大山 貴裕，田中 彩乃，小田 桂吾，石原 資士，大石 徹，梶尾 安正，田中 哲平，中嶋 耕平．レスリング競技大会中における外傷・障害発生の特徴（第 4 報） ～脳振盪と脳振盪疑いの発生状況の違いの検討～．第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会，2024. 11.

97）樋川 幸平，高橋 佐江子，清水 怜有，中嶋 耕平．野球投手の Carrying angle の特徴 ～メディカルチェックでの他競技との比較から～．第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会，2024. 11.

98）樋口 那帆，古橋 侑季，池田 涼香，吉田 拓矢，谷川 聡，前村 公彦．スポーツ指導者の跳躍運動に対するパフォーマンス評価能力および動作観察の比較～専門種目・指導経験の差異に着目して～．日本コーチング学会第 36 回学会大会，2025. 3.

99）福嶋 一剛，友利 杏奈，蒲原 一之，中田 由夫．COVID-19 罹患後の日本エリートアスリートにみられる特徴．第 35 回日本臨床スポーツ医学会学術集会，2024. 11.

100）藤本 大地，桝井 文人，相原 伸平，柳 等，プタシンスキ ミハウ．カーリングストーンの挙動データに基く個体差

に関する定量的分析．カーリング科学シンポジウム 2025, 2025. 3.

101）藤原 昌，山下 修平．地域タレント発掘・育成事業における調整力の向上に関する意識調査及び実態調査 - 13 地域を対象としたパイロットスタディー．日本コーチング学会第 36 回学会大会，2025. 3.

102）ヘンダーソン フレデリック，山下 大地．フライホイールデバイスアプリの性能：モーションキャプチャーシステムとの比較．NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2024, 2024. 12.

103）ヘンダーソン フレデリック，山下 大地．慣性負荷と実施方法の違いによるフライホイールスクワット時の力発揮特性．第 13 回日本トレーニング指導学会大会，2024. 11.

104）牧野 瑞輝，瀧川 寛子，松林 武生．男子やり投における個人内での記録の差に影響するキネマティクス．日本陸上競技学会第 23 回大会，2025. 2.

105）桝井 文人，大内 遥斗，吉田 翔稀，柳 等，相原伸平．カーリングにおけるスウィープ効果の定量的分析の試み．第 5 回冬季スポーツ科学シンポジウム，2024. 11.

106）松田 知華，土橋 康平，中村 真理子，能瀬 さやか，品川 明穂，石川 明良，須永 美歌子，後藤 一成．性差が運動誘発性低血糖に及ぼす影響．第 37 回日本トレーニング科学会大会，2024. 11.

107）松林 武生，景行 崇文，山岸 卓樹，後藤 晴彦，門馬 怜子，袴田 智子．ローラーエルゴメータを用いた車いす推進動作の力－速度プロファイリング．第 37 回日本トレーニング科学会大会，2024. 11.

108）三浦 佳祐，池田 克也，山﨑 和也，山下 大地．エリート飛板飛込選手におけるフォースプレートを用いた筋 - 神経系のモニタリングとピーキング戦略 - 世界選手権およびパリ五輪に向けての実践 -. NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2024, 2024. 12.

109）三浦 佳祐，宮本 直和．ノルディックハムストリングの容量減少に伴う大腿二頭筋筋束長・スティフネス・伸張性膝関節屈曲筋力の変化．第 37 回日本トレーニング科学会大会，2024. 11.

110）三浦 智和，山本 悠介．ビデオ即時フィードバックシステムの開発と運用支援．第 32 回冬季スポーツ科学フォーラム，2024. 11.

111）三浦 智和，山本 悠介，岩崎 洋．IoT 技術や P2P 通信等の情報技術を用いたトップスポーツ支援．スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会），2024. 6.

112）水島 諒子，Shi Yutong, Wan Jiawei, 清水 和弘，元永 恵子，亀井 明子，小井土 正亮，玉井 伸典，三ツ橋 利彩，佐久間 彩，早川 竜太，中田 由夫．アスリートを対象とした栄養介入試験による食事バランスガイド遵守スコアの変化．第 78 回日本体力医学会大会，2024. 9.

113）水島 諒子，Shi Yutong, WanJiawei, 清水 和弘，元永 恵子，亀井 明子，小井土 正亮，玉井 伸典，三ツ橋 利彩，佐久間 彩，早川 竜太，中田 由夫．大学サッカー選手を対象とした栄養講習の課題：質的研究．第 71 回日本栄養改善学会学術総会，2024. 9.

114）妙圓園 香苗，飯塚 太郎，朴 柱奉，亀井 明子，中村 真理子．バドミントン日本代表選手における国際大会連戦時の脱水状態の評価．第 78 回日本体力医学会大会，2024. 9.

115）森 遥菜，陳 冠宇，相原 伸平，桝井 文人，竹川 佳成．ストーンの状態にもとづくインタラクティブなストーン挙動提示システム「タブレットストーン」の設計と実装．第 2 回スポーツ情報学研究発表会，2024. 11.

116）森 遥菜，陳 冠宇，相原 伸平，桝井 文人，竹川 佳成．タブレットストーン：ストーンの状態にもとづくインタラクティブなストーン挙動提示システムの提案．スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会），2024. 6.

117）安田 純，妙圓園 香苗，高井 恵理，山下 大地，元永 恵子，亀井 明子．筋肥大応答 High responder 者のたんぱく質摂取状況の特徴：Low responder 者と比較して．日本スポーツ栄養学会第 10 回大会，2024. 9.

118）山形 一真，小出所 大樹，中尾 学人，足立 梨沙，石山 輝希，小澤 和祥，松本 尚，金谷 耕平，谷口 圭吾．等尺性収縮の課題様式の違いが筋弾性に与える影響～循環性要因と筋弾性の関係性に着目して～．第 35 回日本整形外科超音波学会，2024. 10.

119）山﨑 和也，池田 克也，白木 駿佑，田中 修二，西川 直人，秋元 萌子，山岸 卓樹，山下 大地．エリートアスリートにおける Anaerobic Power Reserve の男女別・競技別傾向とトレーニング処方の実際．第 13 回日本トレーニング指導学会大会，2024. 11.

120）山下 修平，和久 貴洋，杉田 正明，尾縣 貢．中央競技団体の事業マネジメント担当者が抱える問題点の検討．日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会，2024. 8.

121）山本 雅人，相原 伸平，田村 康将，野口 渉．ノーティックルールが期待勝率に及ぼす影響について．カーリング科学シンポジウム 2025, 2025. 3.

122）山本 悠介，稲葉 優希，尾崎 宏樹．スノーボードスロープスタイル／ビッグエアにおける生体データと試技映像の同期システムの開発．スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会），2024. 6.

123）山本 梨央，森 遙菜，陳 冠宇，相原 伸平，桝井 文人，竹川 佳成．インタラクティブなストーン挙動提示システム「タブレットストーン」の評価に向けて．第 5 回冬季スポーツ科学シンポジウム，2024. 11.

124）横澤 俊治．効果的なパフォーマンス分析のためのパフォーマンス構造モデルの検討．第 30 回日本バイオメカニクス学会大会，2024. 12.

125）吉田 翔稀，桝井 文人，相原 伸平，柳 等，プタシンスキ ミハウ．ストーントラッキングシステムの支援環境の整備と応用可能性に関する考察．第 5 回冬季スポーツ科学シンポジウム，2024. 11.

126）吉田 翔稀，桝井 文人，相原 伸平，柳 等，プタシンスキ ミハウ．ストーントラッキングシステムの精緻化手法の実装と応用可能性に関する考察．スポーツ情報学シンポジウム（第 1 回スポーツ情報学研究発表会），2024. 6.
127）吉田 拓矢，古橋 侑季，新開 涼介，前村 公彦，小野 誠司，谷川 聡．ドロップジャンプにおける見本映像の視聴がパフォーマンスに即時的な改善を促す際の visual motor behavior の特徴．日本コーチング学会第 36 回学会大会，2025. 3.
128）吉田 雄大，相原 伸平．機械学習を用いたボール投げ動作の技能評価と評価ポイントの可視化．可視化情報シンポジウム 2024, 2024. 7.

7．講習会・研修会

1）江夏 直子．アスリートのための食事の基本ジュニア版（基礎編・実践編）．HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム，2025. 2.
2）江夏 直子．アスリートのための遠征時の食事．HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム，2025. 2.
3）江夏 直子．アスリートのための食事の基本ジュニア版（基礎編・実践編）．HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム，2025. 1.
4）江夏 直子．アスリートのための遠征時の食事．HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム，2025. 1.
5）大石 益代．他分野から見た公認スポーツ栄養士の役割．令和 6 年度日本スポーツ協会公認スポーツ栄養士養成講習会，2024. 11.
6）大石 益代．パラアスリートへのトレーニング指導の理論と実践．令和 6 年度とちぎスポーツ医科学センター主催講習会，2024. 11.
7）大坪 香菜子，齊藤 千波，立谷 泰久，冨永 哲志．アスリートのためのメンタルトレーニング応用編．HPSC パッケージ心理分野 研修プログラム，2025. 3.
8）大坪 香菜子，齊藤 千波，立谷 泰久．国立スポーツ科学センター（JISS）心理グループ「HPSC ネットワーク事業 ～ HPSC パッケージの紹介～」．2024 年度スポーツメンタルトレーニング（SMT）指導士関東地区研修会，2025. 2.
9）大坪 香菜子，柄木田 健太，齊藤 千波，立谷 泰久，冨永 哲志．アスリートのためのメンタルトレーニング基礎編．HPSC パッケージ心理分野 研修プログラム，2024. 6.
10）尾崎 宏樹．「パリ 2024 大会を振り返って」JSC サポート拠点の取り組みについて．2024 年度 JOC ナショナルコーチアカデミー リフレッシュ研修，2024. 9.
11）勝田 隆，久木留 毅，和久 貴洋，山下 修平．共通科目Ⅳ講習会（第 2 会場）．令和 6 年度日本スポーツ協会公認コーチ 4・上級教師養成講習会，2024. 10.
12）勝田 隆，久木留 毅，和久 貴洋，山下 修平．共通科目Ⅳ講習会（第 1 会場）．令和 6 年度日本スポーツ協会公認コーチ 4・上級教師養成講習会，2024. 9.
13）蒲原 一之．「スポーツ栄養マネジメント」生理・生化学検査、臨床診査理論．令和 6 年度日本スポーツ協会公認スポーツ栄養士養成講習会，2024. 6.
14）蒲原 一之，友利 杏奈，福嶋 一剛，熊井 康こ．大会救護と救急医療．令和 6 年度日本スポーツ協会公認スポーツドクター養成講習会，2024. 12.
15）上東 悦子．アンチドーピング規則の理解．令和 6 年度公認スケートコーチ 3 専門科目オンライン講習会（フィギュアスケート），2024. 6.
16）上東 悦子．アンチ・ドーピングについて．令和 6 年度日本スポーツ協会公認スポーツ栄養士養成講習会，2024. 10.
17）亀井 明子．スポーツ現場における食環境整備．令和 6 年度日本スポーツ協会公認スポーツ栄養士養成講習会専門科目＜中期＞講習会，2024. 6.
18）柄木田 健太．緊張の仕組みを理解し、パフォーマンス発揮につながる心理状態を探る．ジュニアアスリート指導者研修会，2025. 1.
19）衣笠 泰介．アスリート育成パスウェイの理論と実践．令和 6 年度 JOC ナショナルコーチアカデミー集中講義，2025. 1.
20）衣笠 泰介．ジュニア期のスポーツ特性：ハイパフォーマンススポーツへの パスウェイについて考える．日本バスケットボール協会 2024 年度ジュニアエキスパート養成講習会，2025. 1.
21）衣笠 泰介．LTAD：長期的視点を持ってハイパフォーマンスまでの / からのパスウェイを考える．日本バスケットボール協会 2024 年度 S 級コーチ養成講習会，2024. 7.
22）木村 裕也．スポーツ科学：測定評価演習Ⅰ．日本スケート連盟スピードスケートエリートアカデミー講義，2024. 9.
23）木村 裕也．チームパシュート データ分析の実際②（風洞実験）．日本スケート連盟スピードスケートナショナルチームチームパシュート対策セミナー，2024. 9.
24）金原 聖，田中 仁，宮﨑 大地，稲川 祥史．映像サポート入門 Ⅱ ～実技から学ぶ撮影テクニック～．ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 BASIC 冬，2025. 2.
25）金原 聖，田中 仁，宮﨑 大地，稲川 祥史．映像サポート入門 Ⅱ ～実技から学ぶ撮影テクニック～．ハイパフォ

ーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 BASIC 春 , 2024. 5.
26）近藤 知佳 . アスリートのための貧血予防 . HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム , 2025. 2.
27）近藤 知佳 . アスリートのための水分摂取・脱水対策 . HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム , 2025. 2.
28）近藤 知佳 . アスリートのための食事の基本 . HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム , 2025. 2.
29）近藤 知佳 . アスリートのための食事の基本 . HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム , 2025. 1.
30）近藤 みどり . コーチングにおけるメンタルサポート：感情のコントロール . 令和 6 年度選手強化指導者研修会 , 2024. 11.
31）近藤 みどり . 緊張下でパフォーマンスを発揮するために . ひろしまスポーツアカデミープログラム , 2024. 10.
32）清水 和弘 . 運動と免疫 . 健康運動指導士更新必修講座 , 2025. 2.
33）清水 和弘 . 免疫機能からみたアスリートのコンディショニング . 第 59 回全国高等学校体育連盟研究大会 , 2025. 1.
34）清水 和弘 . 運動と免疫 . 健康運動指導士更新必修講座 , 2024. 12.
35）清水 和弘 . HPSC が推進するアスリートのためのトータルコンディショニング . 日本陸上競技連盟指導者セミナー , 2024. 11.
36）清水 和弘 . HPSC が推進するトータルコンディショニング . 第 78 回国民スポーツ大会（SAGA2024）ドクターズ・ミーティング , 2024. 9.
37）清水 和弘 . HPSC が推進するアスリートのためのトータルコンディショニング . 第 13 回日本アスレティックトレーニング学会学術大会 , 2024. 9.
38）清水 和弘 . 運動と免疫 . 健康運動指導士更新必修講座 , 2024. 7.
39）清水 潤 , 山本 悠介 . 実践で学ぶ Web スクレイピング . ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 プログラミング ADVANCE, 2024. 11.
40）清水 潤 , 山本 悠介 . ゼロから学ぶ Python プログラミング入門 . ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 プログラミング BASIC, 2024. 11.
41）立谷 泰久 . 日本代表チームの メンタルサポート . スポーツメンタルトレーニング（SMT）指導士関東地区研修会 , 2025. 2.
42）立谷 泰久 . スポーツ相談の実際 . 令和 6 年度日本スポーツ協会公認スポーツプログラマー養成講習会 , 2025. 1.
43）田中 仁 , 金原 聖 , 宮﨑 大地 , 稲川 祥史 . 映像サポート入門 Ⅲ ～映像データを活かすノウハウ～ . ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 BASIC 冬 , 2025. 2.
44）田中 仁 , 金原 聖 , 宮﨑 大地 , 稲川 祥史 . 映像サポート入門 Ⅲ ～映像データを活かすノウハウ～ . ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 BASIC 春 , 2024. 5.
45）田中 友丈 . 映像・情報技術を活用したハイパフォーマンススポーツ支援 . スポーツ健康科学特殊講義Ⅱ（ハイパフォーマンススポーツの科学）, 2024. 11.
46）田村 尚之 .「動きの改善」～トレーニングエクササイズから見た動作の強化～ . 山口県スポーツ協会　令和 6 年度フィジカルトレーニング講習会 , 2024. 10.
47）田村 尚之 . ウエイトトレーニングの効果的な導入方法 . とちぎスポーツ医科学センター主催トレーニング指導講習会 2023, 2024. 6.
48）冨永 哲志 . 実力発揮に役立つメンタルトレーニング―自分に合う技法を身につけよう―. 令和 6 年度みやぎジュニアトップアスリートアカデミー育成プログラム , 2025. 2.
49）永尾 雄一 . 医・科学サポート論ー情報戦略 情報戦略活動の環境づくり . 令和 6 年度 JOC ナショナルコーチアカデミー集中講義 , 2025. 2.
50）永尾 雄一 . ゲーム分析 ～スマホアプリを使った簡易ゲーム分析～ . ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 BASIC 冬 , 2025. 2.
51）永尾 雄一 . ゲーム分析講座 ～ゲーム分析の計画からフィードバックまで～ . ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 ADVANCE 冬 , 2025. 2.
52）永尾 雄一 . モチベーションビデオ作成講座 ～編集技術の実践活用～ . ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 ADVANCE 冬 , 2025. 2.
53）永尾 雄一 . 体育授業に活用できる映像技術 . 静岡大学大学院教科内容演習 B（保健体育）, 2024. 11.
54）永尾 雄一 . ゲーム分析 ～スマホアプリを使った簡易ゲーム分析～ . ハイパフォーマンススポーツのための映像・IT アカデミー DiTS2024 BASIC 春 , 2024. 4.
55）能瀬 さやか . 女性スポーツ医学 . 日本スポーツ協会女性スポーツサポート研修会 , 2025. 3.
56）能瀬 さやか . 女性アスリートへのサポート活動 . 第 14 回早稲田大学・札幌医科大学スポーツ医科学合同研究会 , 2025. 3.
57）能瀬 さやか . 女性アスリートの健康課題と支援体制 . 静岡県医師会スポーツ医学研修会 , 2025. 3.
58）能瀬 さやか . 婦人科疾患に対するホルモン製剤の使い方～低用量ピルの使い方を中心に～ . 星薬科大学 薬剤師生涯学習 , 2025. 3.
59）能瀬 さやか . スポーツや医療現場における 女性の健康課題と取り組み . 厚生労働省スマートライフプロジェクト事業 令和六年度女性の健康週間 記念イベント , 2025. 3.
60）能瀬 さやか . 女性アスリートの外傷・障害予防 ～産婦人科医の立場から～アスリートに多い無月経の原因と治療

. メディセオ生涯学習講座 MP ラーニング , 2025. 3.
61）能瀬 さやか . 女性アスリートにおける月経随伴症状への対策 . メディセオ生涯学習講座 MP ラーニング , 2025. 3.
62）能瀬 さやか . 全ての女性の未来につながるヘルスケア支援 . 明治流通関係者向けセミナー , 2025. 2.
63）能瀬 さやか . スポーツに取り組む子供たちの今と未来の健康を守るために . 全国養護教諭連絡協議会第 30 回研究協議会 , 2025. 2.
64）能瀬 さやか . 女性アスリートの無月経や月経随伴症状に対する治療 . 女性アスリート健康支援委員会 令和 6 年度女性アスリート診療のための講習会（産婦人科医向け）, 2025. 2.
65）能瀬 さやか . アスリートと月経 . 広テレゼミナール , 2025. 2.
66）能瀬 さやか . 月経の基礎知識 . JPC 女性スポーツ委員会ユース研修会 , 2025. 2.
67）能瀬 さやか . 女性アスリートのコンディショニング . 日本トップリーグ連携機構（バスケットボール女子日本リーグ /W リーグ）, 2025. 1.
68）能瀬 さやか . 女性スポーツ医学 . 日本スポーツ協会女性スポーツサポート研修会 , 2025. 1.
69）能瀬 さやか . 女性とスポーツ . 第 30 回日本医師会認定健康スポーツ医制度再研修会 , 2025. 1.
70）能瀬 さやか . 女性アスリートに対する障害予防・コンディショニング . 第 11 回日本スポーツ理学療法学会学術大会 , 2025. 1.
71）能瀬 さやか . 女性アスリートの外傷・障害予防 ～産婦人科医の立場から～ . WeSUP.（ウィサポ）(広島）, 2025. 1.
72）能瀬 さやか . 月経の基礎知識 . JPC 女性スポーツ委員会セミナー , 2025. 1.
73）能瀬 さやか . 女性アスリートの健康管理 . 日本プロゴルフ協会新人セミナー , 2024. 12.
74）能瀬 さやか . 女性アスリートのコンディショニング . いしかわスポーツ医・科学情報サポート事業 , 2024. 12.
75）能瀬 さやか . 女性アスリートの健康管理～月経対策を中心に～ . Korean Sport & Olympic Committee, 2024. 12.
76）能瀬 さやか . 女性水泳選手の健康問題 . 日本水泳連盟 Women’s Health Project for Japanese Swimmers, 2024. 11.
77）能瀬 さやか . 女性アスリートの健康問題～プレコンセプションケアから妊娠・産後まで～ . 第 22 回妊婦授乳婦・小児科領域研修会 , 2024. 11.
78）能瀬 さやか . 女性アスリートのコンディショニング . WeSUP.（ウィサポ）(広島）, 2024. 10.
79）能瀬 さやか . 思春期女子とスポーツ . 第 92 回思春期保健セミナー , 2024. 9.
80）能瀬 さやか . 女性アスリートのコンディショニング . 日本競輪協会講習会 , 2024. 7.
81）能瀬 さやか . 女性アスリートのコンディショニング . 日本トップリーグ連携機構（バレーボールリーグ）講習会 , 2024. 7.
82）能瀬 さやか . 女性とスポーツ . 公認上級パラスポーツ指導員養成講習会 , 2024. 7.
83）能瀬 さやか . 女性アスリートのコンディショニング . 日本トップリーグ連携機構（バレーボールリーグ）講習会 , 2024. 6.
84）能瀬 さやか . 女性とスポーツ . パラスポーツコーチ養成講習会 , 2024. 6.
85）能瀬 さやか . 婦人科疾患に対するホルモン製剤の使い方～低用量ピルの使い方を中心に～ . 星薬科大学認定薬剤師研修 , 2024. 4.
86）半谷 美夏 . パリオリンピックにおけるメディカルサポート . 茨城県医師会健康スポーツ医学研究会 , 2025. 2.
87）半谷 美夏 . スポーツ医学基礎（整形外科）. 2024 年度スポーツ栄養ベーシック＜オンライン＞講習会 , 2024. 12.
88）半谷 美夏 . 頚椎のスポーツ外傷・障害 . 日本整形外科学会第 51 回スポーツ医学研修会各論 , 2024. 9.
89）星川 雅子 . アスリートのコンディショニング ―国立スポーツ科学センターにおける事例―. 令和 6 年度鹿屋体育大学健康セミナー , 2024. 12.
90）星川 雅子 . コンディショニング―主に睡眠の視点から―. 令和 6 年度日本スポーツ協会公認パラスポーツトレーナー養成講習会 , 2024. 8.
91）星川 雅子 . 睡眠とスポーツ . 東京都体育協会令和 6 年度トップアスリート発掘・育成事業 , 2024. 6.
92）星川 雅子 . アスリートの睡眠管理 . 第 74 回サッカードクターセミナー , 2024. 4.
93）堀田 泰史 . パリオリンピック　男子サッカー帯同報告 . JFA アスレティックトレーナーセミナー , 2025. 2.
94）松田 侑未子 . アスリートのための試合期の食事 . HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム , 2025. 2.
95）松田 侑未子 . アスリートのためのウエイトコントロール（減量編・増量編）. HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム , 2025. 2.
96）松田 侑未子 . アスリートのための試合期の食事 . HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム , 2025. 1.
97）松田 侑未子 . アスリートのための試合期の食事 . HPSC パッケージ栄養分野 研修プログラム , 2024. 11.
98）三浦 佳祐 . 育成年代における S&C の導入とプログラムデザイン ～環境や時間の制約を考慮した優先順位の設定～ . NSCA ジャパン×プロ野球 S&C 研究会合同セミナー , 2025. 1.
99）元永 恵子 . スポーツ医学 障がい者スポーツ . 令和 6 年度日本スポーツ協会公認スポーツ栄養士養成講習会専門科目＜後期＞講習会 , 2024. 10.
100）山下 大地 . これからの日本の S&C コーチに求められるスポーツ科学者的な資質とは？ . NSCA ジャパン S&C カンファレンス 2024, 2024. 12.
101）山下 大地 . 医・科学サポート論 トレーニング . JOC ナショナルコーチアカデミー , 2024. 11.

102）山本 悠介．スポーツ情報処理Ⅰ．日本スケート連盟スピードスケートエリートアカデミー講義，2024. 7.
103）和久 貴洋．スポーツ政策立案におけるエビデンス・情報の活用．令和 6 年度第 2 回地域スポーツイノベーションカレッジ，2024. 9.
104）和久 貴洋．イノベーション概論．令和 6 年度第 1 回地域スポーツイノベーションカレッジ，2024. 6.
105）和久 貴洋．スポーツ政策立案で押さえるべきこと―データにみるスポーツの価値．令和 6 年度第 1 回地域スポーツイノベーションカレッジ，2024. 6.

8．受賞

1）Aihara Shimpei, Chen Guanyu, Hara Riku, Nakagawa Minori, Ogasawara Ayumi, Yanagi Hitoshi, Takegawa Yoshinari, Ito Takeshi, Masui Fumito. Best Paper Award. 12th International Conference on Sport Sciences Research and Technology Support, Development of a Simple Tracking System to Monitor Curling Stone Dynamics, 2024. 11.
2）Iwata Risa, Yamamoto Yusuke, Nakamura Mariko, Takai Eri, Takahashi Yui, Ozaki Hiroki. 10th International Congress on Science and Skiing Young Investigator Awards. 10th International Congress on Science and Skiing, 2025. 2.

1）相原 伸平．学術奨励賞・技術奨励賞．計測自動制御学会，Wheel Tack：車いすスポーツの直進性と旋回性をセンシングする単眼ビジョンシステム，2025. 3.
2）相原 伸平．優秀プレゼンテーション賞．第 24 回 複雑系マイクロシンポジウム，Wheel Vision: AI を活用した車いすスポーツのトラッキング技術，2025. 2.
3）相原 伸平．システムインテグレーション部門若手奨励賞．計測自動制御学会，Wheel Tack: 車いすスポーツの直進性と旋回性をセンシングする単眼ビジョンシステム，2024. 12.
4）相原 伸平．第 40 回センシングフォーラム研究奨励賞．計測自動制御学会，車いすスポーツにおける単眼カメラを用いたトラッキングシステムの開発，2024. 9.
5）石橋 彩，東 泰之，白井 克佳，亀井 明子．2024 年度日本スポーツ栄養学会奨励賞．特定非営利活動法人日本スポーツ栄養学会，トップアスリートサポートシステムを用いたフェンシング日本代表選手 1 名に対する減量サポートとその後のコンディション管理，2024. 9.
6）小野寺 峻一，河合 季信．奨励賞．日本コーチング学会，スピードスケート競技初心者におけるグライド局面初期の着氷動作に対する短期間でのコーチング事例―選手とコーチの相互作用に焦点を当てて―，2025. 3.
7）河村 晃宏，仲道 智郎，相原 伸平，倉爪 亮．SI2024 優秀講演賞．計測自動制御学会，スポーツクライミングの動作・力情報可視化システム ClimbViS の開発，2024. 12.
8）久保田 潤．優秀トレーニング指導者表彰．特定非営利活動法人日本トレーニング指導者協会，2024. 6.
9）白井 克佳，花岡 裕吉，原 将史，中村 有紀，清水 和弘，久木留 毅，赤間 高雄．2023 年度 (第 9 巻) 優秀論文賞．日本アスレティックトレーニング学会，第 32 回オリンピック競技大会（2020/ 東京）メダル獲得上位国の事前合宿における コンディショニング戦略と競技成績の関係，2024. 9.
10）新谷 拓海，河村 晃宏，相原 伸平，倉爪 亮．SI2024 優秀講演賞．計測自動制御学会，スピードクライミングにおける力覚センサ内蔵型ホールド負荷計測システム，2024. 12.
11）曽根 良太，眞下 苑子，玉井 伸典．ポスター賞．日本唾液ケア研究会，エリートバレーボール選手の強化遠征中の唾液中 SIgA の特徴，2024. 11.
12）玉井 伸典，玉井 清志，清水 和弘．若手優秀演題賞．日本疲労学会，高・中・低強度運動負荷および暗算負荷が唾液中ヒトヘルペスウイルス 6・7 型濃度に及ぼす影響－ランダム化クロスオーバー比較試験による検討―，2024. 6.
13）中尾 学人，山形 一真，足立 梨紗，石山 輝希，小澤 和祥，小出 所大樹，渡邉 耕太，大﨑 雄樹，片寄 正樹，谷口 圭吾．学術奨励賞．日本体力医学会第 26 回北海道地方会，大腿二頭筋長頭の力学的特性―弾性部位差と伸長速度間の応力差―，2024. 4.
14）中島 大貴，堀内 元，木村 新，桜井 伸二．奨励賞．第 30 回日本バイオメカニクス学会大会，投球とスイングの軌道から見たインパクトで許容されるタイミング誤差，2024. 12.
15）能瀬 さやか．日本オリンピック委員会女性スポーツ賞．日本オリンピック委員会，2024. 6.
16）三浦 佳祐，宮本 直和．若手研究奨励賞大賞．日本トレーニング学会，ノルディックハムストリングの容量減少に伴う大腿二頭筋筋束長・スティフネス、伸張性膝関節屈曲筋力の変化，2024. 11.
17）森 遥菜，陳 冠宇，相原 伸平，桝井 文人，竹川 佳成．第 1 回スポーツ情報学研究発表会 優秀発表賞．情報処理学会，タブレットストーン：ストーンの状態にもとづくインタラクティブなストーン挙動提示システムの提案，2024. 11.
18）吉田 拓矢，古橋 侑季，新開 涼介，前村 公彦，小野 誠司，谷川 聡．優秀発表賞．日本コーチング学会第 36 回学会大会，ドロップジャンプにおける見本映像の視聴がパフォーマンスの即時的な改善を促す際の visual motor behavior の特徴，2025. 3.

9. 産業財産権

1）相原 伸平, 中川 みのり. 独立行政法人日本スポーツ振興センター, 物体位置検出システム、物体位置検出装置、物体位置検出方法、および学習装置, 特許 7634295, 2025. 2.

2）相原 伸平, 吉田 雄大, 塩野谷 明, 松原 敏成. 独立行政法人日本スポーツ振興センター, 姿勢推定装置、姿勢推定システム、姿勢推定方法、学習装置、及び学習済みモデル, 特許 7594778, 2024. 11.

3）松林 武生. 独立行政法人日本スポーツ振興センター, 画像処理装置、画像処理システム、画像処理方法およびそのプログラム, 特許 7628739, 2025. 2.

独立行政法人日本スポーツ振興センター
ハイパフォーマンススポーツセンター年報 2024

2025年7月発行

編集発行　独立行政法人日本スポーツ振興センター
ハイパフォーマンススポーツセンター
〒115-0056　東京都北区西が丘3丁目15番1号
TEL.03-5963-0200　FAX.03-5963-0244
URL https://www.jpnsport.go.jp/hpsc/

印　刷　株式会社丸産
〒174-0053　東京都板橋区清水町88-6
TEL.03-3962-6510(代)　FAX.03-3962-3864

※掲載内容についてのお問い合わせは、上記ハイパフォーマンススポーツセンターホームページの「よくあるご質問」を先に御覧ください。
※本誌は、国等による環境物品等の調達の推進等に関する法律（グリーン購入法）に基づく基本方針の判断の基準を満たす紙を使用しています。

HPSC JAPAN HIGH PERFORMANCE SPORT CENTER

JAPAN SPORT COUNCIL

